毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢



明治三十年十二月十五日發行

第百拾壹號

重要目録

大日本女學會

會員募集廣告

總裁　小松宮妃殿下　副總裁　鍋島侯爵夫人

●本會贊成員は有栖川宮大妃殿下　華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨　本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すべき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は務めて平易懇到を旨とし實踐の用に應じ輕佻の風を避け以て賢貞淑の品性を涵養せむことを期す●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれば今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より送本差支なし●●本會講義錄は女學講義と稱し畏くも　皇后陛下の叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして每月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月三十錢束修三十錢●會則希望者は郵券貳錢添へて申込みあれ

學科及び講師　●修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て演說せられたるものに係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭●國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理萬國地理)富田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤　工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定●家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝(活花點茶)田邊東京女學館講師●●●史戰、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●お伽譚、漣山人●詞藻●質問應答●雜錄●雜報

第一卷既に發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地

大日本女學會

家庭雜誌春期大附錄（百十二號）

山家のもてなし　江見水蔭

未定　蘆花生

雪籠り　松原二十三階堂

未定　金子春夢

外に二三の大家と相談中なれば決定の上廣告すべし

發行所　東京日吉町　家庭雜誌社

再版!!!

名家紀行文選

定價卅錢　郵税四錢

讀賣評　或は物故したる或は現存する明治漢文家の紀行に關する名什妙編を假名交り文に書き直したるものなり諸名家の作を蒐集したるものなれば其文章の趣味も一々異りて流麗なるあり勁拔なるあり雄大なるあり淸楚なるあり初めは假名交り文に直したるものなれば名玉に瑕付くるの恐れなきかを疑ひしも讀むに難澁なき丈け却て德用と覺えたり

朝日評　拙堂、一齋、鵜梁、艮齋の紀行文八十三篇を輯めて一冊となす忽ちにして高山大澤忽ちにして長林曠野或は花の爛熳たるあり或は月の淸朗たるあり讀來て卷の終るを覺えず

塚越芳太郎著

熊澤蕃山

印刷中

發行所　東京市京橋區日吉町　民友社

品切の處　重版出來

徳富猪一郎著

家庭小訓

定價十二錢　郵税二錢

同

吉田松陰

定價五十錢　郵税八錢

發行所　東京日吉町　民友社

速記法

自宅獨習生　募集　月謝二十錢　二ヶ月卒業

○規則入用者は郵券二錢を投ずべし

東京下谷區徒士町二丁目三十番地

速記學專修所

家庭雜誌

定價表　九月ヵ改正

	前金	市外郵税共
一冊……	拾錢	十一錢三厘
六冊……	五拾七錢	六拾錢
十二冊……	壹圓八錢	壹圓廿錢

十二冊以上一冊九錢の割市外は別に要郵税

廣告料　一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌　九月以後毎月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

發行兼印刷人　吉崎圓吉
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十年十二月十五日發行

家庭雜誌第百拾壹號

目録



家庭雜誌第百十一號

（明治三十年十二月十五日發兌）

社説

言語として戲言

禮は和を貴しとすると古今に通じて易ゆべからざる道理にして、四角四面にいつも苦蟲を嚙み潰ぶし居るとの禮に反けるとは言ふまでもなし、されど世俗の好みて用ゆる所の戲言には、極めて鄙俚にして紳士貴女の耳に入るべからざるも多く、神經家もしくは御幣擔ぎの人を頭痛せしむるも多し。而して戲言中にて最も避けざるべからざるは、直に實務に影響するの戲言なりとす。

例へば甲の家の娘が緣付かんとするの際、乙の家の細君に向つて、甲家の娘の嫁入着物は、貴方に仕立を賴むとの事なりと戲言する者あらば如何。乙家の細君最初より其戲言たるとを看破すれば、更に差支なけれども、自負心は何人にもあるとなれば、己れが裁縫の下手なるをも顧みず、嫁入着物ぐらゐは立派に仕立て、見せると賴みに來るを待ち搆へ居らぬとも限らず。待ち搆へ居るところへ賴みに來らぬときは、我腕前を信用せざるにや、我に賴まずして他へ變換したるは、我よりも他を上手なりと思へるにや、大に我を蔑みたる振舞なりと腹立てぬとも限らず。斯くては一の戲言より三方四方に故障を生ずる次第にて、誠に穩かならぬ事共なり。これ唯だ極めて卑近なる一例に過ぎざれども、世間に此類の間違ひ甚だ多きは實に歎ずべきとにあらずや。

戲言の最初より戲言らしきは、戲言の上乘にあらざるべし。されども聽者をして聽き了りて後までも戲言と思はしめざるは、更に不出來なる戲言なり。此頃記者

の近隣の小兒が學校にて先生より明日は運動會ゆゑ其用意して來れと命ぜられたりとて、其翌日晴衣を着て辨當など持參したるに、先生は運動會と言ひしは戯言なりしと笑ひたりとの事にて、其小兒の祖母が大に腹立ち居たるを見たり。平生生徒に向つて、狼來れり〳〵の戯言を屢とする者ありしが、眞に狼の來りしとき如何に叫びても其効なく、遂に狼に嚙み殺されたりとの訓戒を垂るゝ教師にして、自ら實際に故障を生ずる如き戯言を吐くは、實に言語同斷と言はざるべからず。

嗚呼戯言難し、鄙猥なるは惡しく、忌諱に觸るゝは惡しく、實務に影響するは大に惡し。唯だ單純、輕快、無邪氣にして、何人にも快感を與ふるものにして、戯言の上乘と云ふべし。

論説

婦女の道

野口勝一閲
金成磐峰稿

（中）妻となりし時の心得

人の此世に生るゝや、誰しも必らず三の坂路を越へさるものはあらじ、何をか三の坂路と申すへきや、其一に家庭の坂、次に社會の坂、次に人の第一にふむへきは、家庭の坂にして、家庭の坂こそ、夫婦の契り成りて、初て生じ、實に夫妻にて、築かれたり、社會の坂は、即ち此の家庭の坂の、集りて造られたるものに候、然らは、女子の初めて人の妻となりし時、如何にして美しき家庭を造り、如何にして貞妻と慕はれんとを願はんか、貞妻とは、即ち處女たるもの丶一歩進んて、

人の妻となりし事にて、夫に事ふるに、節正しく、能く和らぎ敬ひ、從ひ申すべし、如何なることありとも、顏色をかへ、言葉あらく、無禮などあるべからじ、夫もし敎あらば、能くその敎へを守るべし、女子は大抵他家へ嫁すべきものに候へば、嫁せし家を我が家とし、舅姑に事ふること、眞實の父母に事ふると同しく、假令ひ舅姑の訓へ正しきとて、其敎へに耐へ兼て、舅姑を恨み、謗るは、大なる過まりにして、之れ我が親の敎なきを表はし、皆我か身の耻辱に候、夫に兄弟姉妹あらば、我が兄弟の如く打ち解て親しみ敬ひ愛して、決して隔て在るまじく候、

女子は、一度嫁して後は、夫の家を家とし、夫を我が主君となし、常に禮義正しく、假にも狎れ狎れしく、亂らなるべからじ、夫の家假令ひ貧賤なりとも、我家の事をほこり語りて、夫の耻となるか如きことあるべからじ、況して我郷里に行き夫の家のこと彼れ此れと、樣樣に語るべからじ、父母はその子の可愛きがまゝ、遂その夫の家の内の事までも、指圖を爲し、餘計なる世話をやきて、其夫の一家の躰面をも失はしめ、終に之か爲め、不和仲違ひとなるものあり、親しき内にも、垣を爲よと愼しみ、戒しむべきことに候、

親類緣家へは、時々音問を爲し、若し災難に逢ひし時などは、能く勞はり慰さめ、又慶こびあらば、共に悅こび、親しき上にも親しく、睦ましき上にも睦ましきこそ、賴母しけれ、近所隣家とても、親しく交はり、如何なる義理にても、止み難き事ありとても、打すてて行くべし、左れど何の用もなきに、妄りに足先を向け、何の益もなく、日間を費やし、人にも日間を缺かせ、仕事の邪魔なとして、終に人に疎まれ、人に嫌はるゝか如きこと、あるまじく候、先つ他の家へは使にて濟むべき用事は、成るべく使を遣すべく、總してこれ等のことは、皆夫若くは、舅姑あらば、能くその敎を

承け申べく候、
夫の他へ行くとき、他より歸りし時は、別して和らき送り迎ひ申すべく、夫もし他出して、不在なるとき、又忙はしき時は、心正しく怠たりなく、夫に代りてその用事を爲し、且つ來り訪ふ人あらば、差支なき限りは、その用事を濟まし、總て夫の手の省ける樣、心掛け申すべく候、夫留守なりとて、夫の目を偸みて、怠たり遊び、或は夫の名を汚すが如きことあるまじ、之れ夫の身を傷むる蟲と申すものに候、世には夫の留守を見はかり、不義密通などするものあり、此るものは人の人たる道も、夫妻の道をも知らざる、鳥獸にも、劣る賤しきものに候、
夫もし品行善からざる時、又は事に仕損じ、艱難に逢ひし時には、顏色を和らき、言葉靜かに、能く勞はり、諫さめ申すべく候、假令ひ品行惡きとて、嫉妬の心發し、怒り恨み申すまじく、夫其諫めを聞入すして怒らば、暫らく忍ひて後徐かに、諫め申すべし、氣色暴く逆ふは、萬々惡しきことに候、

女子は一度人の妻となりて、再ひ他の妻と爲ることは、古しへより女子の耻辱と爲したり、中世に於ては、其齒を黑く染め、眉を剃りて、固く人の妻たることを現はしゝが、今の世は、かゝることを爲すもの少なけれとも、其身の耻となることは、何時の世に於ても、同じきことに候、然らば女子は人の妻となる、その初めに於て、能くその夫を撰らび、妻となりては、能く愼しみ申すべく候、

人を使へば、苦を使ふとかや、下男下女を使ふには、第一規律を正ふし、家風を守らし、規律なく家風を亂すなどのことあるべからじ、常に自から先立ちて、事を爲し、餘り寛やかに過ぐべからじ、狎し狎れしくなりて、其命に從はじ、又嚴しきに過ぐべからじ、怨を受け、反て怠たり制すべからさるに至るべければ、能く

心を用ひ、締り能く使ふべし、凡て人に使はるゝものは、多くは教なきものなれば、從てその話しも眞實のこと少なく、事の善し惡しも辨へなければ、其言葉を信じて、人を恨み怒るまじ、愚かなる妻は下女と狎れ狎れしく、夫の家のこと、隣家のこと、彼れ此れ語り、又その言ふことを輕かるしく信じて、甚たしきは舅姑と言葉もまじへず、果ては夫に嫌はれ、他人にも怨を受けるものあり、愼しむべきことに候、若し多言にして、愼しみなきもの不行儀にして取締りなきものは、假令忠實しく、能く働らき我氣に入りしものとても、此るものは一家の內を亂し、他人の家を騷かす、種子を蒔くの基ひなれば、速かに追ひ遣るこそよろしけれ、最も少しの過失は、妄りに呵責を加へず、必らず能く戒め諭して、輕しく怒るまじく候、然らばその恩に感じ、一層心遣ひして、立働くべし、又物を與へ、休暇與るにも、與ふべき時には相應に與へて、吝むべからじ、下男下女の樂しみとては、物を貰らひ、休暇を與へらるゝを以て、此上もなき、樂みとなすことなれば、その樂しみ如何ばかり、其心に滿足することなるか知るべからじ、左ればその喜しき餘り、その親に語り、他人に話し、事を爲すにも如何なることをも心とせず、立働くべし、去れど餘り恩に過ぐるは、惡しゝ、之を矯め直すには、夜間又は暇あらば、成るべく身を修むるの話し、物の道理、人の爲すべき務めなど、種々教へ聞かし申すべく候、

人の妻となりては、一家を治むるの大なる責を負ひ、その家の盛なるも、衰ふるも、皆妻たるものゝ務めにあれば、萬事に能く勤め、能く儉約して、怠たり吝嗇なるべからじ、何ほど事を勤め候とて、物を節儉せざれば、笊に水を容るゝが如く、その甲斐なく、如何に物を儉約なせばとて、事を勉めざれば、底なき袋に物を入るゝが如く、又その甲斐なし、事を勉むると、物

を節約するとは、手あり足あるが如く、手足にして其一なきときは、事を爲し得さるに均しく、一家を治め能ふまじ、左れど如何に人は働らく爲に作られたりとて、髮を亂し、垢じみたる衣物を着け、家内に取締りなく、家具を散らし、あくせく働らきたりとて、詮もなし、是れ自から我身を侮とり、敬まはざることにして、終には夫に忌れ嫌はるべし、髮を亂さず、着物も清く、家内も締りよきこそ、その身を健かにして、品格をも保ち能ふべし、世には又爲すべき義理も爲さず、贈るべきものも贈らず、爲すべきことをも爲さず、人より嘲けり笑ひを承るも、爪彈きさるゝも意とせず、人のことは假令ひ親族とても、省りみず、耻も辱とせず、甚だしきは、人のこの世を繫く義理の細を絶ちても、出すことには夫に向ひ、苦情を云ひ立てゝ、成べく遠ざかり、それが爲め、近所の交際、隣家の好誼を絶ち、果ては親しき親戚とも、顔向もせぬものあり、こは吝嗇と申し、决して儉約とは申しがたし、實に愼しむべきことに候、併し身分外の義理や、身分不相應の事を爲せよとは、申さじ、儉約とは總て身分相應のことを爲すは、申すまでもなく、些細なことまで氣を着け、物縫ふ糸の一縷とても、火種となる摺附木の一本とても、妄りに手あらく、心なく使はざるを云ふならめ、三田の福澤翁は云へり、若し我臺所を能く管理する人あらば、政府に勸めて、二百五十圓の官員に爲さんと、一家を治むることの難き、此く迄にぞある、富み榮ゆる家と、貧しき家とを見るに、その基ひは、實にその家の臺所の隅にあることを、覺り申候、人の妻たるもの、能く心を用ゆべきことに候、

史談

北米の教育家
メーリー、ライオン女史

天水生

北米マサチユセット洲の西部に、バックランドと呼べる一寒村落あり。今より凡そ百年前、此村にエーロン、ライオンと呼ぶ一人の農夫、僅かばかりの田園を耕し、其妻と七人の子供と共に平屋造りの茅屋に細き煙を立て暮しけり。北米合衆國がワシントン、リンコルンと共に世界に誇れる教育家メーリー、ライオン女史は、即ち此無名の農夫の第五女にして、千七百九十七年二月廿八日を以て生る。

父エーロン、ライオンは信心深き正直者にて、朝は夙に起きて野に出で、夕に遲く迄働きて、困難なる家計を支へて少しも不平の色なく、樂しく平和に暮し居たりしが、メーリーの未た幼き頃、些少の病氣が因となりて、長く病み疾ひ、四十五歳を一期として歸らぬ旅路に向つて此世を去りぬ。後に殘されし母子の悲歎困窮察するに餘りあり。母は七人の幼兒を引き受け、自ら田園に出で、働き、非常の勤勉を以て其生計を支へたり。

メーリーは生來快活にして、又なさけ深く、喜んで弱き者病める人を助けたり。又甚利發にして、一を聞て十を知るといふ生れつきにて、村の小學に入りては、常に首席を占め、記臆力の強きは一人として及ぶものなく、嘗てアレキザンダーの文典と云へるを四日にて暗誦し、教師を驚かせし事ありと云ふ。

メーリー十三歳の時、母は他へ再嫁することとなりて、オハヨー洲に遷れり。其後はメーリー一手にて其家政を引受けて世話したり。其兄より小遣錢として毎週一

此の金を與へられしが、多くは書物を買ふに費し、又學校行の晴衣をも之にて購ひたり。又暇にまかせて隣人の爲めに木綿を紡ぎ、些少の金を得たりしが、之も書物其他有益なる物品を買ふに用ひ、決して浪費するとなかりき。

ライオン女史十八歳になりける時、其兄は新婦を迎へ、家をニユーヨーク洲に遷せしかば、女史は始めて自由の身となり、學校教師の職に就きぬ。其校舍に寄宿し、報酬としては、宿料を免せらる外一週七十五仙を得たり。僅かの報給をも決して無益に浪費することなく、身裝は極めて質素にして、教授の餘暇には專心勉學に耽りける。

かくて之迄少しつゝ貯蓄したる金は一學期間學校に勉學し得るだけの額に達したれば、此れを以て、アッシユフイールドと呼べる地にある、サンダーソン中學と云ふに入學することとなりぬ。四ケ月ばかりの短き日月に、女史は非常の勤勉を以て學業を勵み、級中の首席を占むるに至りしが、學期の終ると共に學資は盡き、止むなく退校して再び教師の職に就かざるべからざるととなれり、教員生徒皆女史の如く學才と熱心とを兼ね有するものか中途にして去るを聞きて惜まざるものなく、此事何時しか同校の評議員に聞へ、特別を以て月謝を免せらる事となりたれば、女史は僅かばかりの持物を賣て食料を得、次の學期迄止まりて學ぶ事となりぬ。此間女史の勤勉は驚くべき程にて、一日の內僅かに四時間眠るのみにて、他は悉く勉強に費し、殆ど健康を害するばかりなりき。此學期も終りて教師の職に就かんとするや、四隣の村邑より、女史の名を聞きて招聘せんと申込めるもの甚多くして、一時は返答に苦む程なりき。女史が教師として得たる俸給は、之を貯蓄して、後日勉學の資となせり。

メーリー、ライオンは今や廿四歳となり、之迄貯へた

る金を以て、バイフィルトと呼べる地に在る、ジョセフ、エマーソン氏の學校に入り學ぶ事となりぬ。エマーソン氏は博識多能の士にして、最も教授に巧に、其夫人も才學優れたれば、勉學の爲めには此上なき好都合にて、學業愈々進みけり。翌年女史は元教を受けたるサンダーソン中學より招かれて、其助授となり、再び教育に從事するとなれり。後幾もなくして、ニユーヨーク洲のデリーと呼べる地に在るグラント孃の學校に轉ぜり。グラント孃は、ライオン女史がエマーソン氏の學校にて教を受けたる舊師にして、最も親服し居たる人なれば、喜で其招に應じたるなり。此學校は夏の學期のみに開かるゝものなれば、冬の學期には、女史は其故鄕マサチユセット洲に歸りて、ナッシユフイールド又は鄕里バックフィールドにて教育に從事したり。女史の教授は非常の好評判を博し、特に女史の學校の爲めに校舍は新築せられ、其地方の教育會よりは其懇切なる教育に對して感謝狀を送り、長く此地方に留らんとを請へり。

かくてグラント孃はイプスウイッチと呼べる地に遷り、女史に向つて來り助けんとを請ひたりければ、女史は多くの人々に惜まれつゝ、親しき故鄕の天を辭して、イプスウイッチに赴き、茲にて教育の任に當る事六年。女史の生徒に對するや、少しも隔つる所なく、之を愛し、親切に訓導すると、慈母も啻ならず、書物を教ふるのみに、人たるの道を教へ、技藝の時に、品性を磨くべきを教へたりければ、皆々知らず／＼の間に女史に親服し、其高德に倣ふに至りぬ。

女史が教育の爲めに其身を捧くると茲に十六年、自己の爲に金を蓄ふる事なく、得たる俸給は之を貧しき生徒、困める朋友に與へ、自らは極めて質素に、決して服裝を飾らず、自ら紡ぎ、自ら織りて、無地の靑色の服を造り、常に之を着したり。

女史は今や三十三歳に達したり。讀者は必ず女史が嫁せざるをいぶかるならん。之迄屢々結婚の申込ありしも、堅く之を辭して行かざりしは、其心中に一大目的ありて、之が爲めには家庭の團欒と愛情を犠牲となすべきを決したるが故なり。其大目的とは、女子の爲めに高等教育を授くべき學校の設立なり。其頃、米國にては、今日の如く女子の教育盛ならず、高等教育の門戸は、女子に向て閉ざゝれたれば、女史は如何にもして同胞姉妹に高等の教育を授くるの道を開かんとて、土地の有志家、大學の校長、教會の牧師等を説き廻りて賛成を求めしに、多くは冷淡に之を聞き流し、女子には高等教育は無用なり等云ひて退けられしも、決して失望することなく、何時か其目的の成功するの日あるを確信し、内に在りては神に祈り、出でゝは人に説きたりき。後教職を辭して專ら資金募集に從事し、先づイプスウイッチより始めて家々を説き廻りけるが、其熱心に感じて或は十弗、五弗を出すあり或は一弗二弗、少きは半弗を投ずるあり、或一人の婦人の如きは、非常に感動して、一百弗宛一時に寄附したるもあり、二ケ月ならずして一千弗に達したり。女史は之が爲めに日夜奔走して、殆て寢食の暇なき程にて、此頃グラント嬢に書き送れる書簡の内に「小妹は此頃非常の多忙にて疲勞も又甚しく時々に身動きも出來ぬ程に疲れり」とあるを見ても、女史が心身の苦勞の程察せらるゝなり。

イプスウイッチの募金を終りて、アーマスムに赴けり。玆には著名なる大學あり、其教授ヒイッチコック博士には嘗て教を受けたるとありて、懇親の間なれば、先づ其大計畫を打明けて、賛成を求めぬ。博士は年來女子教育には同情を有せる人なれば、非常に賛成を表し之が爲めに一臂を添ふべきを約せり。かくて此事業を賛成し、資金を投ずるの人々續々起りて、豫定の金額

に達しければ、地をアーマスムの南十哩なる、サウス、ハドレーと呼べる閑靜の場所に相し、直に建築に着手せり。之をマウント、ホリヨーク女學院と呼び、其礎石は千八百三十六年十月三日に置かれぬ。此時女史其知友へ書き送りて曰く「今日は最も感動を受けたる日に御座候石、煉火、漆灰の言語を發し小妹の胸を震動せしむる如く感じ申候」と女史の喜悦知るべきなり。四階造りの本館は、翌年竣工し、千八百三十七年の秋より授業を始むるとなれり。費用は可成低廉にして、貧しき女子にも入り易からしめ、月謝食料を幷せて一ケ年六十弗とは非常の低額と云はざるべからず。校長ライオン女史の如きは、自らは俸給として一年二百弗を受くるに過ぎざりき。初年には八十人を募集せしに、來りて入學を志願せるもの百六十人の多きに達したり。

學校管理は資金募集よりは一層困難にして、女史は之を其双肩に引受け、之と共に立ち之と共に斃るゝの決心を以て敎育事業に從へり。曰く「妾に千百の生命あらんか盡く之をマウント、ホリヨーク女學院の爲めに犧げん、又若し莫大の財產あらんか此學校の爲めに盡く之を捨てゝ寧ろ貧く暮さん」と。

女史の生徒に對する極めて親切にして、暖き情を以て愛したれば、皆々慈母の如くに慕ひ、又知らず／＼の間に其高潔なる德性に感化せらるゝに至りぬ。女史は又口を以て敎ふるのみならず、行を以て導きたり。此學校にては、許可を得ずして食事に欠席する能はざる規則なりしか、或時のこと、一女生、氣分優れざればとて、四階の一室に閉ぢ籠り、不精して定時に下階なる食堂に赴かざりしかば、ライオン女史は其食事時に來らざるを怪かり、其同室なる他の女生に向つて、何か異狀にてもあらざるかを問ひたり。問はれたる女生は、彼女は少く不快なれば、麵包と茶を運びくれと申居た

りと答へたり。女史は之を聞きて、食事後自ら麵包と茶を四階迄運びやりて、親しく其病狀を問へり。彼の女生は大に恥ぢて、其後は病床に就ける時にあらざれば、決して一度も食事時に欠けざりしと云ふ。

其後學校は非常の盛大を來し、資本金は殆ど七萬弗に達し、女史の高風を慕ひて來り學べるもの二千名の多きに及べり。其卒業生は、何れも皆高潔なる品性と該博なる學識とを以て世に出でざるものなく、敎育界、傳道界に身を投じて、粉骨人類の爲め文明の爲めに盡したるもの少からず。而して北米合衆國の基礎たる多くの貞妻賢母は又多く此內より輩出せり。

ライオン女史の五十年の誕生日は、盛に祝され、數千の門下生一堂に會し、和氣靄々、又となき美はしき集會なりき。

千八百四十九年二月の下旬、一女生病氣の爲め永眠したるが、女史は生徒一同を會し、死の畏るべからざるを說きて曰く「己が義務を知らず又之を行はざる程世界中に畏るべきものなし」と、此金言は後に至り女史の墓碑に刻まれたり。此事ありて後數日、女史は病床に就きしが、次第に重りて、三月五日に至り終日安らけく永き眠に入りぬ。多くの女生は慈母を失ひたるが如く、悲歎に陷り、淚を以て學校の庭に其愛師を葬りぬ。享年五十有二。

美はしき大理石の墓碑は其上に建てられ、其西側には左の語を刻めり

MARY LYON,
The Founder of
Mount Holyoke Female Seminary,
And For Twelve Years
Its Principal;
A Teacher
For Thirty-Five Years,

And of More Than
Three Thousand Pupils;
Born, February 28, 1796;
Died, March 5, 1849.

メーリー、ライオン
マウント、ホリヨーク女學院の創立者にして十二年間其校長たりし人
三十五年間教師の職に在りて三千人の書生を教へたる人
千七百九十七年二月二十八日出生
千八百四十九年三月五日永眠

嗟々何たる高潔なる生涯よ!!貧賤なる農家に生れ、可弱き婦人の身を以て、限りある五十年の生涯に、限りなき事業を殘したる人は慕ふべきかな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

メーリー、ライオン女史が殘したるマウント、ホリヨーク女學院は、其後年を追ふて盛大に赴き、今や十町に近き敷地と三十萬弗の財産を有するに至り、本館には左右一棟宛の袖を加へられ、其外に躰操場あり、圖書館ありて一萬三千部の書籍を藏し、ライマン、ウィルストン館と云へる建築なりて、其内に實驗室と、美術室とを有し、又別に新しき天文臺の建築ありて、精巧なる望遠鏡、時針器等を備へ、最近學術の研究に便宜を與ふ。創立以來卒業生を出す事六千人、其四分の三は教育界に働き、二百人の外國傳導者を出し、而して又多くの良妻賢母を輩出して合衆國の基礎となりぬ

トルストイ家の家庭教育（下）

蘆花生

子供の學問には翁も餘程骨を折りました。露西亞語と音樂の初歩は、夫人か教へ、算術の初歩は翁自から教

へました。それから外國語は、英國人の私宅女教師の外に、瑞西人だの、佛蘭西人だの、日耳曼人だのそれ〲雇つてあつたのです。音樂にはツーラから教師を招き、また圖畫は成る可く奬勵して遣らせることにしました。實を云つたら、翁の望む所は、子供の學問につきては、可成自由放任主義を執つて、如何なものでも子供の好き次第望み次第に遣らしたかつたのですが、何を云つても四圍の境遇が其樣な事を容さないので、翁も幾分か歩を讓つて、子供にも矢張り一定の課目を授けて、それ〲大學にも入れました。子供の勉強するに、不出來だからとて罰はしないが、能く出來れば賞をしました。また子供が十歳にもなると、冬の間は村中の百姓の子供に色々と敎へさしたこともありました。

トルストイと云ふと、一寸樣子を知らぬ者から見ると、何だか始終澄まして居る、小六かしい、嚴しそうな老人の樣に思はれますか、それは〲面白い、滑稽好きな、子供の樣に無邪氣な處のある、愛らしい、懷かしい老爺です。(と云ふと、何だか見て來た樣ですが)。非常に子供好きで、子供も好きます。翁は子供の心を開く黄金の鍵でも持つて居るかして、如何樣に內氣な臆差子供でも、翁が一言云へば、直ぐさらりと解けて、心置きなく囀るです。翁は眞に子供の心を判知る人で、或時の事ですが、翁の子供等――其頃はまだ子供でした――が走つて來て「お爺さん〲、私共はね面白い事を知つて居るの、え、云つて上ませうか、分かりますまい」と頻りに笑つて云ふので、翁は子供の耳に口寄せて御身達の大事な秘密と云ふのは斯々だろうと云ふと、子供等愕然して、「まあ、內の爺々には驚いた、如何して知つて居らつしやるの」と叫むだこともあります。翁と子供の間には、何か電氣の樣に通つて居るものがあると見へる。

で、翁の一家では、子供の翁を愛することと非常なもので、翁と一處なら十五露里もあるツーラまで平氣に歩いて往き還へりしました。獵にでも出掛ると、男兒共は如何樣な遠方までも行きます。躰操をするとか、然もなくば何か遊戯をするから來いとか、翁か一言云へば、夫れこそ一同歡天喜地と云ふ有樣です。翁も今少し若い時分は、冬になれば子供と一處に氷すべりに行つたり、氷池の雪を掃つたり、また庭の草を刈つたり、花壇の土をならしたり、競走したり、蛙飛をしたりしました。一家團欒して、興か旺になると、翁は突然飛び立つて、一方の手で手綱を握る眞似をし、一方は空に打振つて、部屋の中を無二無三に飛び廻るのです。此をトルストイ翁のヌミヂア騎兵隊進擊の振事と唱へて、子供のみか大人までも翁に倣つて飛び廻ります。四角四面な流儀から云ふと、一家の主翁假にもトルストイと云はれる程の人物か、斯樣な眞似をするのは、馬鹿々々しい樣な、品格にさわる樣な思ひもありませうか、翁の天眞爛熳たる所は實に斯樣な所にあらわれて居ます。何も矯飾が品格ではなし、子供らしい所はあらすとも、天眞爛熳流るゝ樣にあらふとも、親が親であれば、子は服します。

翁は一見粗豪な風をして居るに引かへて、眞にやさしい人です。昔は隨分剛情な、氣の暴い方でしたが、餘程克己の修行をしたと見へて、家をもつてからは、一度も僕婢を叱ツた事もなく、子供の何か泣き顏をすると「其樣に泣き顏するおちやない、顏が崩れるよ」と滑稽に取りなして慰め戒め、牛馬犬猫に對しても決して氣荒なこともありませんでした。家を愛するのは實に翁の天性で、たま〳〵要事があつて外出したり旅行したりするのも實は其不本意なので、旅行や銃獵から歸つて來て、家か見へると「無事であれば宜いか」と毎も掛念の聲を發しました。

子供が段々大きくなるにつれて、今迄は父母を見まね聞まねて無意識にして居たのが、次第に批評的になつて來る。此際に處する親の處置は中々大切なもので、やゝもすれば一家乖離を生ずるは斯樣な場合です。翁は子供に對するに、子供と云ふよりも先づ人として考へて居ました。即ち此子供と云ふ者は、自分と同じく人間の大道は踏むで自由に發達運動す可き權能を賦與されたもので、親と云ふ自分は保護す可き責任かあり、模範となる可き責任があるもので、親子でもあれば、師弟でもあれば、兄弟でもあり、朋友でもあることを考へて居ました。で、子供の時から、害ある感化を遮る外は、成る可く自然に自由に發達するやうにして務めて、決して强制を施しません。子供が成長して後も、萬事成る可く其爲すがまゝにして、自身は唯經驗の鹿を子供の參考に供して、判斷を子供に任せました。翁が主義一新して後も、其意見を十分家族に示して、取捨は家族の隨意にしました。で、夫人は其主意は贊成ですか産業を抛ち菜食をなすは不同意と云ふ風であれば、長子次男も同樣で、之に反して次女は尤も熱心に、此の一言一戒を遵行すると云ふ思ひ／＼の成行です。併し何れも／＼長すれば長ずる程いよ／＼ます／＼翁を敬愛して、互に睦じくして居るのは、實に珍らしい。

昨年の十月露國に遊むで翁を訪はれた蘇峯氏の記事の中に、左の如く言つてあります。

晩餐には翁の妹の孫にしてモスコー大學にある壯年、及び翁の二男にして士官たる者二人を加へぬ。翁は菜食者たるに係らず、その長男夫妻は翁と卓を同ふして肉を喫しぬ。翁は兵役を拒むを以て、人生要務の一となすに係らず、其次男は、軍帽を着け、軍服を被り、長劍を佩び、年少士官として、其側に坐しぬ。翁は村莊平民的生活をなすに係らず、其夫人はモスコー府にあり、而して余は如何なる生活を

なしつゝあるやを詳にせざれども、尋常貴族の生活をなしつゝあるに似たり、個人主義も此に到りて極れりと云ふ可し。而して一家夫妻父子兄弟姉妹舅姑、愉色婉容を以て相交る。不思議と云ふも愚かなれ。

實に不思議、併し翁が人物を知り、翁が家庭敎育に如何程心を用ひたか、それを考へて見ると、別に不思議な事もない、實に當然の事であります。(完)

衣通姬

四季阿彌

籬の邊卯の花白く。寒からぬ雪もや積むとおもほゆる曉。片われ月の光も薄く山の端に落ち殘りて。寄せてひくてふ琵琶の波の。靜なるが上に朝霧淡くこめて。往來すなる蛋小舟の帆影も未だ風を孕まず。夜邊の枕に通ひし松風も今朝は聞えぬ軒の若葉がくれ。思もかけぬ時鳥の一聲に。庵の障子開きて立出る人あり。世を住み憂くて雲を戀ひ水に從ふ隱者なるか。三ッの車に火宅をのかれ。淨土蓮台の御法を修する僧尼にやあらん。

アナ思も掛けずよ。かゝるいぶせき庵の椽に立出づる人を見るに。目元凉しくして瑠璃水晶の光を動かし。唇丹ふして蕾の花の綻ぶるをまつにも似たり。黛遠山の影をのこし。肌は越路の雪の結びなせる光澤自ら輝き。丈にも餘る緑の髮ふさやかに薫ありて。綾錦の數は重ねざるも。御寐起の姿にもや。白妙の紗布の下に紅の御肌着をつけらる。唐衣の紅梅重といふにもやあらん。身を柱にもたせて靜に耳欹て。今一聲もかなと思入り給ふ風姿。いかなる夷も此御艶麗なる姿には。見るから心和ぐなるべし。とはこれ賢くも允恭天皇の御皇后の妹君にわたらせ給ふ姬君なりけり。餘り御姿のうるはしふ人とならせ給へば。御肌の光澤も衣を

とほす計りなればとて。衣通姫とは御名を呼びならはしけり。帝姫が美しき稀人の由聞食し。如何にもして後宮に呼迎て奉らんと御使七度にもなりけれども。姫は流石に御姉君の覺さんやうをもうしろめたく。只管に否み奉りけれども。なか〳〵に帝の思ひとまり給ふ御氣色もなし。姫はこれをしも憂き事に覺して。乳母の尼の近く庵結びて。佛の道に心をすまし行を修めて住みけるを訪ひ。吾れも共に飾をおろして。同じ法の御弟子ともなりなんと打詫び給ふを。乳母の尼は抑止めてさま〳〵に慰め。御母君の方へも此由使して申傳ひければ。母君にもおどろかせ給ひて。迎ひの人を送りこし給ひけれど。姫は猶ほ此浮世はなれし庵こそ。なか〳〵に却つて棲よけれとて。頓にはかへり給はず。今日も主の尼は御佛に供へまつる花摘んとて出でゆき。母君より侍にとておこし給ひたる女房一人の側にはべりて。御母君の如何ばかりか淋しく待ちこがれ給ふらん。疾く今日はかへりて御心をもそへまゐらせ給へなど諫めまゐらせ居たる處に。勅諚かしこみて舍人中臣の烏賊津。駒の足搔に夏草の露を踏みしだき。一人の雜色を伴ひて此庵室をばおどろかしける。去れど姫には唯御涙にのみくれ給ひて、わりなく辭み給ふに、烏賊津も此御有樣を見まゐらせては、御痛はしさに心も折れ、『君の如何に仰給ふかはしらず、兎にも角にもよきに申してこそ』とて歸るも流石武夫の情なりけらし。

去れど宿世如何なる御縁かありけん、帝はいやましに焦れ慕ひ給へて、密に烏賊津を召させられ、御文こま〴〵したゝめ「こたびは必ず姫を伴ひ來れよかし」と繰返しての御諚なり、烏賊津重ねての御使、只管にいなみ奉れど、帝なか〳〵にゆるし給はず。この上はたゞ死を以て姫に御旨を傳ひまゐらせ、いかにもして宮中に伴ひまゐらせんと、駒にまかせて都を出でしは、

秋の初風身に染みて紅葉いろづく頃なりけり。坂田の里の片邊、草の花咲く細道に、虫の音しげき夕間暮、烏賊津は姫が庵を訪ひ「再び勅命を蒙りて御心



を煩はし奉ることのうたてさよ、去れど臣として君の嚴命背き奉るに由なし、唯疾く宮中に伴ひまゐらせなん、其上はともかくにも、姫より君に理をつくして聞え奉らんに、素より賢明にわたらせ給へば、いかで姫が御志を仇になし給ふべき。まげて吾心に随ひ給へよ」と帝よりの御文を出し、姫にすゝめまゐらせけるに、姫は御文を手にだも取らせ給はず「帝の御情聞き奉るだに心も消ゆばかりには覺ゆれども、今随ひ奉りて姉君の意に違はんと、忍ぶる程ならば玉の緒の絶えなんこそ勝るべけれ」とむせび入り給ふ。烏賊津聲を勵して「かくまで申し候ても御うけがひあらざるか、去ればとて此儘には都にかへり難かり、歸らば重き罪に命を隕すこと火を見るが如し、兎ても死すべきものならば、此場を去らで淺茅の露に身をまかせ侍らん」と庭前に伏して糒を食ひ、水を呑み、七日七夜に至りて肉落ち骨立ちて、食をすゝむれどもこれをうけず、死を待つ烏賊津の姿を見ては、姫も流石に心折れ、今帝の仰せを背き、重ねて忠義の人を亡ふ、其罪輕しと

いふ可らず、吾が身一つをなきものにして、都に赴き帝にまみえん、と俄に烏賊津にかくと傳へ、共に都にはまゐり給ひける。帝烏賊津が姫を伴ひ來れるを見て、いたく喜ばせ給ひつ、烏賊津にかず／＼の御褒美あり、姫をも後宮に召し入れ給はんとせるに。はたせるかな御后のこれを知りて嫉き事に覺されければ、帝にもそをはゞからせ給ひ、宮を藤原に造り設けて、姫をこれに入れ奉り、翌くる年二月梅咲く頃、帝藤原に幸し給ふ。

帝透垣より姫の御居間を垣間見給ふに、姫は椽近ふ立出で給ひ、帝を戀ひまゐらせて、御聲うるはしふ「わがせこが來べき宵なり筰蟹の、くものおこなひかねてしるしも」と打返へし詠じ給ひけるを、帝きかせ給ひて其志を感じ、御返歌ありけるよし后に告げまゐらせし者ありけん、后の御けしきすぐれさせ給はねば、又姫を河内の茅渟にうつし、帝は遊獵にことよせて、しば／＼幸したまひけるが、或日后は帝を見て申させ給ふやう「君しば／＼茅渟に幸し給ふこと、妾よく其實を知れり、去れど嫉妬よりと聞し召し奉らんことのつらくて、今日までは露知らず氣にて打過ぎ候へども、君としては民の疾苦をも察し給へよかし、」と理をせめて諫められければ、帝も其理には背くべきやうもなく、夫よりは御幸もいと稀になりゆき、飽かぬ心地に夢地の逢瀨はかなみ給ひしも、浮世のさがとやいふべからんめり。

姫御容顏も御心も世になく美しくおはしつるも、つたなき御運はいかんともするに由なく、淚がちに年月を送り給ひ、老ひては佛に仕へ奉りて、一向專念成佛の悲願に心を碎き給ひしと傳ふ。

齒なき動物

動物學の教師「哺乳動物中齒のない動物の一例を擧げよ
生徒「私のおばアさん

文藝

松の時雨

桐廼舍女史

近江の國の名たててふ、八ツの眺望の何れかあはれならざるはなきも、冬は殊更いちしるき比良の高ねの、雪さえて夕日をつゝむ浮雲は、けふも時雨をさそふらむと、いとわびしげに打仰くは、小松か原に日毎來たりて、落葉をひろふ賤の女なるが、袖寒げなる姿にも似ず、よしありげに見ゆれとも心にわふる事やありけむ、みどりの髮もいたづらに束ねしのみ、折々もらすふとき息には千々の歎やこもるらむ、空もあはれと見ましゝか、さとふりかゝる村時雨を賤の女はさしもさわかす、しつかに筐脊負つゝちからなげに歸らんとせしか、何やらんかたへに人のけはひすれは心ともなく只見るに、若き旅人の時雨をいとひて松の木蔭に立よりしか、葉毎の露をはらひ兼て怨めし氣に空打あふきて

いかにせむたのむのかけと立よれは

と口すさぶに賤の女は藤房卿の昔もそゝろに忍ばれて、あなゆかしの旅人よとつとよりてつゝましけに、旅の人よいつこへ渡らせたまふか知らねど、此原を越え給ふには道の程も侍れば、此邊りなるわなみか草の戶に暫時休息せ給はずや、此頃の時雨やかても晴んをとまめたちて、すゝむれは旅人は甚喜ひて、そはことよなき幸にこそあれ、軒端なりともかされよと賤の女に添ひて、いそく間もなく破垣結ひめぐらしたる小家に、賤の女ははしりいりて筐もおろしあへすいざ〳〵と、いふかまゝにいりて見れば竹の簀の、あやうげなるにも先うきふしの志けかる宿と知られたり、賤の女はひろひ來し落葉爐にさしくべて、素湯すゝめんとてはし

なく、旅人と面合せしが何にか感しけん、さとあかめし頬の匂やかなるは春の花にもいやまさり、らうたけなる額つきは秋におくれし雁がねの、志はしは此處にやとれるかとあやしまるゝに、紅葉重着せたらましかばと、見る〳〵花と匂ひし頬の色はあせて、氣味わろきまで青白く、額の雁がねは翅しほれて得堪ぬにや、よゝと泣伏ぬ旅人は思ひまとひてこはいかにせられしやと、志は〳〵問へとはか〳〵しきゐらへもなさゝりしが、やゝありてせきあへぬ泪かきやりて、はつかに頭もたげつゝあゝ思はざりき、わなみが病ひおこりしよりめづらかなる、客人の御前をも憚からず、我にもあらず打泣てはしたなきさま、見せまゐらせし罪おそろしうてなむ、まげてゆるさせたまへねと、しゐてゑみをよそほひつゝ、ひたふるに打わふれど猶晴れやらぬ面色を、旅人はさし覗き、いかでさる事思ふべきさはいへ汝が今のふるまひ、病ひとはいはるれどかゝる淋しき草の戸に、をとめの一人り住まるゝもいぶかしく何そは深きゆゑこそあらめ、苦しからずはもらされよ、濁り勝なる里の小川も心とすめば、月もこそさせ花もこそちれ、世は誰れとてもうたかたの泡よりはかなきものなるを、獨りなげきに沈まれんは實にをろかなる事ならずや、我とて旅の身にしあれはちから草ともなりかたかれど、事なりて都に歸らは兎も角もはからはむ、とく〳〵あかし聞えよと信實こめたる言の葉に、賤のめはふたゝび溢るゝ泪と共につゝみあへぬ、わなみがうへさまでにおもほしたまはるも、ゆかりの人の心地して今は何をかいなむへき、御耳のけがれをあはれと忍びたまへかし、わなみは都に生育て二親の惠淺からねは、世の憂事も知らざりしが、ふり分髮の肩過ぬ頃母は思はぬ濡衣着て、わなみと共に此國に追はれ、重なる愛にやみがちなれといとけなきわなみにいさゝ慰められてか、やう〳〵住馴侍りしがわなみは

此處に移りてより、めつらしき野邊に遊ひて强而なき父のうへも、兄の事もわすれ果しか忘れかたきは明暮むつみかはしたる、隣家の稚兒の此野邊にもともに遊はい、いかに樂しからむなと思ひあまりて、むつかる事も幾度かとかくして、十あまり三ツとなりしも、裳着なとすへくもあらす、おほつかなくも落葉かくいとまには、母か手馴の琴かいならしゐる時は腰折よみならひて、あちきなき世も睦敷暮すをせめての、心やりに一とせ三とせとふる程に、去年の春琴の音にひかれてゆくりなふとひ來しは、夢の間もわすれぬなつかしき友なり、母もわなみも懇くまで喜ひて、いかにしてととへは八ッの景色見むと來しのみ、逢ひ見むともはからねは都のつとも侍らす、あしうなおぼしそといふわなみはむねのみ騷きて、昔のやうには物もいひ出かたく、彼方も大人となりてはたはふれもせす、互に鼻白みて只父も兄もわなみらをおひし後、いつこへか移りしなど母に語りてわかす歸りしか、それより雨に風に文かよはして、ねもころになくさめらるゝに親子は、こよなき賴母子人と思ひしに、今年は音つれも絕てあらねは、いふかしと都の空のみなかめやりしに、時鳥の鳴頃そか親なる人より、文とゝきぬめつらしと手ひとりあへす、開き見れは賴母子人は歸らぬ旅におもむきぬとて、あはれなる事とも薄墨にしるされたり、更にまことの事とも思ひ得ねば、幾度かくりかへしもいよゝ袖の濡まさるのみ。母は文かき抱きていかでかゝる人に、吾娘あはせむと兼て思ひつゝも幸なき身の、いひ出かねて今日迄過しゝを、今は我望も絕果ぬとまことの子失へる如くかなしみて

おくつきの塵もはらはでちりの世に
いつまてわぶる我身なるらむ

など起伏に口すさひッゝつひに、此野邊の露とと消え侍りぬ、其折のわなみかこゝろいかなりけむ、そは

申さずもおしはからせたまへ、ともにとさへなけきしを里人にいさめられしのみならず、いつかはつれなき親はらからにめぐり逢ひ、母が濡衣ほすよしもかなと、思ひながらも折々は我玉の緒のあやにくに永きを恨み侍るかし、これ見ましてよと破硯とり出て紙のはしに

　くつちぬ間を千代とぞ思ふ捨扇
　　小松か原の露しけくして

かく申はいと／＼なめに侍れども、今しも君にまみえまつればうたがはるゝ迄、彼人の俤に似させたまふのみか御心のやさしきも、こと人と思ほえねばこそかくあさましき事も聞え侍りしなれ、ゆるさせたまへとうち泣に、旅人は耳かたむけて聞ゐしが左右のまぶたをうるほして、實に定めなき世とは知れとかく迄とは思はざりしを、さはとて汝がいたづらにくつをれなば、誰が母刀自の名を清めん、憂を忍ぶも孝ならずや、又何某の事につきては我申べき事にあらねど、互みの心に結びたる二世の契りは絶ましきを、さのみなげくはをろかなり汝も是より、都に出て身をたて名をもあらはさば、親はらからにめぐりあはむも、かたからしといひつゝ硯引よせて例の歌のはしに

　なけくなよ小松か原の捨扇
　　やまとをとめのひろいもぞする

とかきてあたふれば、賤の女はおしいたゞき打かへし／＼しゝが、見る影もなきやれ扇いかでとは思ひ侍れど、何事も御教にしたがひて今より後、物はおもはし迷ひ雲もやゝ晴れたり、いさ木の實などまゐらせんと立かゝるをおしとゞめ、時雨もいつしか晴れたれば暮ぬ間に我もいそがん、こはゐやしろといふにあらねどなき人々へ、たむけられよといなむもきかず何やらんさしおきて逝るが如くはせさりぬ、賤の女殘りをしげに見おくりつゝ、あゝことならば今宵は此處にやとし

まゐらせて、我ための御法の師ともつかへまつらむを、世の人口も物憂ければ惜しき別に侍るかし、せめてはあはれといふ事のみも御心にとゞめたまひてよとて例のはしにまた

一筋に戀渡れとも二瀬河
　ふたゝひ濁る心となみそ

と心一ッにかたくちかひて、彼一包をとりわげて何にかあらん、とく手向んと打開けば黄金數多こぼれいづるに、いかゞはせむかくと知らばうけさらましをいまはかへさむよしもなしと、思ひいりッゝと見れば包し紙に

花咲ん春をもまたて九重の
　都に出よひなの鶯

こは都の手振學ばん料に惠まれしか

＊　＊　＊　＊　＊

隅田河のほとりにそひてたてられたるは、さる貴人の姫君住せ給はんとてのまうけなりけり、四季折々の眺望は畫の工も筆や捨つらん、今日は殘りなふ晴渡りて遠近の烟りの末に、筑波根の雲のごと見ゆるもをかし、岸邊に殘れる木々の紅葉は、さながら河水に錦をさらすかと、見ゆ今しも欄に身をよせ彼方此方ながめをるは此頃、姫が御琴の師に召抱へられたる、をみなならんさかりはやゝ過たれど、なへてのきはにはあらずゆかしげなるが、心ともなく小指折てかゝなうれば、四とせの昔姿をいさめはげましゝ人なかりせば、かゝる世には逢はさらし唐人がいひしとか、食に魚あり出るに車あるは今の姿が幸なりと、思ふにつけても彼旅人に今一度めぐり逢ひて、盡せぬ禮も聞えまほしう親はらからにも、逢はまほしと萬の神に祈れるを、あはれとも聞しめさすやとひとりごちて、猶ながめやるほどに女のわらは走り來て諸手つきッゝ、兼て聞えたる長者の翁まうのぼり給ひて、御師にたいめたまは

らむと申させ給へば、此處にいさなひまゐらせしといひもあへずいり來しを見れば、白き髯わたゝかげなる翁なり、あとにそひているは戀ならぬこひにあくかれし、彼旅人なりけり、あなやとばかり驚くを旅人はさればよといはん面色にて、翁にむかひ我思ひし如妹にて侍りと、聞て翁は嬉しきにも泪落てこは娘にてありけるか、我あやまちは悔てかへらすと猶いはまくせしに、俄に人のさゝめきて姫君渡らせ給へりといふに、三人はとみにかたちをたゞしてむかへまつりし後は、小松か原の時雨の音に引かへて、隅田河の浪に流るゝ琴の音清し。

――――◦――――

「ベトーベン」月光の曲

紫　櫻　生

思ひ起せば「ボーン」であつた事ですが、或る冬の夕月夜に、私は共に散歩して、そして晩餐を食べやうと思つて「ベトーベン」を誘ひ出した事であります。とあるほの暗い横町を通つて居る時に、彼れは俄かに立ち止まつて

まち玉へ、何かものゝ音が聞へる、確かに僕のへ調の樂曲だ、聞き玉へ、大變上手にやつて居樣だから。

その家は小ッさな賤しい住ひでしたが、私共は戶外に立ち止まつて聞いて居ました。彈者に矢張つゞけて居たが終節の中頃で突然音がやんで、くす〳〵と啜泣の聲が聞えます。

モー彈けぬ、ドーモ淸秀な曲ではあるが、とても〳〵妾の手にはあわない。ア、ア「コーロン」の音樂會に行く事さへ出來れば生命も惜くはないに。

姉さんおよしなさい、いくら悔んでも仕方がないではありませんか、家賃さへ拂ひ兼ねる仕合せでは。」

それは汝の言ふ通りだけれど、妾は一生に一度はほんとにいゝ音樂が聞きたいわ、しかし無用の事だか

ら手。

「ベトーベン」は私の方に向ひて、

サー這入りませう。

這入るつて！何んと云つては入るんです？

ナニ、イヤ僕が彼の娘のために一曲弾くのですさ、此家には感情がある、天才が居るのです――彼の娘には理會力がある、僕が一曲やれば彼女はきつと理會するに相違ないと思ひます。

と彼れは言せわしく答えた、が私が彼れを制し得る間もなく、その手は已に戸を持つて居たが戸は開いて私共は内には入りました。

顔色蒼白た青年は机の側に坐つて、靴を作つて居る、そしてその傍に、古形のピアノの上に悲げにもたれかゝつて、顔には後れ髪がばら〳〵と垂れかゝた少女が居ました。二人とも賤しい乍らに清潔な衣服を着て居が立ち上つて今は入つて來た私共の方に向きました。」

少女は顔に時ならぬ紅葉を散らし、青年は厳格な、而かも少しく面倒らしい様子でした。

ワ………私は又汝が云つた事をも立ち聞きました。汝は聞きたいのでしよう、何がアノー………汝は好きでしよう、アノー何が………何んです、私一曲やつてお聞かせましようか。

一坐何んだか間が抜けた様で、又「ベトーベン」の様子が何となく滑稽じみて居て、面白可笑かつたので、みんな思はず、ほゝえみました。

靴師は

難有う御坐ります、がこのピアノは大變粗末で御坐りますし、樂譜が一つもありません。

樂譜がないつて！夫れではどうしてこの娘さんは…

………

と云ひかけてごまかしてしまいました。彼れが少女の顔を覗き込んだときに盲だと云ふ事を知りましたか

ら。

ゴメ……ゴめんなすつて下さい、私――私は今まで知りませんでした。すると汝は耳一つでお彈きなさるのですチ、然し度々音樂會にお出なさる樣子でもないが、何處で音曲をお聞きなさいます。

ハイ、二年間計り、「ブルール」に住た事がありますが、その時分、妾共の近所で一人の貴女が彈かれますのを始終聞いて居ました。夏の晩方などには、大低窓の戸が開いて居ましたから、妾は戸外に出て、あちらこちらと歩み乍ら聞きました。

彼女は餘程耻しそうでしたから「ベトーベン」はモーなんにも云はないで、しとやかにピアノの前に坐つて彈き初めました。初めの一斷落を聞くと直ぐ私は其曲を知つて、當夜は實に莊嚴であらうと思つたが果して私は誤りませんでした。私は已に永の年月彼れの音樂を聞いたがまだ當夜可憐の盲處女と其弟のために、彼れが彈いた樣なのを聞いた事はありません。彼れは大に感動した樣子であつたがその手の指が壓板に觸れ初めるとからだん／＼音調が美清くなつて來て、云ふに云はれぬ和合をなしました。

姉も弟もうれしさの餘りに、あつけるとられて、默まつてしまつて、弟は仕事をさし置きました。姉は少しく頸垂れて、兩手をしかと胸に押し當て乍ら、已が呼吸さへに、不思議な計りに美しい音の氣流を破りはせぬかと氣づかふ樣にて、恐る恐る、ピアノの端に蹲踞ました。私共は只々怪しきゆめを見る心地がして、覺めねばいゝと願ふ計り。

ふと、たつた一本の蠟燭の火が動搖いて、暗くなつて、又飄搖して、消えてしまいました。「ベトーベン」は止めました。私は窓の盲戸を開けて、照り輝いて居る月光を入れました。それで室の内は大低前の通りに明るくなつたが月光は殊更らにピアノと彈者の邊に強く差

し込みました。然し此の不意の出來事のために彼れの理想の連鎖が途切れたと見えて、頭を胸の邊までたれ、手をば膝の上にをいて、何か一心に考えこんで居ました。大分永い間斯うして居ました。終に、靴師の青年は立つて、熱心に而かも恭しく彼れの前に出て、聲低く

先生、閣下は誰人様で御座ります?

「ベトーベン」は

お聞きなさい

と云つて、その一調の曲の最初め譜を少しばかり彈きますと、姉弟は悟つたものか、さもうれしげに

それでは閣下は「ベトーベン」先生！實に失禮ばかりいたしました。

と叫び乍ら、涙ながらに彼の手を接吻いたしました。「ベトーベン」は歸らうと思つて立ち上りましたが私共は

ドーソ今一度彈て聞かして下さい――たつたモー一度

と云ふて熱心に彼れを引きとめました。

彼れは不承不承と坐に直りました。月光は煌々と窓から入り込んで、彼れの光榮ある、蓬々たる、頭とむつとりとした姿を照らして居たが彼れは空と星とを物思はしげに眺め乍ら

私は今即坐に、月光に對して一曲作りませう

その手は壓板の上に落ちて、恰ど眞暗い土地の上に月の光線が差す様に、ピアノの上を悲しい、非常に可憐な調子が徐徐と動きました。

綢繆たる音調が前よりは三倍のをそさで、是れに次だがやがて、荒々しい、恰ど妖女の草庭に踊る様な奇異の所作を中間に入れたのでした。そして終に非常な速さの亂躰で――如何にも恐愕した様な、不安心そうな、何んとなく恐怖そうな、喘ぐ様な、忙しい、振つた、亂躰で曲をむすびました、から私共は丸で音樂の羽音

の高い羽に打ちのつて天に昇るのかと思はれて、一種の深い感動と驚愕に打たれました。

「ベトーベン」は椅子を后方に突きやり乍ら

御免下さい

再び戸口の方に向ひて

御免下さい

どうぞ又御出下さい？

と姉弟は同時に願ひました。

彼れは立ち止まつて、盲處女の顔を同情を以て、柔和げにうち見やり乍ら

ハイ、まつと

と忙はしく

きつとまた來てこの娘御に何かお敎へ申しませう。

夫れては御免、またまいりますよ。

彼等の視線は私共が見えなくなるまで私共の上にありました、そして彼等は全く無言でしたが言語を發するよりも遙かにその方が雄辯でした。

「ベトーベン」は

ドーゾ急いで下さい、忘れぬうちにあの曲を一つ書き留めて置かうと思ひますから。

私共は急いで家に歸つたが彼れは日沒後永い間机に向つて夫れを書いて居ました。是れが彼の有名な月光の曲の原因であります　（完）

「ルードウイッヒ、フォン、ベトーベン」は有名な作歌者です、一千七百七十年に獨乙の「ボーン」に生れて、一千八百二十七年に「ビエンナ」で死にました。その著作は音樂の發達上に一大時期をなしました。そしてその評判のよき事は年と共に減じません。氏の生涯は極めて悲惨なものでした、獨身で、聾で、そして、その親しい友であるべき筈の人々からは常に逆待をうけました。その永久不滅の音樂を聞けば如何に氣高く、氏が些細な苦患を排したかを知る事が出

來ます、

象の乳汁

「高橋君、君は一週間二十ポンドの象の乳に養はるゝ赤坊を知つてるか。」

「そんな馬鹿氣た事があるものか、誰だ」

「象の赤ん坊さ」

小說

一夜の宿

松ヶ枝女史譯

（下）

少時經つて家の主は女房に向ひ「私の思ふには若人の云はるゝ處に何だか自然の情があるやうです、もし私の心がそんな風に養はれたなら自分も矢張そう感じたかも知れない、まあ不思議だ、女房、客人のお話が私の頭を惱しかに出來ないと知れて居ることに走らして居るのだ

「出來ることかも知れませんわ、客人は獨夫になつた時に何をしようかと考へて居るのですか」その女房の答に家主は打ち消して「否、否そうぢやない、お前の死ぬことを思ふ時には自分の死ぬことも考へる、私が今考へて居つたことは何處かパルレツトかベスレヘムかカリトルトンか何でもホワイトマオンテンの近邊で然かし山が頭の上に落ちて來ないような處に良い田地を持ちたいと考えて居つたのだ隣人にはよく交はつて「何君」と敬はれるやうになつて稀には法庭にも出るのだ、淡泊な正直な人は辯護士ほどの役に立つからね、そしてそれから私が老人になつてそれから距てのないやうにお前も年寄りになるとしやう、私はもう充分幸福に床の上で往生が出來る、お前達が皆私の周圍で泣いて居るのを遺こして行ける。石板一つの墓石でも大理石同樣結搆だ………只だ私の

名と年とそれから讃美歌の一節とそれから何か私が正直な生活をしてキリスト教徒として死んだと云ふことを村人に知らするものとを書いて……」

「そら！碑石を乞ひ願ふのは人情の常でしやう」と旅人は言つた「たとへば石板であろうが大理石であろうが花岡石の柱であろうが又は人間一般の心に殘る名譽ある記念であろふが」

家婦は涙を浮べて「私共は今夜何だか妙でありませんか、人の心が非常に落ち着かぬ時には何かの前兆だとか云ひますがねまあ子供達をお聞きなさい」

聞けばなるほど別の部屋の寢床に入つた子供達が忙しく話をして居るので戸の開けてあつた爲め手に取るやうに聞える、名々が爐邊の談話を聞きかぢつて自分達も見心に相當な大望や計策をして大人になつてからの事を語つて居る途に一人の子供は兄弟達に話すのを措いて母親に呼びかけた

「母さん僕の爲たいことを云ふて見ようか、僕はね、母さんも父さんも祖母さんも僕達殘らずとそれからそこのお客さんも皆なで以て直ぐと出かけてフリームの泉に行つて水を飲んで來たいと思ふのだよ」

温かい寢床を去り樂しい爐邊を去らしめてフリームの泉ノツチユの奥の絶壁に湧い居るに出かけようと云ふ子供の考を笑はぬとは出來ない

子供が言ひ畢るか畢はらぬに道路に車の音がして暫時戸の前に止つた、内には二三人の人が居る樣子で無作法な調子の鼻歌うたふのがと切々に聞える旅をつゞけようか一夜を茲に明かそうかと思案する樣子で。

「父さん父さんのお名を呼んで居ます」と娘が言つた。」

然かし善良な家主は果して自分の名を呼ばれたか否分らぬしそれに又無理に客を呼び入れて餘り金儲に熱心だと思はるゝのも厭やと云ふ處からつひ急いで戸口に出なかつた

戸外では一鞭擧ぐる樣子であつて旅人等は忽ちノッチユの方にと走りました歌の聲は猶山々に反響して淋しき音を傳へて居る。

「それあの人達が私共をフリームまで乘せて行つて呉るればよいに」と子供は又も叫んだ。

家族は再び笑の中に引き込まれた夜遊をしたいと云ふ子供の動かざる決心のをかしさに、然かし折ふし一朶の雲が娘の心に蔽ひかゝつた眞面目に火を打ち眺めては太息のやうな呼息をした隱くそうとしたにもかゝはらず思はず致したのに氣が付いて驚いて顏を赤めぞうやら皆が自分の胸の奧殿にのぞき込んだのかといふやうに急いで周圍を見廻はした。

「何でもないのです」と俯向いて微笑しながら答えた

「唯だ一寸淋しく感じたのです」旅人は半ば眞面目に

「あゝ私は他の人にあることを知る智慧を授けられましたがあなたの心の秘密を中て見やうか、若い娘が暖かい爐邊で慄へたり母さんの側に居りながら淋しく思ふたりする時は何か心のうちにあるのか私にはようく分ります言葉に入れて見やうか」

「もし言葉に入れることが出來ぬやうでしたらもうそれは娘の感情ぢやありますまいよ」と可憐なる山家の處女は客人の眼をば避けて笑ひながら答えた。

恐らく愛の萌芽、然かり實に純潔で極樂の花園にでも咲きそうな愛の萌芽が兩人の心に芽ざしたかも知れない、何故といふに婦人はこの旅人の如き優雅な而かも凛とした風采を喜び且つ自負の強い理想的な而かも親切な男子は往々彼女の如き單純な性質の擒となるは珍しからぬことである、然かし彼等が語り彼は彼女の嬉しい悲み、薄き陰、はては又乙女の性情なる羞かしき懇望などを見守つて居たうちにノッチユの風は愈々強く悲しく鳴り出した、恰も想像家の客人が云ふたやうに、昔時此邊の山谷を棲家と定めて居つた風の神の

音樂の合奏とも疑はれる計り、凄まじう鳴り出した、路傍には何ぞ葬式でも通行するやうな悲痛な音がする、陰鬱を追ひ拂ふ爲め家族は爐に一把の松の枝を加へた乾いた葉がパチ〳〵と燃えて焰が登つて再び平和と單純な幸福との光景が演じ出だされた焰は、全家内を輝がして人々を撫で愛づるやうです。

向ふの部屋には子供等が寢床からのぞいて居るし此處には逞ましい骨格の父、思慮深い母の面は、秀眉の青年、蕾の乙女加ふるに祖母さんは最も暖かい處に坐つて猶も編物をして居た老人は仕事から眼を擧げたが手は猶忙しく「若い人達と同じこと年寄りも矢張色々考がありますよお前さん達は切りに望んだり計つたりして頭を彼方此方と走らしたので私までが心が何處にか彷ひ出しました棺桶に片足入つてる婆が何の願ふ處がありましやうか、子達、お前さん達に云ふて仕まふまで私は安心がならぬよ」

「母さん何ですか」と夫妻同時に尋ねた老母は一同が愈々爐邊に近寄つて來た程奇妙な風躰で自分は自分の葬衣を數年前から仕度して置いたことを告げた奇麗な麻の顏衣や、金巾の衿の被物や何でかでも結婚式以來用ゐたものよりはちつと宜しい品で整へて置いたことを語り出した、然し今夜は昔の諺にある迷信が切りに思はれ居る、老母が若い頃の諺にもし何か縱令ば衿が滑かでないとか被巾が眞直になつて居ぬとかそんな僅な事でもきつかとして居なければ死人が地の下の棺の中で冷たい手を擧げて直さうとすると云ふその考が老母を煩はしたのです。

「そんな言はずに下さい祖母さん」と娘は慄ひながらいふ、老母は自分の馬鹿らしいことを笑ひながら猶熱心に語り繼げる「私がね着物を……棺桶の中で着物を着せられる時に、誰かお前方の一人が私の顏の上に鏡を持つて見せて呉れればよいがね、私が一寸のぞいて

何か皆よいがどうか見まいものでもなかろう」。
「老も若きも等しく墓と碑石を思ふなあァと旅人なる青年は小聲で申ました、あゝ航海者が船が沈んで人知れずあの大洋……廣き無名の墳墓……に葬られる時の思はどうだろうと思はれる」。
老母の物凄い者が聽者の心を一杯にしたので戸外の嵐が何時の間にか愈々烈しく凄じくなり來つたのも氣付なかつた、家もその內なる凡てのものも震動して實に世界の土臺が搖るぎ出して最後の喇叭が鳴くやうに聞える、老若顧みて眞蒼になつて言葉もなく身動きもしないであるのだが遽かに一同の唇より「土崩!」「土崩!」の聲が洩れ出た。
形容すべからざる災厄の恐ろしさはとても筆には寫されない、一同は小屋から飛び出て安心だと思ふた場所斯る不時の爲めにとて兼て棚が築かれて居つた處に馳せ付けた鳴呼然かし彼等は安全の場を去つて滅亡の通路の眞中に飛び込んだ、山の全半側が大瀑布のやうに落ち來た丁度家に達する前に土崩は二つに裂けて家の處は窓一つも破らないが近所隣の路々は悉皆毀されて土崩の前にある萬物は悉く滅ぼされてしまつた、大土崩の響の止む以前疾くに苦痛の境を去つて家族等皆平安の都に行つたであらう、彼等の死躰は决して見出されなかつた。
翌朝輕い煙が小屋の煙筒から登るのが山の側から見られた、內には火が未だ爐に燃え居つてそれを圍んだ椅子もその儘殘つてあつた——恰も住民が土崩の跡を見物に出かけたので自分達の不思議に扶けられたことを感謝するに今直ぐ歸つて來るやうな光景を畫いて居る、家族を知つて居た人達には一物一物悉く淚の種ならぬものはない、慘話は遠近に傳へられてこの後も亦永久に此の山地の昔語となるであらう、詩人も彼等の運命を歌つた。

* * * * * *

ある事柄よりして彼の旅人が夫の恐ろしき夜小屋に宿つて等しく家内の災厄を分けたと信じる人もあるが或人は又そんな憶測をなすべき證據がないといふ、兎に角世界の不滅を夢想して居た青年に對しては實に禍なることであつた彼の名も彼の人物も少しも分からず、彼の歴史も彼の生路の方向も彼の計策も永久に解せられまじき問題で彼の死も彼の存命も等しく不明、嗚呼その臨終の痛歎は誰が胸にてあつたであらう。

談叢

世界古代の航海談（中）

蘭溪生

ゼーソン家國に入る――ペリアス王の奸計

斯くてゼーソンは晡に及んでイチルコスに入れり。途上一老人あり、ゼーソンを止めて彼れの名及び且つ來由を問ふ、答へて曰く、予はゼーソンと云ふ者にして、ペリアス王に使せんが爲めにペリチンの山より來れりと、而して彼れは其老人の實に彼れの父なるを知らざりき。

老人沈吟稍〻久して曰く、阿兒よ汝は蓋し神託に付て何事をも知らざるならんと、備さに其詳細を告ぐ。ゼーソン雀躍して曰く、父よ父の言の如くば、之れ實に喜ぶべきの報なり、兒の此處に來りしは、正さにイチルコスをペリアスより取り回へさんが爲めなりと、蒼皇別れを告げて王城に至り、直ちに正門に進み、大聲に呼んで曰く、來れペリアス、來つて予と汝の王國を爭へと。ペリアス内より聲に應じて曰く、予が名を呼ぶ者は誰ぞと、馳せ來りてゼーソンの片足徒跣なるを見、顏色忽ち土の如し。ゼーソン勵聲して曰く、予はイーソンの子ゼーソンなり、此王國の世子たるべきも

のなりと。ペリアス手を以て顏を掩ひ、感泣して彼れの爲めに其甥を此地に送られしことを上天に謝せり。鬼の眼にも涙ありとは此等の事を云へるなるべし。彼れは全く以前の彼れと殆んど別人の如く、極めて慈愛の言を以て慇懃に彼れを慰撫し、誘ひて内に入らしめ、徐ろに告げて曰く、予は不幸にして三人の女あれども一人の男子なし、汝宜しく予か三女の中尤も汝の好めるものを娶り、永く此王國に君臨すべし、但悲哉此國は累代實に悲慘の國にして、之れに君たるもの亦實に憐むべきものたりと。此最後の言は聊かゼーソンをして不審の念を起さしめたりしも、其故如何を問ふに暇あらざりき、やがて彼等は晩餐の席に對せり。三女亦入り來れり、花顏窈窕として何れも皆美なりしかばゼーソンは殆んど其撰擇に苦めり。晩餐了りて後、三女は更る〳〵樂を奏し、或は跳舞して客人を歡待し、和氣洋々として滿堂春の如し然れどもペリアスは何ほ欝々として樂まざるの色ありき。ゼーソン伯父の顏色を見て、問て曰く、此王國は何故に累世悲慘の國たり、又其君たるものは何故に憐むべき者なりや、と。ペリアス始は頗る躊躇するの色ありしが、漸やくに說き出して曰く、予が伯父にアサマスと云へる者ありて、ヲーコメノスの王たりしが、妻を娶ること二回に及べり、先妻の名はネヒーレとて二人の小供を生めり其名をフイリキザス及びヘレと呼ぶ後妻は名をイノーと呼び、之れ亦リーアカス及びメリサータなる二人の小供を設けたり、フイリキサス及びヘレは先に生れたれば、最初に王位を嗣ぐべきものは先づ此二人の小供なり、然るにイノーは、我が二人の小供に王位を繼がしめんとて、自然に先妻の兒供を惡み、遂に彼等を殺さんと企てたり。而して實に其好機會は來れり。或年の事なりき。國中凶歉にして上下一般に大饑饉の起れるとありき。アサマスは君主の身なれば、如何にもして下民を救は

んとて、遂に神託を請はんと決心せり。イノーは機以て乘ずべしと爲し、竊かに祭司に賄賂を贈り、自己に利益ある虛僞の神託を傳へしめて曰く、此飢饉を救ふには、只だ宜しくチヒーレの二人の小供を犧牲として以て神を祭るべしと。アサマスは彼れの民を救はんが爲めに、終に彼の二愛兒を神に捧ぐるとに決せり、やがて二人は聖壇に供せられたり。祭司今や將さに刀を揮ふて二人の胸上に擬せんとせる時、一天俄かにかき曇り、一道の黑雲蓬々然として天より垂下せり。雲中一個の小羊あり、皮毛黃金の如く、其背に羽翼を具へたり、見る〳〵聖壇の上に降りしかば、二人の小供は手を延ばして其輝ける皮毛を攫むや否や、件の小羊は彼等と共に空中に飛騰し、忽ち黑雲の裡に沒して其行く處を知らず。アサマス此に於て始めてイノーに欺かれたるを覺り、怒ると烈火の如く、直ちに其一人の小供を捉へて之を殺せり。イノーは殘る一人の小供と共に纔かに虎口を免れ、絕壁より身を海中に投ぜり。後ちアサマスは人民の爲めに其國より追はれ、涙々の身と成り果てたり。

然るに彼の小羊は、其背に二人の小供を乘せて北に向て飛び、山を越へ海を亘り、終にスレシアン、チヤーソニースと名くる所に來れり。而して二人の小供の中幼少なるヘレは、長き旅路に疲れて羊背にすがり得ず、終に海中に落ちて溺れたり。故に今日まで此海を稱してヘレスポントの瀨戶とは云ふなり。

彼の小羊は、殘る一人のフイリキザスを乘せてユーキダン海(即ち黑海)を越へ東北に向ふて飛行し、終に其海の遙かの岸なるコルチスと云へる所に留まれり。フイリキザスは、壯年に及んで此國の王イーティースの女カルシヲペを娶り、後其小羊を犧牲として神に捧げたり。イーティスは其皮毛を剝ぎて、軍神エーレスの廟前に樹てる山毛欅樹に之れを針附けたり、

既にしてフイリキザスは世を去り、其處に葬られたりしが、遠く父母の國を離れて天涯に死せしを以て、其靈魂は彼の地に留まり得ずして、故郷の地に彷徨し來り、夢中彼れは其近親の枕頭に顯はれ、哀訴して曰く、願くは予が靈魂の羈絆を解きて、之れを安住の郷に從けと、斯の如く毎夕予を惱ますと殆んど七年餘に至る。然らば如何せば汝の靈魂の羈絆を解きて自由ならしむべきやと問へば、彼れは曰く、海を越ゑてコルチスに至り、其處に在る黄金色の羊毛を我が故郷に取り戻せば、我が靈魂は之れと共に故郷に返り、父母と共に安住するを得んと、然れども此は之れ至難の要求にして誰れか敢て船を艤して千里の遙海を凌ぎ以て彼の前人未知の國なるコルチスに至るを得んやと。此れペリアスがゼーソンに語れる說話の顚末なり、ゼーソン聽き了りて默然として語なし、然るにペリアスは更に他の事柄に付て倚ほも語を繼で曰く、見よ予は今一事の汝に語るべきものあり。我國内に一人あり予は此人を以て世界に於て尤も恐るべきものと思へり。今日に於ては予は彼れよりも勢力あるを信ずと雖も、今に於て我れ先づ彼を制せずんば彼れは到底我國に禍し我身をして破滅するに至らしむべき者なり如何にして我先づ彼れを制せんか、汝策あらば乞ふ示す所あれと。ゼーソン答へて曰く、見をして伯父の地位にあらしめば必ず先づ其人をして黄金色の羊毛を取り回さしめん爲に彼れを派遣せん、然らば彼の生還殆んど期すべからず、依りて以て枕を高ふするを得べしと。此一語を聞くや否や、ペリアス苦笑して曰く、見よ然らば予は汝を派遣すべしと。ゼーソン始めて其奸計を覺り、怒氣心頭に溢れ、席を蹴て起ち將さにペリアスに摑み懸らんとせしが、俄然として先師カイロンの彼れを戒めたる一語――汝の口より出でたる言は決して之を食む勿れ――と想起し、遽かに顏色を正し溫言以てペリ

アスに答へて曰く、伯父よ予は汝の全く詭計に陷れり、然れども今や固く決する所あり。誓つて我が言を守り、黄金色の羊毛を探り來るべし。伯父も固く汝の約束を守り、予が再び還り來るの日、潔く汝の王國を予に與へよ。且つ使を遣はして遍ねくミニーの諸王に告げ、同志を募らしめよ彼等は予の同號にして、曾てペリチンの山に在るの日、共に親しく敎をカイロンに受けたるものなり。彼等にして之を聞かば、必ず奮ふて一臂を予に假すを惜まざるべしと、ペリアス終に之を諾し、相互に固く誓つて別れたり。

水の話

好菊女史

水が萬有界、特に生物界と如何に大なる關係を有するかは一言の云ひ盡くし難きところにて、萬有界の變化を來すも水に由り、若し水無ければ依然として變ることなく、地球上は暗黑世界なるべし、左れど水あるが爲めに地球上の諸物躰に相關的變化を起さしめ、動植物の現存するも亦之れに起因するなり、實に此萬有界の天然に起る化學的變化は水の媒介に由るもの多きなり、否な全く水が媒介を爲すと云ふも敢て過言ならざるを信ず、かく萬有界に必用なるが故に天地間に存すること水に如くものなし、天然には泉水、河水、湖水、海水、鑛泉などの有樣にて廣く存在し、鑛物鹽類中には結晶水、化合水の形と成りて多く含有され、空氣中には水蒸氣、雲霧、雨雪、霰霜などの形にて存し、其他動物躰、植物躰、凡ゆる有機化合躰には水を含有せさるものなく、枯葉の如く水分なく見ゆるものすら猶ほ百分中八十五は水なりと云ふ程なり。

水の必用なるは云ふまでもなく、生活上缺くべからざるものにして、飲料水、煮炊きの水、洗濯水には日常一日も無かるべからざるものにて其他工業家には機械

の原動力を起す蒸氣にも器物の洗滌にも、殊に釀造家、染業家、凡ゆる藥品製造家等には、水無くんば一日も其業を爲す能はざるべく、化學家に取りては溶解劑、試藥として廣く、用ゐられまた藥としては昔へより廣く用ゐらるゝものなり。

水の天然の所在、幷に水の効用は既に略言せり、左ればば如何なる水が純粹の水にて、其用ゆる目的に適するかを述ぶべし、水の純なるものは蒸餾水を最となし、天より降る水、(雨雪の如き)、井戸水、泉の水、谷川の水、大川の水、湖の水、海の水、鑛泉の順となるべし、左れば化學家はなる可く純水を要すれば蒸餾水の必用あるも、日常要する飲料水、煮炊きの水は其用ゆる分量多きが故に、天地間にある水にて成る丈け純粹の水に近きものを撰ぶこと必要なり、天然に在るものにては雨水、雪水を空中數十尺の上に受器を設けて降り始め後數本分頃より得たるもの尤も純粹なるも、其手數なると雨雪は常に降るものならざるが故に井戸水、上水、又は水道の水を常水となし居るなり、水道の水は天然の水を一度濾し鐵管を通して貯水場に貯へ、之れを再び鐵管にて導き終に鉛の細き管にて家に導くを通例とす、上水は蓋なき川を長き間流れ來り、たゞ枯葉粗雜の塵埃を去るに止まり碌々濾しもせず、木管を通ずる故に水道の水とは大に異り井戸水と殆んど異らざるなり、元來水は何にても溶解する性あるを以て、其通過する地層中の種々なる鑛物、鹽類、有機化合躰を溶解し來れば、井戸水、上水、水道の水は必ず溶解物を含み純粹なる水ならざることは言ふを俟たざるなり然らば、井戸水は其含有物、井戸のある地層に由ても異れば井戸側の腐蝕、または其近傍の不潔物の有無等に大に關するなり、水道の水、上水の水が其通過地の如何、其淵岸等に由りて其含物を異にす。

其主なる含有物は如何なるものなるかと云ふに「アル

カリー」土類の鹽酸鹽類、硫酸鹽類、炭酸鹽類、硝酸鹽類及び硅酸鹽類、等を含み、微量には鐵、「アルミニユーム」「マグネシユム」の鹽類、並に「アルカリー」、氣發「アルカリー」（アンモニア）も鹽類となりて含有し、其他有機化合体、空氣及び空氣中の瓦斯等を含みて水道に在て鉛管を用ゆるものは鉛を含有す（勿論鐵「ハンダ」をも含む）故に純水に比すれば遙かに多くの物質を溶融し居るなり、左れど飲料水（飲料水と煮炊きの水とは同質のものにて可なる故以下飲料水と云へば煮炊きの水をも含めば諸孃其心して讀み玉はんとを）には全く純水にては味もなく消化も惡しければ多少の無機鹽類を溶かし炭酸（二酸化炭素）を吸收せる無色、無臭、透明の一種の味ある水を通常好しとす、左は云へ其含有物には常成分と夾雜物との二種ありて如何に透明の水なるも夾雜物を含むものは飲料水と爲すを得ず必ず飲料水には常成分のみを含む水ならざるべからず

常成分とは如何なる物質なるかと云ふに

鹽基にては

「ナトロン」

「カリー」

石灰

マグネシユーム

鐵

「アルミニユーム」の微量

酸にては

炭酸

鹽酸

硫酸

酸に在ては往々硅酸を含む水あるも有害ならず其他水は天然に存するもの故空氣を含めば從て窒素、酸を溶合す、

以上列記の常成分のみを含む水を以て善良なる飲料水

とす、然したとへ常成分のみを含む水とは雖も其常成分の含有分量の多寡に由ても亦良否の別、生じ來るものなり、

其含有量に至りては鹽基物は水壹千立方「センチメートル」を蒸發して蒸發殘滓として

〇、五立方「センチメートル」　石灰マグネシエーム其他鹽基物の鹽の殘滓としての量

酸にては水壹千立方センチメートル中

〇、〇〇八――〇、〇五グラム　鹽酸（無水）

〇、〇六三――〇、〇九グラム　硫酸（無水）

炭酸は少量に含むものは快味を與へ飲料に尤も適したるものなるも多量に含めば鑛泉となり所謂炭酸泉なるものをなす、

然らば夾雜物とは如何なる物質なるかと云ふに

鹽基にては

「アンモニア」

酸にては

亞硝酸

硝酸

其他

硫化水素

及び尤も恐るべき

「バクテリア」

等にして其中硝酸は〇、〇〇四乃至〇、〇一グラム（無水にして）位の少量なれば含有するも敢て有害ならざるも〇、〇一グラム以上含むものは忌むなり、また少量の「アンモニア」亞硝酸は其のもの自身決して人躰に害あるものに非るも「アンモニア」及び亞硝酸のある以上は井戸の附近にある動物性の腐敗物を井中に持ち來せし哉の虞れあり、故に此の如き井水中には往々「バクテリア」類ありて大に危險なるものなり彼の俗にサ

シ水のする井戸の水は尤も危險なるものにて上層の有機物類を多く洗滌し來るものなる左れば夏冬井水の温度を異にする井戸は注意を要すべきなり、何となれば太陽の光線は地下二十尺位より以下には及ぼさず然かるを夏冬井水に温度の差を生ずるは何か原因なかるべからず之れ上層より來る水あるが爲めに井水の温度に關係を及ぼすものなり上層より來る水は前述の如く上層に腐敗せる動物質等を洗ひ來る故大に危險なるものなり、然し夏冬井水の温度の差五、六度位ひの井戸なれば差支へなし。（つゞく）

家政

話のくさ〳〵

勘定　　黄花

もはや今年も暮近く何處の家も仕事のしまひ返禮などいろ〳〵いそかしき中に、一ヶ年間の金錢出入の決算をしらべ、新たに迎へむ年の豫算を定め置くは最も大切の事なるべし。

現に行へる人もある可けれど年末には一ヶ年間月々の支出入の統計表をつくること肝要なり。此は經濟上は無論のこと、これをみて一家の歴史を想見し、後年の參考となる事少なからず。殊に出入多き家にありては、月々の支出入を賄費交際費敎育費被服費……等と分類して計算すれば猶更明白に知り得、例へば賄費が月々次第に增加するを見て奢りの增長（尤も物價騰貴にも關係すれど）せるを知り、毎年正月と某月とは交際費の多きをみて、來年の豫算の參考とするなどいろ〳〵の便宜多かる可し。今參考のため帳簿の種類計算法の一つを記さん

帳簿は元帳日記帳賄帳（賄帳は記すべき品多きゆゑ日記帳と分ちたる方便利なり）統針年月表の四つにて、

賄費の外日々の支出入は何々費と明記して凡て日記帳に記入し、家相應に元帳を分類してかつ〳〵其項目の下に付込み、月々月末に統計表に記入しゆけば、年末に至り大に手數を省きて便なり。

計算は月末に總計して月々別にするが普通のやうなれど、累積計算も亦一の好法なるべし。十日目毎に計算し、十日〳〵に前の計算に合し、今月と來月を合計し、漸次年末に至れば特更にせずして一ヶ年間の總計を知り得るなり。少しめんどうなれども間違少なかるべし。

月表の外に年表もつくりおかば生涯の變遷をみるにおもしろかるべし。

おだて　同

小兒を躾る上に最も注意すべきは小兒をおだてる事ぞかし。おだて〳〵小兒に用ゐれば、小兒はよろこんで命に服しほめられんがため氣轉をきかして善事をなす。一寸無事に治まりて便利なれども眞實小兒を躾る上よりみれば實に不親切なる仕打ちといふべし。小兒の心はために浮華となり報酬なければ善事をなさず、表面をよろこび人言に左右せらるゝ弱虫となるなり。みだりにほめすかしおだてる如きはよく〳〵つゝしみて、値なしに善事を行はしめ當然の義務と感ぜしむる事大切なり。もし從はざる時は人情道理をときさとして納得して從はしむべし。決して近徑をゆく可からず。

卵につきて　同

卵の擇方　日光にすかし見るは誰もよく知れど、倘一層速かに見分る法は、桶に水を盛りこれに卵を入るれば、新しきは底に平らに沈み、古きは坐りわろく、浮むに至りては腐敗したる證と知るべし。

卵の貯法　卵を貯へるには鹽水、砂糖を用ゐる法もあれど、最も大丈夫なるは石灰百匁に二升五合の水にとかしたる石灰水中に貯ふるにあり。則瓶或は甕に卵

の細りたる方を下にむけて、縦にならべ、上より右の石灰水を注ぎ、よく蓋をして暗き冷かなる處におけば、夏の腐敗しやすき時節も三ヶ月は必ず保ち得べし。卵の白味のみ用ゐて黄味をのこし置くときに、直に器に入るればかたまりつきて後の用に不便なるものなり。是は器に水を少しいきて黄味を其上に浮ばし置けば、取扱上甚だ便利なるべし。

小兒學齡に達するまで

蒲　公　英

嬰兒母の胎内を出て、呱々の聲を擧くるや其小さき柔弱き身躰は數週の間唯母の乳房を吸ふと眠るの他は爲すことさへなく殆んど無意識なるが如し見ゆれば此時代には未だ敎育なと、六ヶ敷きことに就ては喋々するの要なしと考ふる人もあるべけれと此哺乳と睡眠との度宜しきを得せしむる様躾をなすは抑敎育の初歩にして其躾宜しければ嬰兒は一定の時間に哺乳し心地よげにすや〳〵と眠りいと壯健に成長すべけれど其躾惡しければ常に啼きむづかりて夜も晝も安眠することゝてなく又哺乳時間不規則なるが爲め遂には不消化病を起すに至るべし而してよき事もあしき事も一度習慣となりては嬰兒成長の後までも中々に矯正し難きものなれば殊に注意を要すべきは此時代なり

小兒稍々成長して未だ自己にて是非曲直を判別するの能力なき時代にありては父母の一言をきかば即ち其に習ひ一行を見ば即ち其に摸倣るものなれば父母にして正直寛大忍耐等の美德を備へたる人ならんには小兒も此等の德ある人と成長すべけれど若し父母の性質是に反せば小兒も又同し人物となるべし「行爲は言語よりも大音に語る」との諺は實に眞にして父にても母にても幼兒に對して荒々しき言を發し或は短慮にして打擲などなさは白糸の染み易き性質は忽ち其感化を受けて後

に至りて矯正せんと如何に力を盡すも其甲斐なきに至るべし實に父母たる者は其一言一行は皆其子の摸倣する所となるものなれば其子を善良有爲なる人物となさんことを願はゞ先づ己れを省み己れを敎ふることより初めざるべからず

一軒の家屋を建築し或は一個の器械を製造するすら先づ少なからぬ時間と腦力とを費やしてこれが意匠を考案せざるべからざるに況して萬物の靈長たる人類を養育し之を敎育するの任ある者は時々刻々其子の躰育智育德育に注意し如何にせばこの天職を果たし得らるべきやとの問題を考究して止まざるべきなるに世には己が利慾のためには寢食をも忘れて汲々たるも其子の敎育に就ては殆んど意を用ゐざる者多きは實に嗟歎すべきことにこそ

小兒學齢に達するまで家庭にて施すべき敎育は即ち學校敎育の準備をなすにあり而して敎育なる語はもとラテン語の引き出すといふ意味の語より來りしものなれば敎育を授くるとは外部より種々狀々なる智識を詰め込むこと即ち六かしき言語や文字を數多く記臆さすることに非ずして小兒か生れながらに携へ來りしも未だ醒起せぬ諸能力を醒起せしめ引出して之を正しき方向に發達せしむる樣指揮するにあり即ち小兒の身躰が充分なる發育を遂げて健康無病なる樣保護すること心意の諸能力即ち智力の働を起さしめ次第に發達せしむる樣誘導すること並に小兒をして能く己れを制し德を修め以て人たるの本分を盡し得るの人物と成る樣敎導するにあり而して幼兒は專ら母親の手に養育せらるといふも可なるものなれば其敎育法を研究するは母たる人の一日も忽にすべからざる務めなり

此世界は幼兒に取りては新世界にして見るもの聞くものの一として珍らしからぬはなく其小さき胸は常に疑問もて充たされ其活潑なる腦は其答を求むるに忙はしく

其鋭利なる眼は何物をか探し出さんと四方に注かれ其敏慧なる耳は何事をか聽きつけんと絶へず欲だてらるゝなり而して此好奇心は外界の事物より智識を得るの好き媒介となるものなれば母たる人若し其子の利益幸福を願はゞ其何事をか學ばんと熱心なる機に應して相當の助を與へ敢て時間と盡力とを惜まざるべきなるに世には却て小兒が好奇心强く多くの事を質問するを煩はしとて叱りつけ此貴重なる天性を抑壓する者多きは實に惜むべきことなり

小兒が常に此品を取り彼の物を持出して寸時も目の放されぬを惡戯者よと叱りつける人多けれど彼が貴重なる器物を破壞し大切なる書物をこぼつとき其心は何物をか見出し何事をか學ばんことを願ふの念一ぱいにて敢て他事を思ふの暇なければ已れは他人の迷惑となることを爲し居るなどゝは毫も氣付かざるなり凡て小兒は勤勉なる大人と同じく何事をか爲しつゝあるに非ざれば愉快なるを得ざるものなれば其弄ぶべき品物をも與へずして彼自から探し出したるとき叱りて取り上るは無理なり彼の目に觸る物は何物にもあれ忽ち取りて之を破壞し其內面を見極めんとする時に當り片々に取りこわし再び搆造し得る品を與へて其搆造力を養ふことは最も肝要なりかの幼稚園にて立方躰長方形長圓形環等の種々なる形を小兒に弄ばさせ思ひのまゝなる形狀を組立てさするは其想像を滿足せしめて至て有益なるものなり

小兒は自己の能力にて新らたなる形狀を案出さんとして自然に創造力を養ひつゝ一物を搆造し終らば大に滿足を覺ゆこれ彼の建築士或は技術家が好意匠を案出せし時の愉快或は文學者が其思想を現はすべき名句を得し時の快樂と毫も異ることなしされば小兒成長して物の價直を知り之を保護し得る年齡に達する前はあまり價高き破壞し易き弄物を與ふるは無益なり何物にても

先づ破壞して見されば滿足せざる幼兒に美しき人形或は玩具を與ふるは品物を貴ばすして徒費するの氣風を養ふものなり世には社會か日々奢侈に流れ行くを歎きながら尙ほ己が子を愛するのあまり其玩具のため過分の金錢を投し以て襁褓のうちより奢風を奬勵する父母多けれどこれ實に注意すべきことなり

幼兒の腦力並に身躰の諸部は未だ發育不完全なれば其語るや言語に誤謬多く其歩行するや倒れ易く又其中の業は極めて拙し即ち此より追々に學ひ且つ修練せざる可らざるなり然れば母親たる者は其子が不完全ながらも事を試みんと盡力するを助け奬勵し又其誤謬を正すの責任あるものなり而して小兒が何事にもあれ請求する時忙はしとて叱りつけ或は質問を爲すとき其心は他事を考へながら不注意なる答などなしたらんには此任は果し難るべし常に忍耐深くして如何なる面倒なることをも其子の利益とならば厭はずして爲す人こそ眞の良き母とこそ云ふべけれ

凡て小兒は何事をか爲し居ることを喜び常に何か遊ぶ物を下さいと求むるより寧ろ何かさして下さいと願ふものなり而して此性質は敎育上大に便宜なるものにして彼は大人と同じく一事を爲しありと大に滿足に覺え居る間に知らず〳〵多くのことを學び居るものなり

小兒をして事物を精密に且つ正確に觀察せしむる樣助け導くは甚だ有益なるものなり例へば彼新らたに一の玩具を得たりとせんが母は其玩具の特性を指示し其を現はす言語を敎ふるなり即ち其玩具は兎なりとせば其眼は赤く毛は白くして柔らかに足は四本なりなどゝ小兒に見出さしめ次に相似たるも稍異りたる品と比較させ而して同じ點を差異ある點とを示すべし左すれば彼は追々自から一物を觀察し他物と比較するを得るに至り遂には其か習慣となりて見る物皆正確に觀察するを得べし

世には其觀察する所は至て不精密其聞取りしことは誤謬多くして信ずるに足らざる人多けれど這は大抵其視力聽力の不完全なるに非ずして其視る所の物躰或は聽く所の音聲に注意力を聚むる能力の不充分なるによるなり假令物躰は眼の網膜に彩るも視神經の知覺なきときは腦に印象を起さゝる故に盲人たるべし又眼の觀察力を敎鍊せされは物躰の精確なる印象を腦裡に與ふること能はざるが故に其物躰は腦中に明瞭ならず見し事を想起せんとしても影の如く朦朧としてたしかに言語に現はすこと能はさるなり然れば母が其子の幼時より勉めて觀察力を修鍊せしめなばその後來を益すること少からさるべし

又小兒に其耳目を精確に用ふることを敎ふると同時に又記臆力をも敎鍊することを得るなり凡て人は興味を多く感すれば感する事ほど長く後までも記臆するものなり故に小兒自から觀察して見出し得たる事は即ち自己のものとなるが故に忘るゝ事は甚だ稀なり而して彼稍々成長し假名を讀み書き得る頃とならは其見しことと學びしことを文字に現はして大に娯樂しむものなり例へばいの字とぬの字にていぬなる語をなすものなりと敎ふるも彼嘗て一匹の犬をだも見しことなけれは何の興味も覺えざるべし然れど犬は日々彼が見知り居る動物なればいぬなる文字は其動物を現はすものなりと悟り大に興味を覺ゆるものなり又いの字ととの字を併せて母か毎日使用する糸なりと敎へなは遂には彼自からの能力にて種々なる名詞や語を作り出すを得るに至り斯くして容易に文學を學ぶことを得べし

又數を學ばしむる時にもたゞ一二三と無形の數を暗誦させなば小兒には容易に記臆し難けれど彼の弄ぶ木片なとを取りて一つ二つと數ふることを敎へ次に木片一つと二つとを集むれは三つとなり二つと三つとを集むれば五つとなるべしと目に示さば彼容易に解し得べ

し普通の敎育學識ある成人にして其腦中に收めたる語を適用して己が思想を單簡に且つ明瞭に顯はすに拙くして不自由を感ずる者多くあれど這は幼時に於て其思想を巧みに言語に顯はすことを修錬せざりしに因ること多し我等か一の事實を語らんとせば先つ其を能く辨知し次に其を顯はすべき相當の語を選ばざれば己が思考する所を寸分違はざる樣聽者に告げ知らすること能はざるべし而して此能力は幼時に於て大に修錬することを得るものなり小兒一の思想を得たらば之を自己の言語に顯はすを得る迄は決して滿足せしむべからず即ち小兒自から發見せしか或は他人より學びし簡易なる事實より初めて之を正しき言語に顯はす樣敎ふべし例へは「火は熱ふ御座います」「猫には耳が二つあります」等の如き極めて簡易なる事實と雖も完全に一の句を搆造することを敎へ次第に復雜なる事を明瞭に且つ誤謬なく顯はすことを敎へなば後に至りて彼多數の人と交際する所又演壇に立つべき場合にも遭遇せば其利益や測り難かるべし實に小兒に明瞭に思考し且つ之を巧みに言葉にあらはす樣敎ふることは最も肝要なることなれば父母たる者は己れ先づ注意して決して粗忽の言を吐くべからす

凡そ家庭の風儀か小兒の德性智性に影響を及ぼすことは恰も其食する食物呼吸する大氣が其身躰に影響を及ぼすか如し家庭の風儀周圍の感化力は彼か直接に受る敎訓よりも遙か有力にして知らず知らずの間に彼を敎育し其品性をつくるものなり母親が其子に向ひて誠實なるべし柔和なるべし物事を規律正しくすべしなとゝ數萬篇繰り返して說ききかするも其家庭內に於て虛言を吐き癇癪を起し或は物事亂雜ならんには其敎訓は何の功力もなかるべしさるを例は敎訓にまさるとの諺を輕視する家庭多くあるは實に歎はしきことなり

又規則のみ多く設けて小兒つ行爲を束縛する時は小兒の特質とも云ふべき安樂自由なる性質を失ひ天眞の美性をして發達する能はさらしむるに至るへし實に天然の諸德は慈愛てふ暖き氣候に遇ひてのみ嫩芽を生し漸ゝ成長し得るものなれば父母は慈愛もて其小兒に父母或は長者の命令束縛なきも能く自己を抑制し正を行ひ邪を避け得る樣敎へ導くべしさすれば小兒は常に己れの身の自由なるを知り專制者の無理に伏さしめられず長者に干涉せられずして己か思ふまゝを自由に行ひ居ることを覺え又同時に己れの能力の弱くして及はざる塲合もあらは父母は何時にても憑り賴むべき保護者敎導者なることを信して其心には一點の憂苦もなく常に平和安樂なるを得べし

小兒を敎ふるにあまり嚴しきに過れば其性質いじけ後來世に處するに當り最も肝要にして貴重すべき獨立心てふものを失ふべし唯權勢もて盲從せしむるてふことは是非正邪の辨別なき獸類を養ふには利益もあるべけれどいやしくも生を人類にうけて道理力を有する者を養育するには當を得たりと云ふべからず故に小兒に爲すべからずと禁制することは彼が理解し得る年齡に達せばかゝる事はしが〳〵の次第なれば爲すまじき事なりと其理由を語りきかすべし勿論未だ何故なるか其理由を解し得るの能力なくして父母の命に服從なさゝる可らざる塲合も多くあるべけれど這は己れ既に其故を解し得て從ひ居る事實によりて父母の考ふる處は常に正しくして己れのため益ありと信じて從ふものなり小兒も責任ある動物にして己れの善行も惡行も皆其責を負べからざるものなりとの槪念を勉めて幼時より養生すべし然れど小兒に過失あらば其多くは兩親より遺傳せしが或は其敎育法の宜しきを得ざりしに因るものなれば父母たるものは其罪を小兒にのみ負はしむ可らず而して小兒が其劣等なる性質を抑制し得ずして却て此

に打負けし時も決して忿怒の色を現はす可らず只其欠點あるを憂ふるの心を示し徐かに説諭すべし同時に又小兒に如何なる短所欠點あるも親の愛てふものは毫も變せざるものなることを示すべし又小兒我儘なる牲質に勝ち得たる時は大に喜ぶの意を示すべし實に己れを深く愛する人より賞賛を受るほど愉快幸福なるものは非じ

習慣は第二の天性なりとは誰しも知れる言なれど習慣に重きを置く人は至て少なし人穉褓のうちより正義を愛し正路を歩むべきことを教へられなば其習慣は天性となりて生涯曲路に迷ふの憂なかるべし

まことや吾人は子女を教育するに當りその天性ならぬものは人爲もて造り出すことは難かるべけれどその天賦の賜は賢しこき方法と慈愛の力によれば益々完全に近よらしむるを得且つは彼等が常に正義を愛し理想を高尚にして常にこれを逐ひ求むる樣教へ導くを得れば世の父母たる人よ勉め給へや

阿佛尼が宮仕へせし其娘にあたへたる書翰の中に

宮城野小萩

一おのれ自ら善と信ずといへども人の非難をうくる行は決してなすべからず

一人をして己を愛せしむるは誠と赤心とにあり容貌の美なると藝能に富めるか爲にあらす

一多くの朋友をもつて無益なるべし撰び抜きたる二三の親友あれは足れり不善なる友と樂しみを共にすることを謹め

友と交るに厚きに過き又薄きに失すへからす又差出過き或は控へ過くへからす

汝の友人に汝の心を知られん事を心にかけよ眞の朋友程稀なるものはなし

一家庭に在りて父母の膝下に住居する程世に幸福なるものはあらじ勿論宮中の生活は樂みは多けれども從て又苦痛あるを免れざるなり時には畢生の勇氣を以て當らざるへからざる事あり要するに宮中に在りては固く忠義の二字を守る事を忘るべからず

一時に或は春の朝の花にうかれ秋の紅葉に暮るゝを忘るゝ事もあらんされとも霜枯の草木ある事を忘るべからず世の中の無情を告くるには斯くも適切なるものはあらし

一苟にも不淨のこゝろ起りたらば速に是を除き去るへしわれ〳〵の生涯は眞に短夜の夢の如しよく心を留めて佛教を信し世俗の苦痛と困難とのために自ら煩悶を招く事なかれ

何ぞ夫れ意味の深遠なるや枕して紫式部の源氏物語にも相伯仲したる女訓といふへし今時の人の母も亦この心して子を敎へたらんには恐くは道を誤る事少なからん

幼兒の遊戯と玩具

定伯

なべて、幼兒は常にいと藹然温平たる境遇に居らしめて、以て喜悦の態能を保たしめざるべからず。蓋し若し左なきときは、其の內心、おのづから或ひは萎縮し、或ひは偏歪し、或ひは欝結して、到底平靜圓滿なる發達を爲さず、從つて活動力の充實せる人と成り難ければなり。老幼男女となく、常に嬉笑を以て過ぐせる人の、概して健寧に存在し、常に啼叫を以て暮らせる人の、概して羸弱なるは、敢て多辨を俟たざる所なり。

さて、幼兒をして嬉笑せしむるの方便として、常に用ひらるゝ者を何ぞと謂へば、遊戯及び玩具の二つにして、這は古今東西に通じて行はるゝ所あり。

幼兒の、未だ蠢爾として自動せざるに當りては、時々

母又は保姆に依りて、或る玩具を僅かに其の眼前に示さるゝに過ぎざれども、其の漸く自動し得るに至りて、其の自から頻に經驗百方にする所の發作は、必要なる機躰的發作を外にしては、他に殆んど遊戯と稱す可き者ならざるはなし。故に幼兒の遊戯は、人の人たる行爲の原始にして、又た教育の最大根底たるものなり。故に之を苟且に附せらるゝは、即ち教育の最大缺典たらずんばあらず。

大體に於ては、玩具は、遊戯に資用せらるゝの機械なるが如きの觀あれども、細かに觀察するときは、玩具が主となりて、却りて遊戯の方便其者を提供する者もあれば、又た巣に戯遊に屬せる所の玩具もあり。前者は、即ち興味又は多少の教育を豫考せられて、製作せられたる所の者にして、後者は即ち幼兒の能く遊戯に活用するに由り、或ひは、自から遊戯の經驗を爲さんがために求須し、若くは、自から作り出す所の玩具なり。之を要するに、均しき玩具にても、能動的に須ひらるゝと、受動的に須ひらるゝとに因りて、遊戯は必ず其の趨勢を異にし、玩具は、必ず其の資質の別かるゝものゝ多々なるを知る。例へば、かの花合せの道具たる四十八枚の骨牌は、純然たる賭博技に之を用ひらるれば、其の甚だ厭悪す可きは勿論なるも、若し之をして、繪の四枚宛を、急速に揃へ合はする所の競ひ遊びに用ひられなば、絶えて害無きのみならず、又た觀察力を鋭敏にするの點に於て、少補なきにしもあらざるべきが如し。

我邦の遊戯は、男女に據りて大差異あること、外の諸國に於けるよりも甚だしきが如し。然れども、間々又た男女に通じて、行ひ得るもの無しとせず。而して斯かる點あるより言へば、男遊戯、女遊戯と分かたんよりは、寧ろ之を文的遊戯、武的遊戯と別つことの、頗る妙なるを感ず。近來は、又た洋式遊戯法の輸入した

ると、學校などにて、晴天雨日共に同一遊戯の施され難き事情あるとの爲めに、戸内遊戯、戸外遊戯と云ふ新分類稱は起れり。然れども、是れも亦た、遊戯を以て、苟くも體育の主要作業なりと見做され得可しとすれば、寧ろ之を動遊戯、坐遊戯と分たるゝの可なるを思ふ。遊戯には、必ず多少の運動を作はざること無し。而して運動には、徒手若くは素體にて行ふ者、死物に對する者、活物に對する者、同類に對する者等の種別あり。又た之に關するローゼンクランツの分類法は、爰に參照せらる可きの價あるを知る。云く、

第一　下肢運動　常歩、趨走、跳躍等にして、竹馬、撓、舞踏、天秤、自轉車等の變樣なる者をも之に含む。

第二　上肢運動　提擧、鞦韆、擲投等にして、攀登運搬、桂桁操練、投環、弄毬、木球轉射、漕舟等の變樣を含む。

第三　全身運動　游泳、騎馬、單戰即ち擊劍、拳鬪、角力等之に屬す。

（右は、後に言はんとする所に、關係あるをもて、故らに挿めるなり）

更に積極的に、遊戯の、幼兒に大切なる所以を謂へば、幼兒の遊戯に於けるや、其の執る所の事物の存在に就いても、其の存在の目的に就いても、己れが全權を有せることを感じ、總て其の變易の心に任せて、其の自由の意ろもて、之を左右せしとて、毫も罰を被ふるの恐れ無く、全く其の自然の傾向に從つて、其の勢力を使用し得るに在り。又た其の結果として、大いに其の個性を發達するの機會多きに在り。

然るに、遊戯と雖も、幼兒は、決して先天的に之を能くし得るものに非ざれば、其の初程には、必ずや多少の指導乃至幇助を與へられざるを得ず。而して先だつものは、玩具なり。

故に、玩具は、劃切に敎育主義に應合せざる可からざるものなるは勿論、就中、體育上の裨益には、最も重きを置かれ、次いで又た、德育上、乃至、知育上等の効顯を豫考して、製作せられざる可からざるものなり。

斯く既に、玩具の敎育主義に依從せざる可からざる以上は、其の第一に、最も深き注意ある可きものは、其の之を弄する幼兒の年齡を豫考せらるべき事是れなり。從來我邦の玩具は、斯かる點に心せられたるもの少く、殊に肝腎なる體育の爲めに利益ある者誠に稀れなり。近年に至りては、開智的意匠を以て製作したる者、續出するの傾きあれども、是れとて、其の意匠の單複、構造の精粗等に關して、年齡の標準を置きて、以てしたるにあらざれば、之を或る小兒に施せば、全く無意味たり、又た或る兒に施せば、興味甚だ乏しきの感ある者多きのみならず、甚だしきに至りては、兒童の取扱ひ能はざるもの往々なり。

今ま善良なる玩具は、奈何と云ふ問題に對へんには、前陳の如き考察を臚列せば、蓋し其の正鵠に庶幾かる可きか。即ち、

一、玩具は、敎育殊に體育の理法に一致したる者ならざ可からず。

二、玩具は、各齡の幼兒の知力に適合したるものならざる可からず。(幼兒の用ひて、以て理會し得ざる者、若くは、興味を感知し得ざる者の如きは、毫も玩具たるの價値なし。)

三、玩具の形大、重量も、亦た各齡の幼兒に適合したるものなる可く、其の把握提撕するに於て、殊に其の運用するに於て、少分たりとも窮する者なる可からず。

四、六七歲以下の幼兒に供給すべき玩具は、成る可く單純なる意匠を以て製作せられ、然かも幼兒に取りて、何分の興味を覺ゆる者ならざる可か

らず。

五、玩具は、その野卑ならざる點に於て、克く德育を帮助し、その形色の高雅なる點に於ては、克く美育を帮助する者ならざる可からず。(註に云く、厨房の器物の如きは、意匠の頗る粗野なるものなり。形様の不恰好なる者、不鮮明なる間色にて彩れるもの丶如きは、何れの塲合にも、甚だ厭ふ可く、殊に三歳前後の幼兒には、寧ろ排斥す可きものなりけん)

六、玩具は、疵傷するの恐れ有るもの、若くは毒素を傳ふるものなる可からず。

七、玩具は、堅牢にして久しきに堪ふるものならざる可からず。然かも其の代價の低廉なるものならざる可からず。(近來の玩具は、實に此の點に大不合格なるもの多し)

(未完)

一日のつとめ

東京　稲葉生

人生に缺く可らざるは衛生にして一度び此衛生を誤る時は不時の疾病に罹るのみならず貴重の生命をも失ふ事無きに有らず故に左に衛生大畧を記して注意を促す

朝夕に濕したる手拭にて全身體を拭ひ務めて清潔にす可き事

毎日廿四時の内八時間は寢に就く可きことと

夜間寢に就き暇なき時は晝間なりとも補修の定時間は眠るを可とす

霧雨其他流行病なる時朝飯前空腹にて外出す可らず若し已むを得ざる事ありて外出する時は茶碗一杯の牛乳を沸湯に入れるか又は鷄卵一個を好く攪和して熱湯を澆き鹽砂糖の如き者にて味を附け飲むべし

食事の時今少し食ひ又飲み度所にて止むるを可とす決

して身體に適應せざる食物を食ふ可らず夕飯には消化し難き者を食はぬ様に務む可し

晝間身に着けたる下着は夜間に至れば必ず脱き替ゆべし垢氣あるは身體發熱の氣孔を塞げばなり

炭素を吸呼する時は百病の媒となる者なり時々日向に出でゝ新鮮き空氣を吸ふ可し

新聞奇話等を視聽し又は庭園に美麗なる花等を眺め常に心を慰むる様注意す可し

何なる憂悶あるも成るべく愉快心を起し常に平和に生活す可し

衛生料理法　同

料理の上にて常に注意すべきは鳥肉獸肉魚肉とも生にて食す可らず油いり湯煮白燒蒸燒等にして夫れより味を附く可し

魚肉等を柔かにするには白燒になしたる後に蒸すを宜しとす又野菜にて生の儘用ふるも妨け無き者は

葱　蒔　八重なり三つ葉　茗荷だけ　防風　獨活

生姜　山葵

以上は洗ふ可きは容易なれども鹽味噌粉の類雪花菜等の洗ふことの叶はぬ者は最も注意して虫及び塵等を防くべし蠅の附く時は次第に依り食物に毒を殘すことあれば折角衛生に適ふ仕方も不注意よりして病の媒となる事あり此外煮燒は鹽氣の過ぎるは宜しからず

右は凡て心得のみにて鍋庖丁等は金氣綠靑錆等を防ぎ煮燒したる者へ水を入るゝは腐敗を招けば最も注意す可し鳥獸の肉類を柔かにせんには最初に葛粉又は片栗粉を混して再び叩き之を湯煮したる上に味を附るなり

其他(慈姑)の如きも卸し丸め油にて揚げ用ゆれば老人の口にも適ひて消化よし

小鳥及び鷄肉は肉筋を横々と切る可し

海老鰈鮎其他の物を揚るには先づ肉を湯煮となし布巾を覆ふて水氣を去り水にて煉りたる温飩か蕎麥粉にま

ぜ油へ投ず半片は湯の煮立たる中へ炭酸曹達少しを入れ右の湯にて二三分湯出て水へ投じ後用ふべし

薩摩芋長芋百合馬鈴薯の如きは水氣を多分に含むが爲めに十分火を强くし煮立たる中へ投し迅速に湯出るを要す是其の湯の中へ出る滋養分を防ぎ且味を損せぬ爲なり

菊の葉　蓮の葉　莢えんどう　葉にんじん

以上鹽ゆでを可とす諸春菊の類は切合にすべし

蕨　牛房　空豆　芹　根芋　黑くわい

以上の類は好く湯煮なし必ず少くも二時は水に漬く可し蓮の卷葉は油燒にして味噌にて味を附けるを宜しとす

醬油の中に常に上等麻にて袋を縫ひ辛子の中へ少しの桂皮胡椒及び細かき胡桃を混じ袋へ入れ口を堅く結びて入れ置くべし

砂糖は蒸餾水一升に砂糖三十目を混じ煮立たる中へ生立子の白味をかへ(あく)を拔たるを冷し絹越にして口を堅くし貯へ置きて入用の時用ゆ可し

揚油は榧を以て極宜とすれど上等の胡麻にても宜し

蒲鉾蒟蒻生麩の類は用ひぬ方なり此取合せは鷄の油いりに諸の切合海老の揚物に酢芹鮎の鹽燒に百合の木の(芽あへ)の如き先づ輕重を取交ぜて總て胸を開く爲に山椒胡麻其外の藥味を添へ食終れば水菓子を出し又總菜にも心して爲すべし

玉子は半熟に限ると云其半熟の仕方にて手早きは鍋に油を敷き熱せし時玉子を上より徐ろに落せば黃味は眞中にありて白味より燒け初め色白く變したる時金匕にてすくひ取り器に盛りて燒鹽を振り掛け胡椒をも少し振り掛く可し

鳥獸肉の類も餘り煮過ぎたるは消化せざるの傾あれば宜しく適度を撰むべし

牛肉良否試驗　同

近年我國牛肉を食する者非常に增加し隨而撲殺の數を增し需用多を要するが爲府下の或牛肉店などは馬肉又は不良の肉を混じ賣捌きたるとの事なれば充分吟味し食せざれば反對に衛生上大なる害を釀す事あり故に爰に試驗法の大畧を記す

善き牡牛の肉は其筋弛散して其色は赤く其肪は黄色を帶ぶ牝牛は其肉筋緻密にして其色は稍薄く其色は稍白し

老牛又は牧養佳からざる牛は其色に黑色を帶び脂は固くして皮の如し

指頭にて肉を推して試むるに指を去れば直に初狀に復す者は肥肉にして佳きものなり若し其狀に復する事遲きか或は全く彈起することなきは瘦牛と知るべし

犢牛の肉色は白きを佳とす然れども間々暗淡色の者にも亦佳味あり

牛肉の鮮紅色なる者は撲殺したる者なり窒殺或は刺殺したる者は暗赤色なり右は食用に最良なりとす

肉硬く枯燥したる者は荷牛車牛老牛にして皆其味不良なり凡而牛肉は牝牡に依らず五六歳を良とす

牛肉柔軟にして暗赤色の血液流動する者は腐敗熱病牛なり牛肉腐敗し易く咀嚼に齒に觸るは胞虫病なり

牛肉甘味の臭氣ありて味不良なるは痘瘍病牛なり

物價騰貴と生活費の膨脹

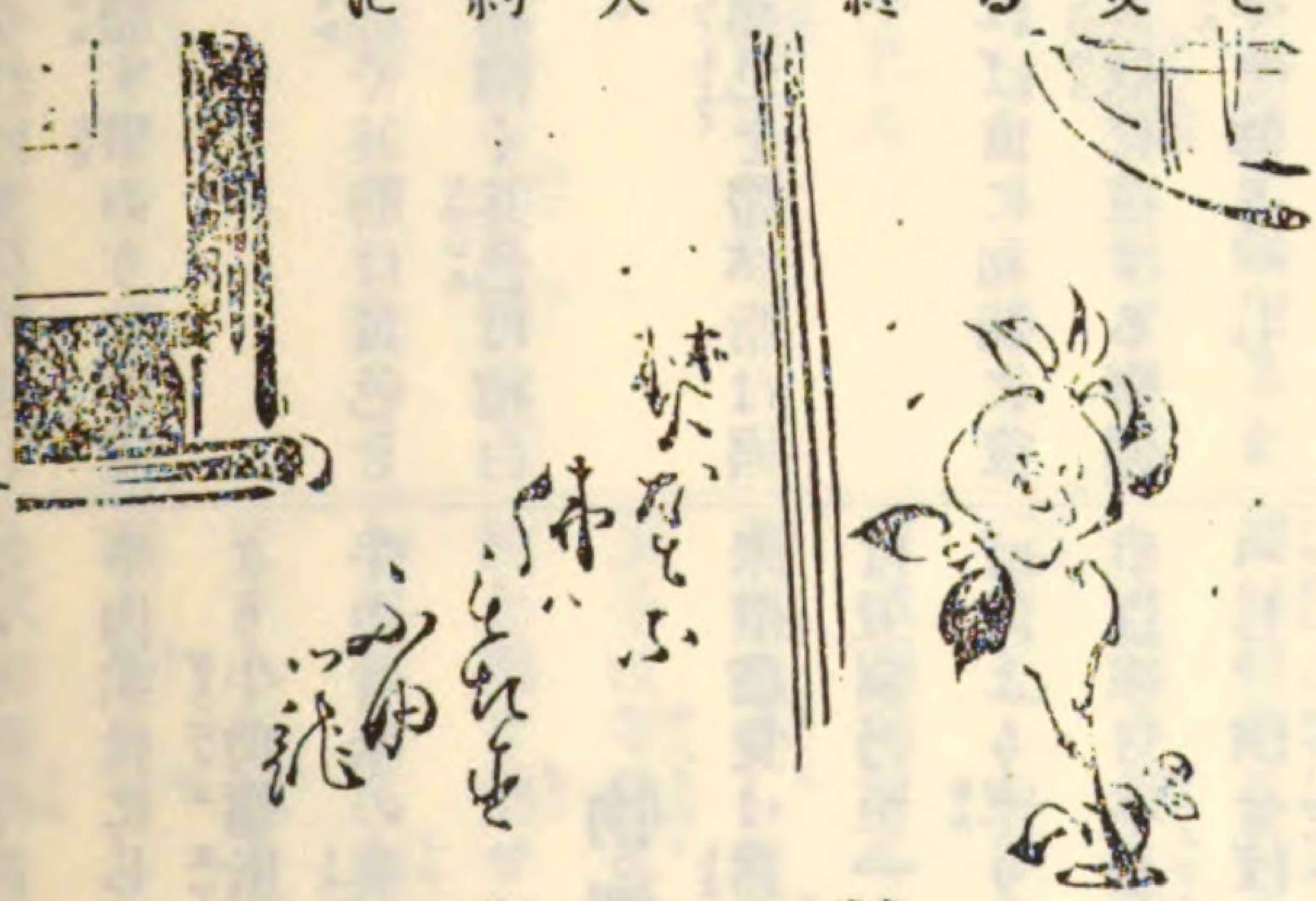
米價騰貴は諸物價騰貴の原因にして、之が爲め生活費は五割乃至一倍の膨脹を爲したり、而して米價の騰貴は何より來りしかといふに、其重なる原因は、日清戰爭以來日本全國民が意外に生活の大膽になりしに因るべし、例せば五年前は五十圓の月給にて生活せし人も五圓の家賃を拂ふを驕奢なりとしたるものが、今は二十圓三十圓の月給の家にて五圓以上の家を借り居る傾向となれり、生活の大膽となりしとは國民が日清戰爭

に我國が大勝を得し以來驕奢に流れしなり、素より驕奢に導きしは交通機關の發達せるは大きに與りて力あり、たとへば片山里にて稗、麥の外は何物を知らざる田舎人も、交通の便により米を常食とするに至り、未だ名も知らぬ物品も交通の便により購買力を促し、質素なる生活より次第に驕奢の生活に進み、終に今日の有樣とはなりたり。

此急を救ふは各人驕奢の風を禁じ、大に儉約質素の始にかへるにあり、儉約質素は陳套の文字なれど目下の場合に於て最も新しきを感す。

溫泉

夏ならば海水浴なれど冬向き追々寒くもなれば湯治に防寒の浴を取る人々多かるべし是れより温泉の話に付て記すべし



（畹　識）

温泉とは地下より湧出する所の泉水にして其の温度は平均氣温より高く稀には高度の熱を有し沸騰點以上に達するものあり

故に通例温泉と云へば温水の事なれど其の温度低く氣温より寒冷なるものは之を冷泉といふ

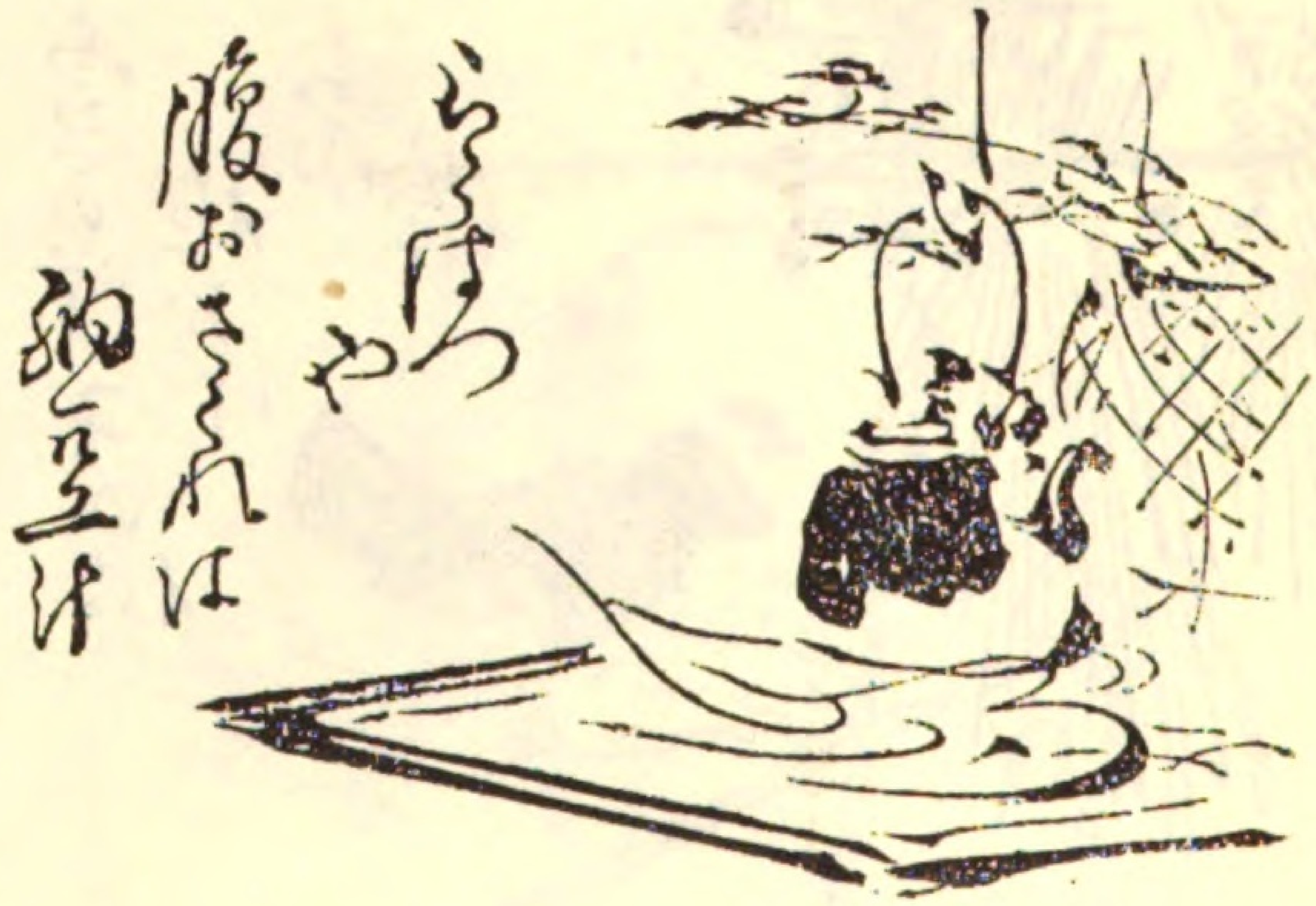
水質共に諸種の瓦斯及固形物を含有し各種の物質を溶解する作用を有するは元來水の性質として溶解力を有し且つ温水は冷水よりも溶解力顯著なる故に地心熱（地球内部は猛熱を有し地面を下るに從ひ漸次其の温度を遞加し平均三十三メートルを下る毎に攝氏寒暖計にて一度を増す割合なり）の爲めに温ためられ或は温水となりて地中を通過する際、地中に保

有する所の各種の物質を溶包して湧出するものなり而して冷泉の物質を含有する所以のものは一度熱せられたる時に溶解せるもの丶再び冷却せられて地上に湧出するが故なり

今其の含有する所の化學的性質に從ひ區別を立つれば炭酸泉、硫黄泉、鐵泉、鹽類泉の四種あり

（一）炭酸泉　アルカリ性にして主成分は炭酸曹達を含有し遊離若しくは化合せる炭酸瓦斯及硅酸を保有し泉質無色或は微濁を帶び無味無臭にして噴泉の穴孔には石灰石を堆積することあり我國には此の種類の温泉少なく肥前の古湯、柄崎、嬉野、豐後の別府村の諸温泉等なり

（二）硫黄泉　酸性にして主として硫化ソヂユーム、鹽化ソヂユームを含有し各種の鹽類を保有す腐卵臭の臭氣甚だしく銀時計を黑色に硫化せしむ多くは白濁を帶びて稀には透明又は半透明のものあり此の温泉は其數頗多にして伊豆の修禪寺、函根蘆の湯、上州草津、伊香保、伊豫の道後、但馬湯の島、肥前温泉岳、越後の關山、能登の和倉等其名最も世に著しく知れたるものなり



（晩哉）

（三）鐵泉　澁味著しく諸種の成分と共に酸化鐵を含有し泉底及附近の地には赤鏽色を附着す泉質冷泉に他の鑛泉と雖へども多少鐵分を混和せざるものなし箱根の根本、紀伊の龍神、豐後の澁湯等其名著し

（四）鹽質泉　鹽類泉と鹹泉との兩種あり孰れも食鹽を多量に含有し鹽化加里を合蓄す無色透明にして時には微

黄を帶び微小の鹹味を有するもの稀には無臭無味なるものあり其の鹹泉の鹽類泉と異なる所は鹹泉の著しく或は舌頭を刺躁するものあるが故なり而して此種の鹹味を有するは元と此地質が海底に沈積したるが故にして下野の鹽原、攝津の有馬、箱根宮の下塔の澤堂島、羽前の鶴脛、肥前の小濱、薩摩の摺濱等有名なり

泉水の湧出する形狀に依り次の如く類別す

(イ)無盡泉　間斷なく湧出する泉水にて泉水の地中に集まる所の瀦は大きく更に缺乏することなきものなり

(ロ)定期泉　時を限り期を定めて湧出するものにして伊豆熱海の如きものなり

右の外時節に關係し雨後は勢強く流出するも雨なき時は流出せざるものにて間歇泉の稱あり



（曉鐵）

我國は火山多き土地なるを以て温泉の湧出多く著名なるものゝみにて四百三十二ヶ所あり就中東山道は我國の最高脈及火山脈多きを以て從つて温泉の湧出多く百七十ヶ所に及べり福島縣會津の平野は四圍の高嶺火山質あるを以て其山脈には温泉の湧出多く其の數三十七ヶ所あり次は上野にして二十二ヶ所信濃に二十一ヶ所あり北陸道にては五十一ヶ所ありて越後に二十八ヶ所越中加賀に各十ヶ所あり東海道にては伊豆十三ヶ所相摸八ヶ所あり中國に三十一ヶ所四國に九ヶ所九州には七十ヶ所ありて肥後に二十四ヶ所薩摩に十四ヶ所豐後に十二ヶ所あり北海道に四十四ヶ所あり

温泉の効能あることに付ては和漢洋ともに大昔より知得せる所にて我國にては萬葉集の古歌にいでゆ(温泉)を詠めるものあり欽明天皇(三十五代)には攝津有馬の温泉に行幸あらせられたることあり其の効驗とて今日の如く化學的分析をして得たるものにあらず只だ實驗上病症に適ふ所ありとて其効能を知れる次第なるが斯く醫療上効能ありといふは諸種の物質を含有する内にも特に有力なる炭酸瓦斯硫化水素、及固形鹽類を含有するに因れるものにて其の内炭酸瓦斯は最も緊要にして内服用として腸胃病及呼吸病に効あり浴して皮膚の知覺過敏を減少するの効あるものなり

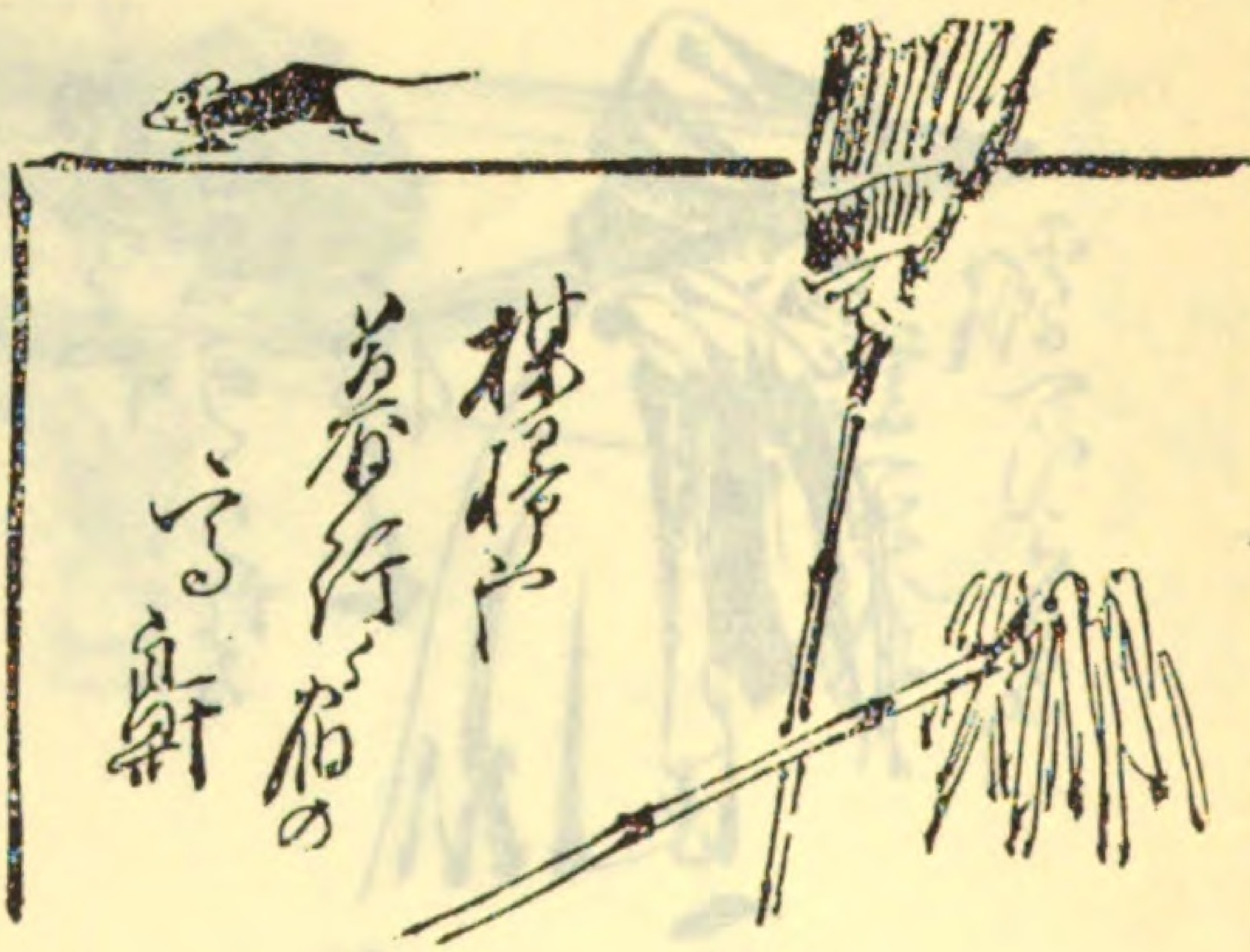
顔を洗はない

「トミー、お前王樣になつたらどうするかい」
「私が王樣になつたらもう毎朝、顔を洗はないわ」

小兒の世界

日帳記

雄ちやん記
御母さま註



(晩 蔭)

十一月一日 けさ、おとうさま、おでかけ、雄ちやんおるすゐ。おんまじやちやんひん〳〵。

雄ちやんは今歳五つで、御茶の水の幼稚園へ行つて居ますが、此の間まで御父樣と御一所に北海道で熊と御相撲とつて居たのだそうです。今朝は御父樣が早やあく金次を

連れて獵に御出かけなさつたものですから、いつもは御父樣と御一所でなければ御飯をたべた事のない雄ちやんが、珍らしく一人で小さな御膳へ座りました。そしてそれから御母樣の御仕事のそばでおとなしく御留守居して居ましたが、おひるつから、美術學校の御叔父さんが御出なさつて、雄ちやんに御馬の畫を書いて下さりましたら、雄ちやん大悦びで、御馬じやわちやん、ひん〳〵〳〵つて家中飛び廻つて嬉しがりました。じやわちやんと云ふのは、雄ちやん一人にしか通用しない、御叔父さんと云ふ事なのです。

●十一月二日　ぶちがぼくのきんぎよをとりました、ねえさんあざぶからおかへり。

雄ちやんが大事の大事の金魚を、今朝ブチがとつてしまつたので、雄ちやん眞赤になつて怒つて、サーベルを拔いて斬るぞ〳〵つて、ブチを追ひかけますと、ブチは面白がつて雄ちやんの足へジヤレつく、雄ちやんは倘かし怒る、それは〳〵大騷動でした。其の中にバタ〳〵の音も聞えなくなつてシンとしましたから、千代やを見にやりましたら、雄ちやんは御坐敷の眞中へ大の字なりに寐て居て、ブチは其の裾の方に丸くなつて居ました。



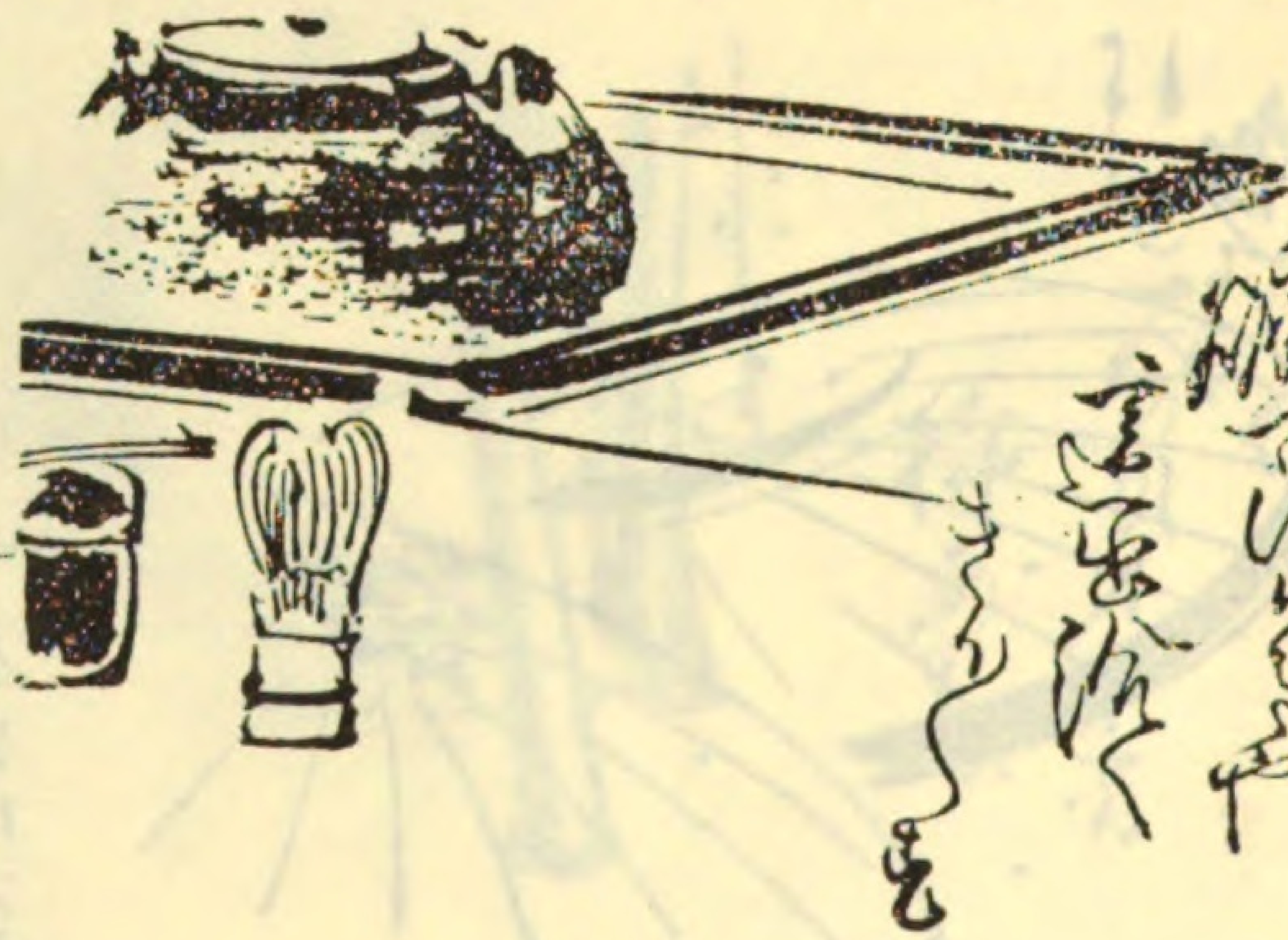
（晩　畿）

夕方、學校から御叔母さんがたが明日御休みと云ふので御歸へりなさいましたら、雄ちやんは非常に嬉しがつて、いろ〳〵北海道の御話をしてあげたり、昨日御叔父さん

に書いていたゞいた絵を持ち出したりなぞして、とう〳〵御叔母さんの御膝で寝てしまいました。

十一月三日　だんござかゆく、おとうさまも、おつかさまも、ねへさんも、ちやあちやんも、ちよやも、きんじも。ばんにかごめ〳〵。

今日は御叔母様がたと一所に團子坂へ行くといふので、雄ちやんは暗い中から目をさまして、千代やを起したり、金二を呼びに行つたりして火鉢の側に居たブチにまで、御前、團子坂へ行くんだから御起きよ〳〵なんて云つて居ました。けれども愈々出かける時になつて、雄ちやん何處へ行つたのか影も形も見えないので、皆で大騒ぎしてさがしましたら、御隣りへ上つて御隱居樣にまた北海道の御話をしながら、すまして御炬燵へあたりこんで居るんですものを。千代やが御可笑つて〳〵、其の又眞似をして居てとうとう九時に御出かけと云ふのが十時になつてしまいました。



(晩　謠)

夜、皆で集まつていろ〳〵なことをして遊んで居ましたら、雄ちやんがかごめ〳〵するんだつて自分が幼稚園で敎つて來た通りに皆を立たせて、サアいゝかい、かごめ〳〵かごん中の鳥は何時出て鳴きやる、まではやりましたが、そのあとを忘れてしまつたものですから、ジヤブ〳〵〳〵だなんて云つて誤魔化しました。其の中に御叔母さんが『朧月夜』を御歌いなさつたら雄ちやんもチツとして頭をふり

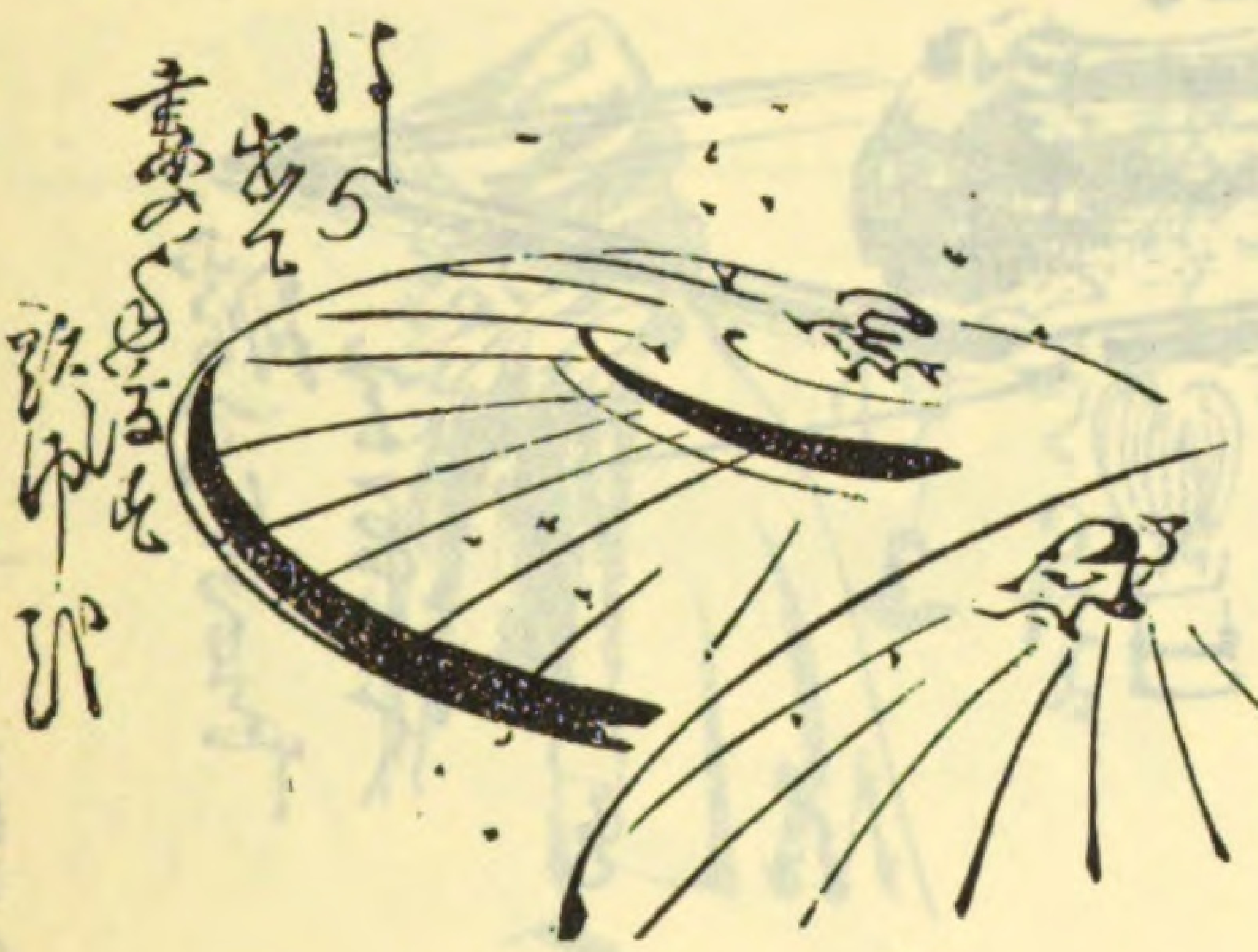
〳〵聞てゐましたが、そのまゝ今夜も御叔母の御膝へ寝てしまいました。雄ちやんは餘程歌がすきだと見へます。

十一月四日　ねへさまもおかへり、おとうさまもおでかけ、ぼくさむしくてさむしくてしようがない。

御叔母様は八時の御稽古に間に合ふ様にって六時に御歸へりなされ、御父様も雄ちやんがまだ起きない中に獵に御出なさいましたので、雄ちやん起きる早々御機嫌がわるく、千代やは今日の天氣は北の風曇だなんて云つてました。それで幼稚園も御やすみ、剣舞も御やすみ、北海道の御話も御やすみで、時々ブチの尻尾へ細を結び付けて遊ぶぐらいのものでした。

十一月五日　たみさんわるいひと、ぼくいまにかたきうつてやる。

今日は大分御機嫌がよくて、千代やと一所に幼稚園へ行きましたが、幼稚園であまり北海道の御話をしすぎたと見へて、多美さんと云ふ兒が雄ちやんは熊の子だ、熊の子やい〳〵つてかまつたつて、雄ちやんは泣き出して御稽古もしまはずに千代やにおぶさつて歸つて來ました。御ひるからは、其のかたきをうつてやるのだつて、サーベルをさしたり、ピストルを持つたり、軍帽をかぶつたりして御隣のジヤツクをつれて出かけましたつけが、夕方、その多美さんと云ふ子と一所に歸つて來て、御庭で何かまた北海道の話



（晩歳）

をして居ました。

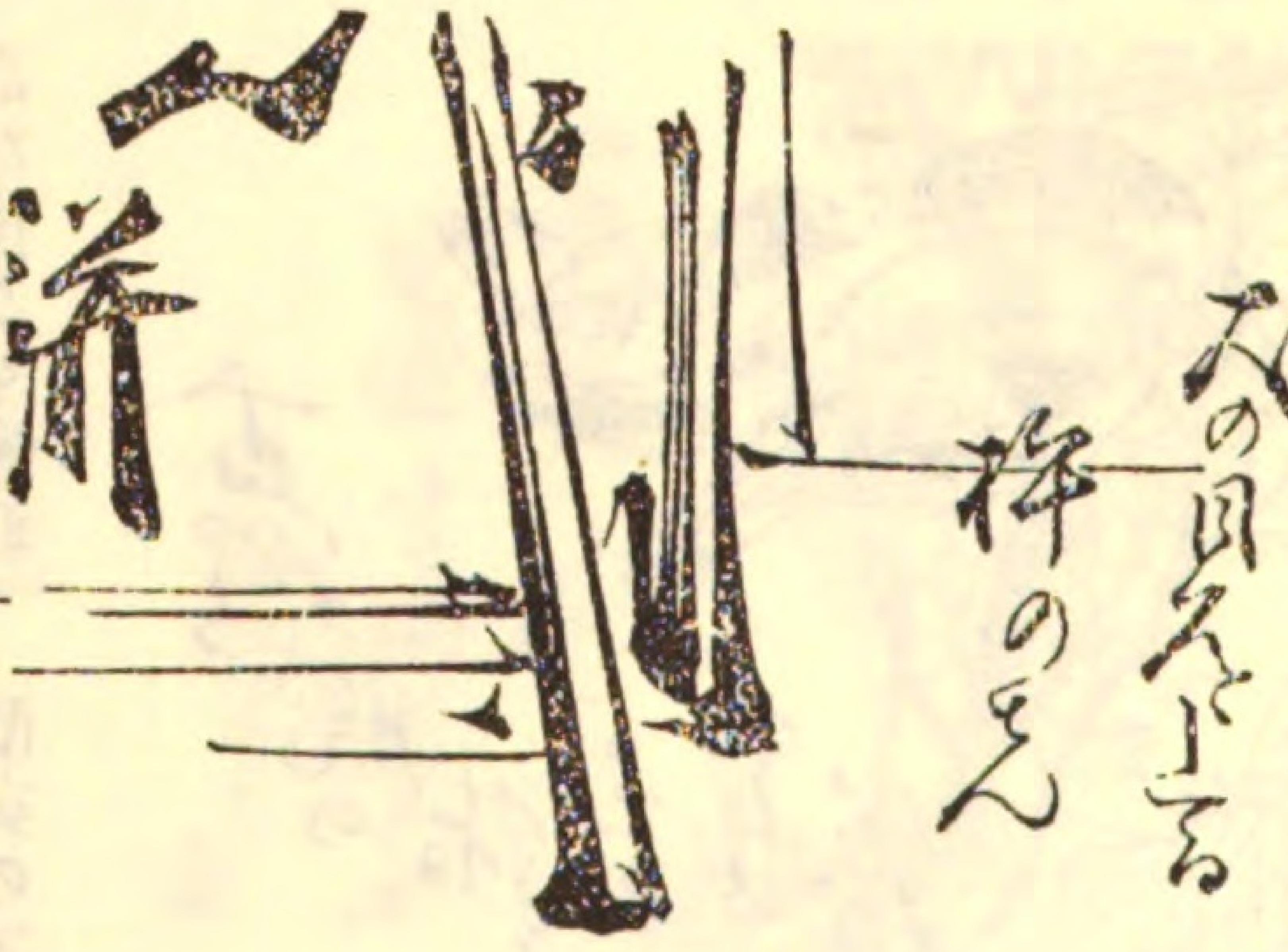
女界評論

（桂陵寫）

夫婦論

女子社界の状態に注意を怠らず間々有益なる議論をものするは「宗教」雜誌なり。去月發兌の紙上に夫婦論と題し説いて曰く

夫婦の間柄に於て何物よりも肝要なるは「思ひ遣る」との一事なるべし、如何なる定義と雖も、此の「思ひ遣る」といふ一事に重きを置かざるものは、決して満足なる定義といふべからず。「思ひ遣る」といふ一事は、夫婦の間柄の始にしてまた終なりと思はる。夫婦の間に於ける幸福の程度は互に「思ひ遣る」の程度を以て之を測量し得べし。「思ひ遣る」とは即ち同情同感といふに外ならず。



（晩　　識）

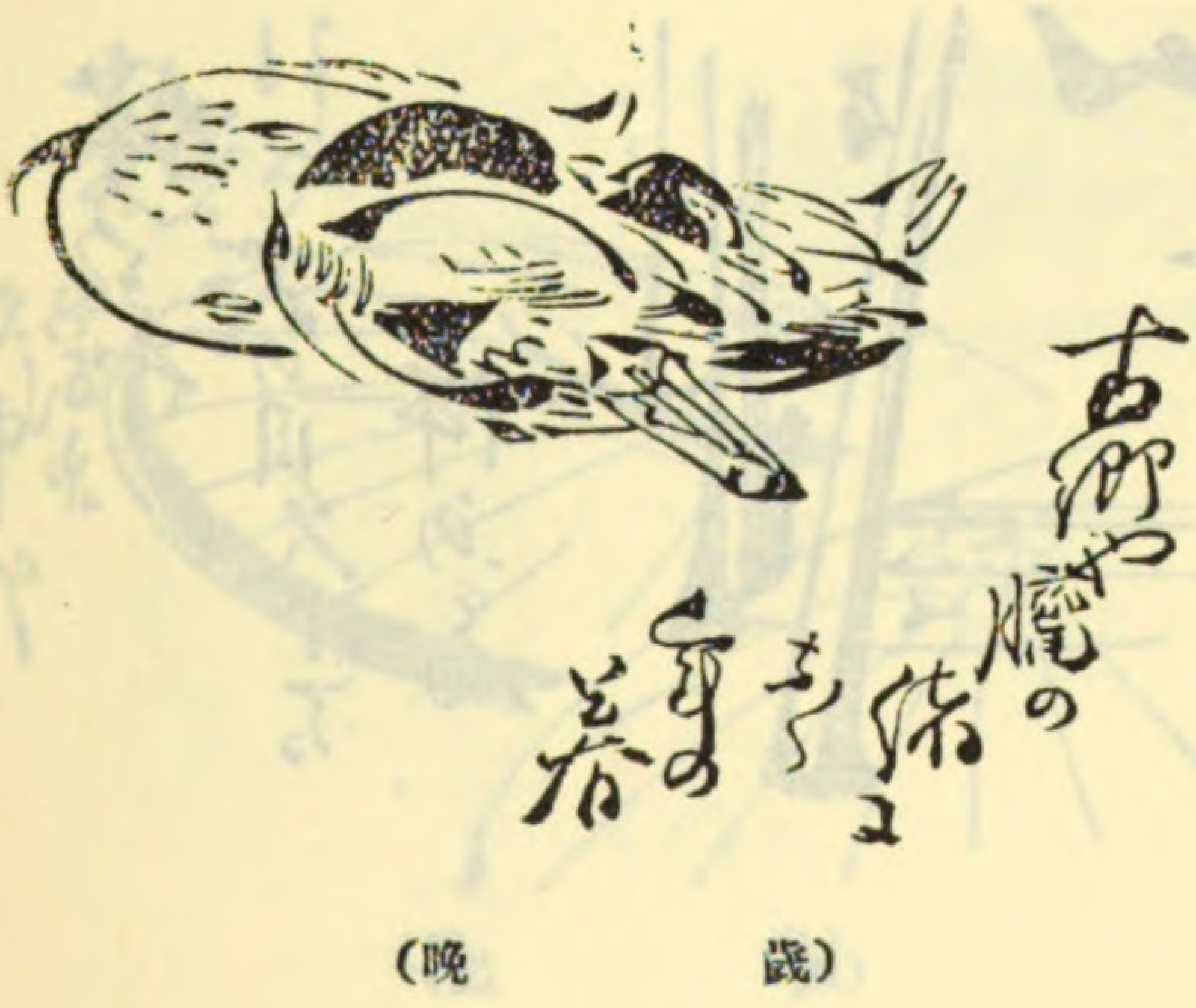
と、依て同情同感の苦樂を共にし一躰たるべき夫婦間に肝要欠く可らざる第一要素なるを叙し、而して其同情同感は互に同等なるべく、しかするには互に其性行事情を知悉するを要する所以を論じ

幸福なる夫婦たらんと欲するものは、必ず相互に其事情を知悉して、總ての事に於て互に思ひ遣るとを得べきものを撰んで、之とのみ結婚せざるべからず。

となし。則ち其同感同情を五項に分ちて細かに説けり。(一)財政上の思ひ遣り(二)肉躰上の思ひ遣り(三)學問上の思ひ遣り(四)氣質上の思ひ遣り(五)精神上の思ひ遣り是なり。

第一、財政上の同感同情　貧者と富者との結婚が終り迄幸福なるの例は極めて少きものなり。富人の子女到底貧家に嫁して忍ぶ能はず、忍び能ふも家政其緒に就かずして家族の安樂を來すこと能はざるべし。而して富みたる人は富まざる人の心を思ひ遣る能はず。其間に暗黑界生じて親密を害せん。

第二、肉躰上の同感同情　如何なる聖人と雖も既に結婚すと云へば肉躰に關する快樂に關係あるが故に、男女肉躰の強弱非常に度を異にすれば、啻に生殖に於て得る所無きのみならず、爲に身躰の衰弱を促すことあり。情慾の間に不滿足を感ずることあれば、亦夫婦間に於ける障礙物となり、遂に總ての事に於て互に同感同情を感ずること薄弱なるに至ることあり。殊に注意すべきは肉躰の強弱の不平均よりも、醜美の不平均なり、この醜美の懸隔は夫婦の間に不平均を生ずる最も著るしき分子にして、美者は自ら驕るべく、醜者は自ら怨まざるを得ざるべし。



（晩霞）

第三、學問上の同感同情　妻に學問の有ると無きとは子女の發達に著しき感化を有すること明にして夫婦の間柄に於ても成るべく學問上の同感同情を保つこと必要なれば、夫婦の間學問上に全く思ひ遣りの出來ざるが如き差異あるを悪しゝとす。例へば妻には學問上の智識なきに夫には妻に知られざる學問上快樂の領地あるときは、妻は其無能に卑下し爲に雙方幸福の大

減ぜらるべし。

第四、氣質上の同感同情　男子と女子との間に於ては其好惡氣質に甚だ異なる所あり。此點の夫婦間に同情同感を得るは大切なるとなり、夫婦氣質の相衝突して不和を來すもの世間其例多し。元より氣質の同一なることのみ要するに非ず、氣質互に相異りて反て能く調和するとあればなり。但だ夫婦は互に思ひ遣りて同感同情になり得るが如き氣質のものならざるべからず。

第五、精神上の同感同情　夫婦精神上の調和は一家の幸福にとり、最も大切なり。夫婦日常の關係に於て、又た子女教育の上に於て、雙方の精神が一致しあると否とは家族幸福上非常の影響を有す、所謂精神上の衝突といふは道徳上又宗敎上主義目的の衝突を指す。思想の差違信仰の差違等是なり。總て何事によらず主義を曲げて得る如き幸福は、決して永續し得るものにあらず。完全なる結婚は肉躰の結婚と共に、智識の結婚と共に、又は精神の結婚たるを要す。



（晩　巖）

記者は此の如く五箇の資格を併せ備へたる結婚を以て即ち完全なる結婚にして、之を理想的結婚と稱すべしとなせり。

蓋し夫妻圓滿なる幸福を得むとには、此五箇の資格を具へではかなはぬことと勿論ながら、こは所謂理想の夫婦論にして言ふべくして實際行はれ難き事に屬す。されども夫婦の成

立は成るべきたけ此資格の完全に近きを望むは何人も同意なることなれば、世の結婚前にある若き男女兩性は勿論、既に夫妻となつて家庭を形ち造りたる人々に於てか、此資格中の缺點をば補はんとに注意すると肝要なり。はや十年の一昔となれりしが、女子教育の聲天下に鳴り響き、わが國の風俗習慣遺傳の特質ある社會の情態に注意せずして唯一に歐化主義飜譯的の女子教育を施し、これが爲にあらぬ男女交際の弊害を生じ、あらぬ女子の驕慢なる性質を作り、竟にはその反動として女學界は一時に火の熄えたる狀態となり、天下一般父母の心をして女子に學問はさせまじきものとやうに思はしめ若くは一般の男子社會をして女子教育を輕んずるの傾向を來さしめたるは、社會の進歩上免れ難き事の一つながら、これが爲に誤まられたる男性女性は世に少からぬ事なりしなり。これを其頃に成立ちし夫婦の關係などに視ても、唯一に理屈にのみ拘泥して結婚せる後、不幸なる運命を得て沈淪若くは破鏡の嘆を受けしものも少からざりしは事實なり。然れども眞正の女子教育は重ずべからざるものなるが故に、かゝる失敗ありたる後、女子教育の趨勢は次第に歐化主義飜譯的迂遠にして輕浮なる狀態を離れて、わが國の風俗習慣遺傳の特殊の性質を有する社會に接近し、之に適應なる教育を施すの傾向を取るに至り、爰に漸く眞正の女子教育の聲此處彼處に聞ゆるに至りたり。當時の反動の勢よりして、一家の細君たらんものは、さほどの教育なくてもなど思ひたる男子社會をして復び眞正に幸福なる家庭を作るは、教育ある妻女ならではと其元に復へらしむるに至れり。此時に於て、宗教記者の夫婦論の如きは、さながら言ひ古るしたる事の如くにて、しかも實に時世に必要なる注意といふべし。但だそれ記者は夫婦間の理想的資格を說く、吾人は之を實際に施し若しくは見得べき夫婦間の幸福を來し得べ

き方法の精細なる說論を聞かんとを望む。思ふに同情同感が親友の成立に於て欠くべからざると等しく、既に夫妻の成立は同情同感の一歩進みたる和愛より成るか、若くは習慣上結婚の後相愛を生じたるかの結果にして、或特別なる事情の存ぜざる限は、實際に於て既に精神上の同情同感は之を具有せるものなり。されば將來の夫妻たらん若き男女に對て吾人の希望する所のものは、所謂財產上氣質上肉躰上學問上の雙方の調和に在り。四箇各輕重無しと雖も、最も緊切なる影響は(吾人の見る所によれば)肉躰を第一とし氣質之に次ぎ財產と學問とは之に次ぐ。凡そ肉躰上の調和を圓滿に得むことは最も難き所にしてまた最も緊要なることなり。故如何となれば比較上氣質、財產及び學問の如きは、敎育若くは境遇の生み出したるものにて、或程度までは、之を矯め之を改め之を變ずるとを得べけれども、肉躰に至ては先天的にして到底之を自在に變更し矯正すること能はざるべければなり。吾人は多くの事實に徵證して夫妻間肉躰上の調和が能く他の氣質財產及學問上雙互の不調和を補ひて、伉儷の幸福を維持することを信ずるものなり。夫婦間の肉躰上氣質上の調和不調和に就ては、吾人委曲の說論あり、はた他日を俟て述ぶる所あらむ。

近著紹介

◎女學講義　　麹町土手三番町　大日本女學會

大日本女學會は明治廿八年の創立以來講義錄を定刊し來りしが今回其第一講修期を終了し今回更に第二期第一卷を發兌せり修身禮法國文漢文歷史地理より以て家事小兒衛生裁縫に至るまで女子一切の學術手工等各專門博士の講述にかゝり附錄として下田女史の史談、學海紅葉諸氏の小說、漣山人の御伽譚雜錄等あり、其

女學界を益すると鮮少ならずなほ大に會員を募るといふ僻遠の地既に家庭を成せる婦人に在ては最も讀むべく學ぶべき頁講義錄なり（毎月一回會費金三十錢）

◎かなつかひ集成　内田儀八氏著　京橋區南傳馬町目黑書店

かなつかひは文學上正確ならねばならぬものにてありながら、誤り易きは今の通弊なり、本書は著者が多年の實驗によりて老索し備忘として錄せるを出版せるもの、語假名音便かな、字音假名、送假名の各章に分ち假名の說明、音の正しやう等を簡明に說きあかし信切丁寧にして坐右に置きて屡學ばゝやがて假名遣の誤なからんこと難からず學に從ふものは勿論書翰を志るし得るほどのものにも必要なる書といふべし（價三十錢）

◎明治三十一年用吾家の歷史　京橋區出雲町　博醒社發行

製本の躰裁は昨年の物と變らざれども、卷首に家眷錄として結婚、誕生、永眠の事を記するやうにし毎一ヶ月毎に色紙を挿入し七曜日と祭日と清楚なる時候書を攫み一面には家庭に必要なる要件譬へば患者の食物、乳母の撰定等の如き記事あり注意頗る周到、親切（定價上製三十錢）

社交一斑

流行の栞

新春禮服豫測　流行子

來る三十一年も相變らず、男女禮服の羅綾錦繡の美、都門の新春を飾るべし、さて如何なるものが流行せんか、試みに豫記せば左の如し。

令閨と呼ばるゝ三十前後の婦人には、藍氣鼠、淺利久、鐵お納戸の色多かるべく、ふき模樣にして桐に鳳凰、源氏模樣、雲鶴、光琳松竹梅多かるべし。

令孃とも呼ばるゝ婦人には鳩羽鼠、淡小豆、裏葉柳、淺空色、銀鼠等の色多かるべし、裾模樣にして海邊松原、光琳の花鳥模樣、若草、女蝶男蝶、若松、遠山霞、春の園景等多かるべし。

可憐なる十二三歳の少女には藤色、鳩羽鼠、大和淡柿、淡お納戸、淡桔梗等の色多かるべく、腰高模樣、振袖模樣にして曙染にし、紅葉狩、櫻狩、蓬萊山、春の農家、古代紅葉菊多かるべし、素より下着二枚は緋無

垢。

令閨にして上着を黒のふき模樣にせば下着二枚を白の紋羽二重の無垢なるべく、令孃にして上着を黒の裾模樣になさば、下着は淡色の裾模樣なるべし。

帶は令閨黒の友模樣多かるべく、令孃は古代七寶、若松の鶴模樣多かるべく、色は肉色又は黒多かるべし、十二三才の少女のは白茶、淡藤の蓬萊山、菊牡丹模樣多かるべし。

男子にて最も華美を極むるものは紋羽二重を黒の五つ紋に染めなし、精好羽二重の五つ紋、中着下着は淡利久の三つ紋、一つ紋、胴着を白の大紋羽二重に墨繪の登り龍、繻絆は白縮緬の無双に淡墨の雷公、覗き富士の如き男らしきものをぼかしに顯はせしもの、帶は肉色又は花色の綴錦、或は厚板織の寶つなぎ、袴は都平(一品にして表裏あるもの)の表淡茶の棒縞、裏淡花色なるもの必らず人目を惹くべし、但し之を算盤にすれば二百圓の以上に上るべし。

黒七子の五つ紋羽織に諸糸織、鼠萬筋の上着、角通し小紋七子の下着二枚を重ね、胴着を縮緬古代更紗縮緬にし、帶を繻珍の唐棠、花色等の古代瓦、寶つなぎ、袴を練仙台の甲斐絹裏にしたるものは贅澤好中の中位にあるべし。

羽二重の黒三つ紋、一樂鼠縞の上着に下着二枚を鳳通織又は光貴織、胴着は糸織の黒地のやぶれ格子或は瀧縞繻絆、繻絆はフランネル胴に鼠縮緬の袖をつけ、帶は博多の黒或は銀鼠或は花色の一本筋又は獨鈷、獻上、袴は山透里平の鼠縞なるは普通なるべし。

雜録

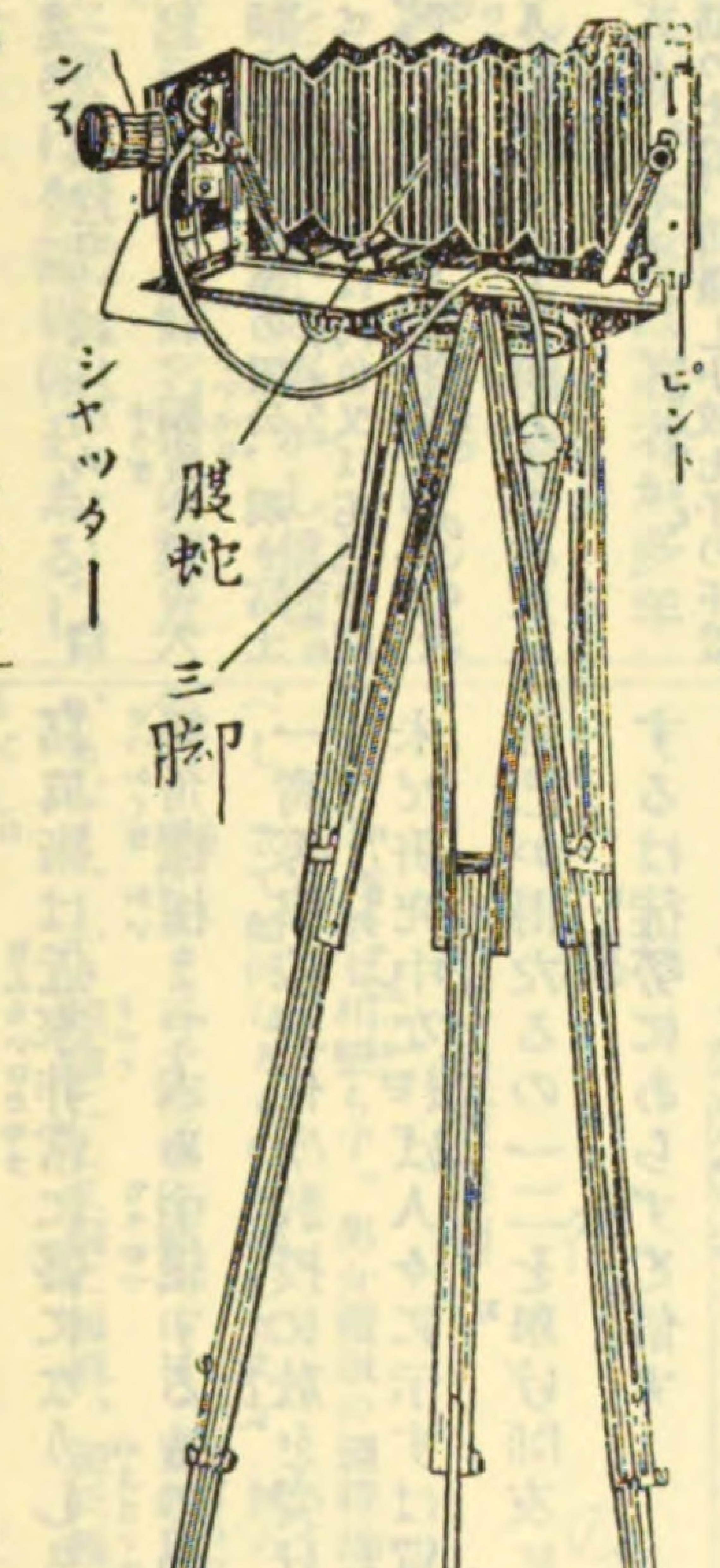
寫眞術　黒田生

寫眞術は近來非常に盛になりしもその理を知らずして折角機械まで求め中絶するものありときく記者曾て第一高等學校理化學教授に敎を受け玆に數年實地研究す未だ研究中なれば人々に示すは冒險なると自認すれど自己が得たるの一二を擧げ師友に乏しき人の一助に供するは徒勞にあらずと信ず

寫眞術は學術上有益なるは勿論なれど餘暇を以て慰となすも益なしとせず記者東京帝國醫科大學に於て種々外科的手術を撮影し腦十有餘種を撮影し實に驚くべき書を得たり該術は醫學にまれ理工科にまれ欠くべからざるものなり又旅行にも亦一興なり

寫眞術は「ウルトラ」（含密線）なる光線が銀の化合物に及ぼす作用を應用して撮影するものなりこの光線は太陽の內にあるは勿論なれどその他電氣光又は「マグチシア」光の內にもあり記者本年暑中休暇に函嶺地方に修學旅行をなし夜中「マグテシア」を以て撮影し好結果を得たり山間僻地の地にありて婚姻の式等を撮影することには便利なるものなり

先づ撮影せんとせば暗箱「レンズ」三脚黑布を要す黑布は表面繻子裏面は緋金巾を便利とす緋金巾の代りに唐縮緬を用ふるものあれど不經濟にして却て取扱にくし何となれば暗箱よりすへりをつればなり依て暗箱及び「レンズ」は經驗ある人に撿定を得て購求せよ近來好事家の增加するに從て麁惡の機械を販賣するものあり故に注意せられよ暗箱は蛇腹の長く伸ばし得るものをよしとす

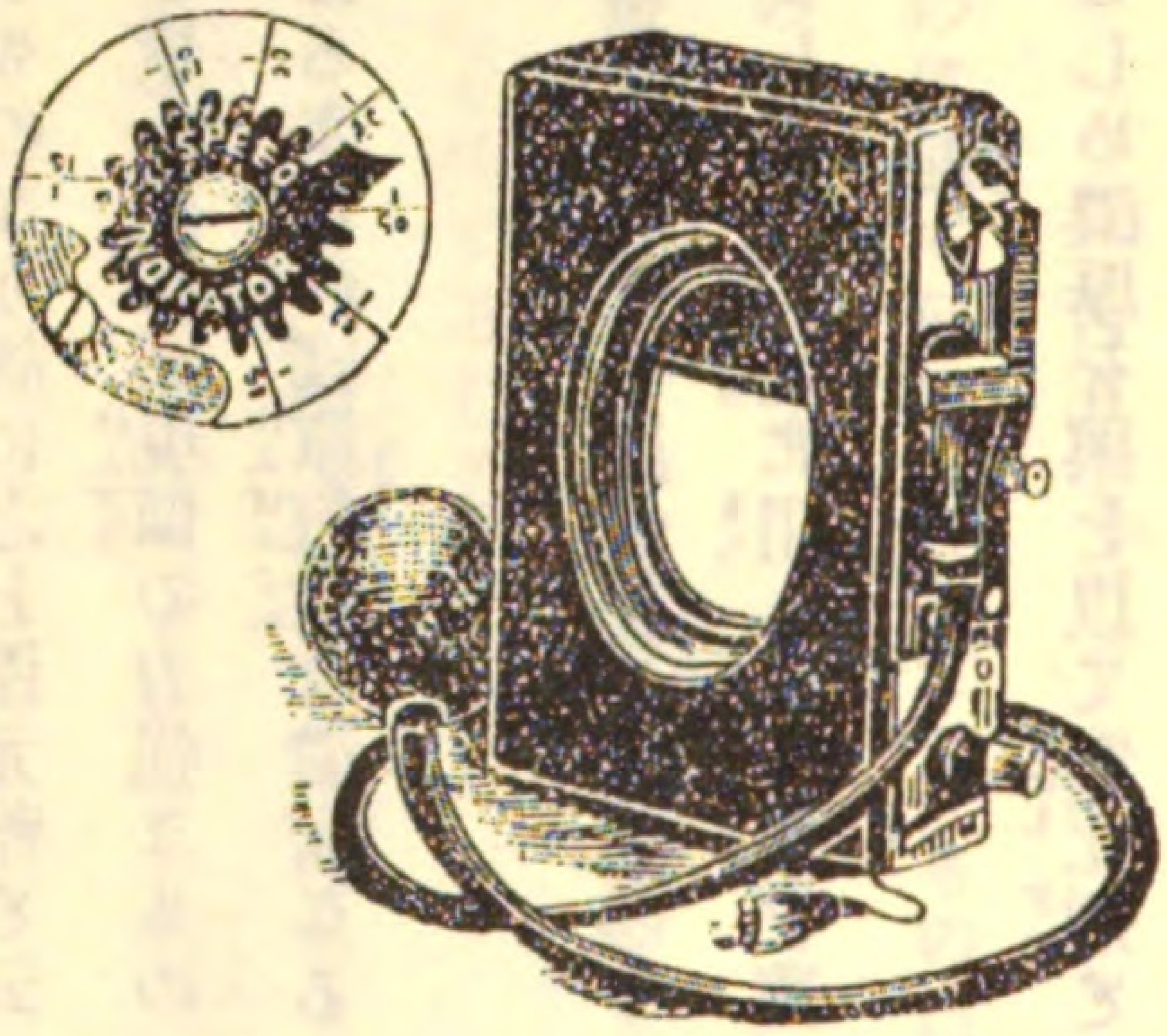


「レンズ」は最緊要なるもの又好惡を判するは容易なりとす故に一言にて云ひ盡す能はずと雖も先づ大體は焦點をつけて物像が「ピント」玻璃とて暗箱に裝置ある摺玻璃に寫りその時、僅の距離にても動かす時は物像判然せざるときはこれを以てやゝ使用に工合よきものとす

三脚は三つに折れるものをよしとす「ステッキ」樣のものあり又金屬製のものあり何れも工合よろしからず

撮影法

先づ乾板(ドライプレート)を「トリワク」に入れよこの乾板なるものは非常に光線に感じ易きものなれば針ほどの光線にても直接に來るときは感ずるものなり故に之を「トリワク」に入れるには暗室にてなせ尤も赤色「ガラス」なれば感ぜず依て「ランプ」に赤色「ガラス」を用ふるを便とす尤も熟練すれば僅か指の腹にて表裏を判するを得べし記者は旅行中は押入か戸棚に入り夜具をかぶりていれかへをなす大に便なり何れにしても「トリワク」に乾板を入れこの「トリワク」を黒羅紗の如きものにて製したる嚢の中に納めて次に裝置せる機械の焦點を撿せよもし焦點正しきときは「トリワク」を嚢の內より出し



「ピント」玻璃と交換し「トリワク」の蓋をとり次に露出すべし「露出とは「レンス」の蓋をとりて寫すことにて滊車の進行とか鳥、獸又は歩行するものを撮影するには活窓(シヤター)を用ゆこの物はある裝置にして「ゴム」一球を握れば寫るものなり」その露出の時間は時間又は室の內外により一定せずその露出を終へなば「トリワク」の蓋をなしさきの嚢の中に納め暗室に持行き現像をなすべし

現像法

現像とは乾板を感光せしめたるため化學的作用を起すその作用は隱にして見る能はずと雖もある藥劑に浸せば瞭然と現れ出づ故に之を現像法と云ふ

現像するには現像皿と固定液を入るゝ皿と「メートル」一个と水を準備す現像液は乾板の種類により同じからず又同一の乾板にても露出の度不規則なるときは臨機應變に種々變化せざるを得ず併し一般の標準を置きて

れにより配劑すべしそれには藥劑の功能を知るが最大急務なり故に今多く用ゆるものゝ二三を擧げて參考に供せん

焦性沒食酸（ピロガリツクアチド）は乾板の膜をなす臭化銀中の銀分を還元するものなり故に之を還元劑と云ふ故にこの藥劑を用ふる量大なれば現像の力强きものなり故にこのものを用ふる多ければ原板畵は濃密なるは明かならん

亞硫酸曹達は現像液の變色を妨げて原板畵の汚を防ぐためなり現像液に關係なし併し多量に用ふれば色を薄くなすなり

臭化加里は還元を遲緩せしめ濃厚を與を以て制止劑と云ふ

「アルカリ」は焦性沒食酸に「アルカリ」性を與へてその還元を助くるものなり故に之を催速劑と云ふ

この性質をしれば大に現像するの助にならんかその現像液は種々ありその一二を擧げん

沒食酸「アンモニア」現像液

A
焦性沒食酸　一「オンス」
臭化「アンモニア」　一「オンス」
蒸溜水を加へて　十「オンス」とす

B
强「アンモニア」　二「オンス」
蒸溜水を加へて　十「オンス」

使用するときはA液B液各々半「オンス」づゝに蒸溜水十「オンス」を加へて使用せよ

スワン氏現像液

「ハイドロキノン」　八「グラム」
亞硫酸曹達　二、五「グラム」
枸櫞酸　一「グラム」
苛性加里　二、五「グラム」
臭素加里　一「グラム」
水を加へて總量　二百「グラム」

濃ハイドロキノン現像液

ハイドロキノン　六「グラム」
炭酸加里　五十「グラム」
亞硫酸曹達　五十「グラム」
蒸溜水　百五十「グラム」

このものは旅行用のものに適す何となればこのものは四倍になして用ふるものなればなり「ハイドロキノン」現像液は甚だ徐々に現像するものなれば露出の度すぎたるものとても「クモリ」を生することなし

又旅行用には近頃「ピーメルシー」現像液なるものありこは粉末のものなれば携帶に便なればなり今その調劑を記さん

A
- 異性重亞硫酸加里　一〇〇「グラム」
- 硼酸　一〇「グラム」
- ヒドロヒノン　七「グラム」
- 黃色血滷鹽　一六「グラム」

B
- 水酸化リチウム　三三「グラム」
- 乳糖　一六「グラム」

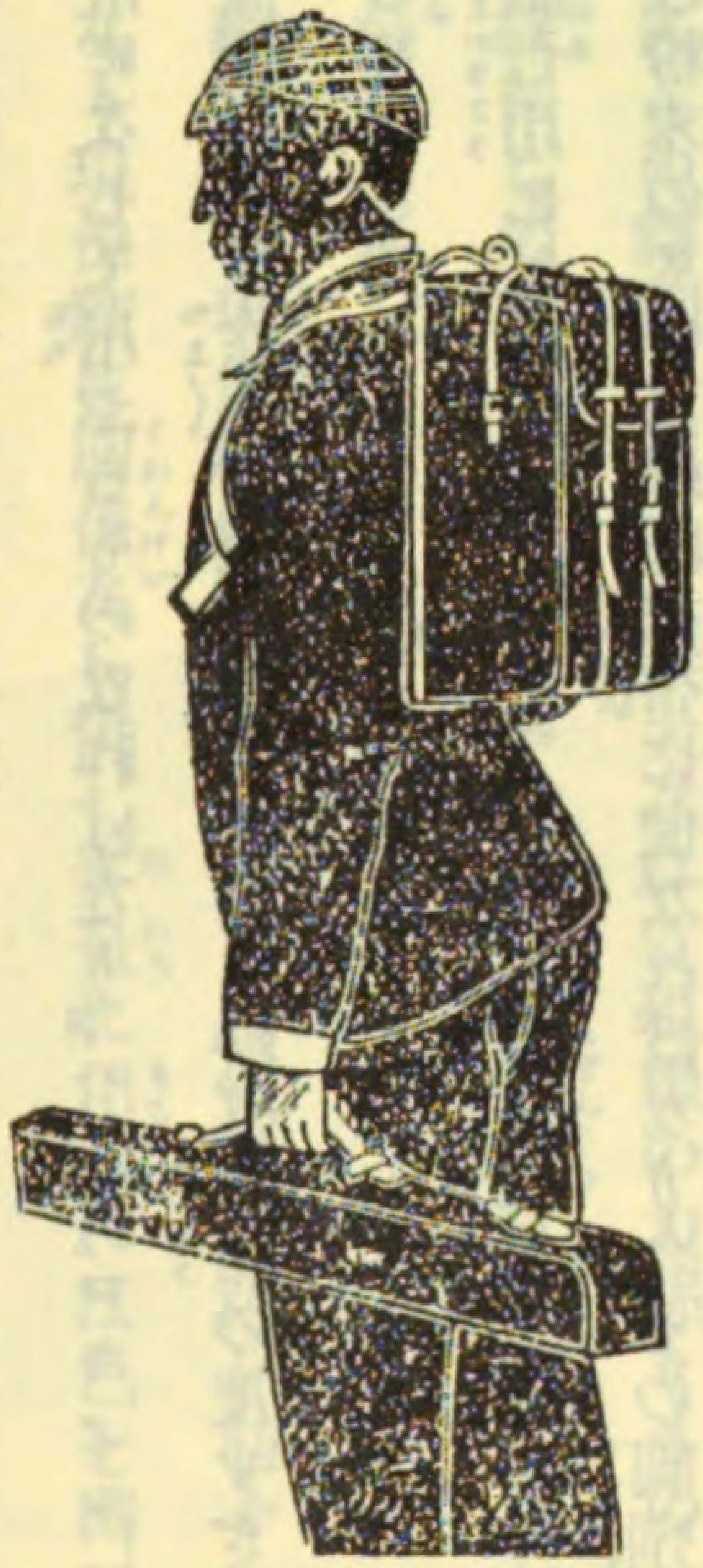
之れを各々共口瓶に入れ密塞せよこの量にて三〇「リーテル」以上の現像液を作るを得、Aなる混劑四「グラム」とBなる混劑二「グラム」を蒸溜水百立方「センチメーテル」百「グラム」によくとかししばらくしてこしがみにてこすべしこのものは非常なる早取のものを現像するを得このものは一回にて廢物とはなりぬものなり

現像法熟練せば大に經濟的の液を作りて用ふるを可とす記者は次の經濟的簡便なるものを用ゆ之をK現像液と名く

結晶亞硫酸曹達　一五「グラム」
炭酸加里　一五「グラム」
臭化「アンモニア」　一五「グラム」

この三劑を一「ポンド」の瓶に溶解しをけ現像する時に

寒氣劇しきときは少しくあたゝめてをけと「メートル」に焦性沒食酸を入れ之に現像液を入れよ焦性沒食酸の量は液一「オンス」につき鳩の卵大位にて可なりとし焦性沒食酸多量なれば現像の力強きは前述の如し何れにしても現像せんとせば現像皿に露出せし乾板の



藥劑のかゝりてをる面を上にむけ滑かなる面を下にむけ皿の中に納れて現像液を隅角より流しこむべしこの時遍くゆきわたる樣になしもし行きわたらざるところあればきずものとなるべしそれをさくるには現像液を洗す前に水を乾板にかけて次ぎに現像液を流せば可なり

現像の度合は随分やかましきことなれど之を簡單に云へば黑白判然たるを標準となせど云ふに外ならんか即ち人物なれば顔は印度人的となりしときを度とす己れの度合になりしとき液を捨て水にて洗ひ固定液に入れべし固定液の處方は

明礬飽和液　一〇〇「グラム」
亞硫酸曹達飽和液　二〇「グラム」
次亞硫酸曹達飽和液　一〇〇「グラム」

の如しこの液に浸しをく時間は原板譜の白色のものゝ盡く消失せし時を度とすべし次に水にてよく洗ひ次亞硫酸曹達を全く除去すべし流水に於て少くとも三十分時間浸しをくべしもし流水なき時は鉢に入れて膜を上にむけその水を屢々注意してとりかへよ

充分水洗の後之を水より出す原板を乾燥するものにして種板掛と名くるものにかけて乾かせこのものなきと

きは人のさわらざる處に吸取紙をしきそれをしきおるもの例へば壁等にたてかけべし充分乾燥したる時「ヴハニス」を引くべし「ヴハニス」をひくは必要なることにあらざれども使用する劇しき原板には有益ならん

「ヴハニス」處方

サンダラック　四「グラム」
スキノヤニ　二「グラム」
シクーラック　一五「グラム」
アルコホール　一「オンス」

先づ原板を火上に持ち徐々に熱し皮膚にふれ心地よきを適度とし原板を水平にもち「ヴハニス」瓶口よりそゝぎ中央にためそれより板を少しく傾けつゝ四方にゆき渡らしめ後一隅を瓶の口にあてゝあまりし液を瓶にかへし再び火にかざし乾燥するまで火上にあらしめよ

印畫法

寫眞紙畫となすを印畫と名く先づ原板に塗銀紙をあて、日光の力を假るときは原板の黒き部は白く白き部分は黒くなるべしこれ黒くなりし部分は日光を遮るを以て銀に感ぜるによる從て白くなりし部は感ぜしや明なり

銀紙は「アリスト」紙「ピーオーピー」紙「ソリオ」紙等あれども製造者の異なるによる何れにしても膠と枸櫞銀又は他の鹽類を混じたるものなりこの紙は既に塗銀しおるものなれば手數を煩はさず併しそれにては興味薄ししかのみならず第一不經濟なり又印畫の工合を種々になす能はざればなり故に自己にて塗銀するをかとす塗銀するには二三の注意あり

先づ「シリンドル」を蒸溜水にて洗ひ硝酸銀を溶解するに必ず蒸溜水を用ひよもし普通井水等をそのまゝ使用すれば乳白色を呈し如何ともなす能はずこれ井水等には「コロール」なるものありて銀と化合し「コロール」銀を生ずるなりこのものは白色の沈澱なり

その銀度は紙により差あれど水一「オンス」に硝酸銀四「グラム」位の比例にて可なり併し一日塗銀すれば銀の分量減ず故にこのつぎの時にはどの位の比例になりてをるかしれず故に「ポクトメートル」なるものを用ひて計れば便なり「ポクトメートル」を銀液に挿入し該器の度盛をよみて銀度を定めよその度は十七八度を可とす

塗銀をなすは夜分ランプになすを都合よしとすもし晝間なさんとするには直接の光線をさけ室をしめきり弱き日光にてなせ又この銀液は汚點をなすを以て注意せよ疊の上なぞにては必ずなすべからず試みにその一滴を指にたらし見よ始めは何の様子もなけれど日光に觸るゝや忽ち黑色となるなり

その配劑終らば銀「ペット」を蒸溜水にて洗ひこれに銀液を入れ「バピール」若くは光澤紙（何れも卵白を塗りしものなれば指等を觸れざる様になせ）を銀液に浸し「ピンセット」にて紙面に水泡あるや否を撿せよ泡あれば靜かに動かし逐出すべし又「バピール」を用ふる時ははねかへることありその時は自己の呼氣をふきかけるを最簡便とす又紙上に銀液の附着せざる様取扱ふべし

銀液の上に紙を浮ぶる時間は紙質と液の强弱によれども三四分時間を標準とすれば可なり一定時の後手近の隅を「ピンセット」にてはさみ甚だ靜かに擧ぐべし而るときは毛細管引力の理によりて過剩の銀液は紙より流るべしこの時念の爲め半紙の小片を隅につけてをくべし而るときは一面平均に乾かすを得べし

塗銀こそ將に燒付をなさんとする時に天氣曇りて目的を達する能はざる時は吸取紙を洗濯曹達の飽和液を浸して之をよく乾かし塗銀紙をその間に挾め又はそれをなす能はざる時は空氣の流通せざる様充分をしそなして貯へよ又一層注意すべきは塗銀してよく乾かざるも

のを原板にあて燒付くる時は原板はきずものとなり非常に見苦しきものとなるべし之を治療するは困難なり

印畫を美麗ならしむるには塗銀紙を本箱の如きもの若くは如此箱にして空氣の流通せざるものを最上とすこの箱の内につるし「アンモニア」を皿に入れ十五分時間その蒸發氣にかざすべし

その塗銀紙を己れの望む大さにきり之を原板の下にあて燒框に納めて窓の光線に透し兩手の拇指にて紙ををへさながら右手にて燒框の背の板をとぢ彈機金にて之を押へるべし板膜に充分密接して紙を置かざれば印畫鮮明ならざる故充分注意して取扱ふべし

日光に晒すには間接の光線をよしとす四五分時の後に光線の弱き處に燒框を持行き後板半分づゝ開き燒度を見るべしその時間は光線の强弱により變へざるべからず又原板にもよる故經驗の後に自得すべし

燒框より取出したる印畫は抽斗又はその他光線の入らざるものに納め悉く紙面成就せば水に入れ能く洗ふべし硝酸銀は水中の鹽類と化合し鹽化銀炭酸銀となり白乳色を呈すこの白乳色の消失したる後水二升五合位に食鹽八匁許を入れ五六分時間浸しをき再水をかへて洗ひ印畫紙を一枚づゝ水より取出して次の液に入れべし之を鍍金と云ふ

鹽化金溶液	一「オンス」
硼砂	六「グラム」
水を加へて	十五「オンス」

これを調劑なすには粉末の硼砂に熱湯三「オンス」許をそゝぎかけ能く溶解して十五「オンス」となしその上へ鹽化金溶液一「オンス」を混和すべし但し硼砂溶液の甚だ温かなる内に鹽化金溶液を加ふべからずその鹽化金溶液とは鹽化金一本（十五「グレーン」入れにしてふきどめの硝子管に入れあるなり）を二十「オンス」入の瓶

に入れて瓶中にてふきとめの管を破り水十五「オンス」を加へて作りたるものなり

却說その鍍金をなすには前の液に入れ己れの望む色合となりしとき液より出し水中に入るべし甚だ久しく鍍金液中にをく時はあをざめて保存上變色し易し故にややあかみの時に出せ次に固定液に一枚づゝ入れ三四回紙をまぜて十五分時間そのまゝになしをけその固定液とは次の如し

次亞硫酸曹達 一

水 六

次亞硫酸曹達(寫眞界にては「ハイポウ」と稱ふ)一「オンス」なれば水六「オンス」と云ふ割合にして調合せよ「ハイポウ」は水には溶け易からず故に前以て溶解し貯ふるを可とす技士は「ツッドル」氏驗液計にて二十二度のものを用ふと今擧げし比例はこの度に相當するものなり

次に一枚づゝ液より出し水中に入れよく洗ふべし「ハイポウ」微量とても殘存すれば印畫に斑點出づる一原因をなす水洗は二十回もとりかへるべしなるべくは流水を可とす「ハイポウ」の有無を驗するには印畫を浸したる最後の水を「コップ」にもり一を標準水となし一方に次液の四五滴を滴下して綠がゝりたる黃色又は鳶色に變ずるは未だ次亞硫酸曹達の殘るなりもし過滿俺色なればこれなきなり

過滿俺酸加里 〇、一二「グラム」

炭酸加里 一、三「グラム」

水 二十「オンス」

これにて印畫を終へしが鍍金法は唯「パピール」幷に光澤紙に用ふるのみなるが世間往々既製塗銀紙を用ふるものありこの鍍金液は異なるを以て次に擧げんとす

「オーゲル」博士の「ソリオ」紙及び「アリスト」紙に用ふる鍍金定着混合液

硝酸鉛　〇、二六「グラム」
枸櫞酸　〇、二「グラム」
明礬粉末　〇、二「グラム」
醋酸鉛　〇、二六「グラム」
硫青酸アンモニウム　〇、八「グラム」
次亞硫酸曹達　六「グラム」
蒸溜水　四〇〇「グラム」

この液を製して數日間靜置し漉して後水百に對して一の割合の鹽化金二十五「グラム」を混ずるなり而して印畫紙に所望の色調現はるゝまで浸しおくべし右の液は之を漉すときは幾回も使用するを得べし

「ピーヲーピー」紙は既製塗銀にして非常に手數を省くもの故可なれどもその價は廉ならず爲めに不經濟なり併し原板の軟かにして精細の處まで充分現われ居るものなれば非常に美麗なる印畫を得べし

印畫を終へたる時一枚づゝ水を入れたる皿に表面を下に向けて浸しその水の乳白色とならざるまで水を取換ふること自製塗銀紙の取扱に同しそれより明礬二「グラム」水四十「グラム」の割合の溶液中に二三分時間浸しおくべしこの液より出したる後ち更に注意して水洗ひして明礬の酸性をとり去るべし明礬を用ふるは膠膜をかたむる爲めなれば暑中ならではこの手數を省きて可なり尤も操出に掛けんとする人はこの注意を要す次に調色液に入れべし

硫青酸アンモニウム　二「グラム」
鹽化金液　一〇「グラム」
（鹽化金液は十五「グレーン」入の吹止一本を蒸溜水二「オンス」に溶解したるものなり）
蒸溜水　一六「オンス」

この調色液に畫を入るゝや橙黄色に變し憐れなる有様となり折角の苦心も水泡に歸せしかと落膽するならんがそこが忍耐なり漸々恢復して赤色となり次に鳶色と

なり終に鮮妍たる紫色を呈しその光澤燦然人目を驚かす印畫を得べし茲に於て調色をとゞめそれより「ハイポウ」にて拔くべしその配劑は次の如し

次亞硫酸曹達　　一
水　　　　　　　九

一と九との比なればもし調色する印畫の紙數少なき時は「ハイポウ」二「グラム」としなば水は九「グラム」となす如し却說この配劑はその都度新しきもの用ひよ如何にも不經濟の感あらんが決して然らず

最後に水洗するは自製塗銀紙の取扱と同じく印畫の互に密着せぬ樣に注意して水を換へ凡そ二時間も洗ふべし

印畫を能く洗ひたる後水より出し濾過紙の間にをき多少の温氣を去り乾かざる内に印畫の表面を下に向け刷毛を以て一枚づゝ糊をつけ臺紙なり寫眞帖なりへ貼り指を以て印畫紙の間に氣泡の入らざる樣充分に壓すべしその際最も注意すべきは室内を清淨になすことなり彼の寫眞の黄色に變ずるものなりこれは次亞硫酸曹達のとりかたの不足又は固定液の古過ぎたる又は糊の酸性を帶ぶる等の說あれど塵埃も一原因をなすは記者經驗したりき、故に印畫と臺紙との間に塵埃の入らざる樣注意あれ

糊は「ヒメノリ」又は「クヅノリ」にても可なれども固形膠十二匁を水十「オンス」に溶解し「アルコール」五「オンス」「グリスリン」一「オンス」を加て用ゆべし

印畫を「マクリ」にして保存せんとせば印畫紙を水洗したる後に數秒時間水を去り吸取紙にて殘る水をとりて布の上におき將に乾かんとする時丸棒をとり畫面をそとになしまきをくべし記者大學衛生學室にて醫學上に關係あるもの、燒付けをなす學友土方小柳床井の三氏に補助を乞ひ一日に八百五十枚を燒付たり盡く「マクリ」になすものなれば室内にて乾燥せしめんとす新き

布をしきその上に並べたるものは盡く完全なりしが古き布の上にをきしはあまり感心せぬ如何にも並べきれざる分け生理學實驗室の實驗臺の上に半紙をしき並べしにその臺の上に塵埃ありし爲め黄色の斑點を出し甚しきは點に赤緑等の色を出したりこれ該臺に色素のしみこみし爲めならんがしりつゝ大に失敗をなしたり鎖々たる事にも注意を要するは必要なり

その印畫に光澤を出すには操出器械なれは中分なけれどさなくば硝子板に清潔なる白「コロヂラン」を流し之を乾かして「ゼラチン」の溶液に浸せばその乾きたる後硝子板より容易く印畫紙を剝しとるを得べしもし臺紙に貼せんとせば硝子板よりとらざる前に印畫紙の裏面に糊又は膠にて貼りつけよその糊の乾きたるとき硝子板よりとり去るべし

これにて大略寫眞術を終ゆその他失敗の治療法流水風景魔術寫眞月夜の景色撮影「ハンカチーフ」燒付等を始め詳かに說明せんとするも紙面の都合により來る新年の樂となさんその時は記者の研究中なるX光線應用寫眞の說明をもなさんとす元來記者は撮影術は專ら學課の餘暇を偸み研究なすもの故充分熱血を濺き記したるものなれば世の該技術を學ばんとする人は漏れなく一讀あらんことこそ望ましけれ

—〇—

時報一束

◎中學令の改正　過般來文部省にて福原參事官主任となり取調中なる中學令中の敎科は中學敎科細目調査委員會の結了を待て改正する筈なるが目下取急ぎ改正を要する點は一中學生徒の數を四百名位に各級生徒の數を四十名位に限り其他敎員の數をも制定し尚ほ同令に關する設備規則等をも制定する由なるが同令發布の上は目下多數の生徒を有する中學校は勢ひ分割するに至るべく若し地方の經濟にして直ちに分割をなすの餘

地なき處は當分其儘に据置き漸次分割の方針を執らしむるとになるべしと云ふ◎小學校の女子教育　本邦小學校女子教育の發達は近來著しき進歩を呈せしが昨年に比し本年は女生五割の増加なりと云ふ◎草堂を益軒の墓所　故人貝原益軒の墓の福岡西町金龍寺にある事は人の知る所なるが同地の海妻甘藏翁此程同寺に遊びて感慨に堪えず今回益軒の紀念表章の爲め草堂を建造せんと計畫中の由なるが今趣旨を聞くに金龍寺内に在る貝原益軒の墓石の掃除等は子孫より鄭重に行屆き居るも目今は該墓所に至るべき通路とてもなく桑畑或は小笹生ゐ茂り一目實に凄絶に堪えず依て墓道及び標石を設け又墓所に接する金龍寺所有の廢寺址に小學寮の如き草庵を結び益軒、東軒の著書、遺墨を蒐め益軒の文中神儒佛不相悖論の主旨に基きて神道、儒學、佛教の講堂に擬するものを建設せんとの志を起し金龍寺現住鷲尾禪猊氏に語りたるに頗る同意なるを以て愈々有志者の賛成を得て實行するの計畫なりと◎大阪孤兒院　大阪南區天王寺源正寺坂下なる同院は近頃諸物價騰貴の影響にや近來入院を請ふ者續々あるを以て今般特別入院法を設け窮民の兒女五年以上十年以下五十名を限り入院保育する由又同院保育兒が毎年一月の衣服は新町遊廓より寄附する例なるが南區遊廓にても補助法に付き協議中なりと◎神戸女學院　故市田左右太氏の寄附金を基礎とし猶ほ他有志者の寄附を得て建築の處去月廿日落成式を行へり◎思軒森田文藏氏逝く　同氏は十月々末より腸チブス病に罹られしが藥石效なく去月十二日溘然逝去せり、吾人痛傷胸に滿ち言ふ處を知らず、文學寂寞を感ずる今日、博學にして品格ある文豪思軒氏を失ふ、悲哀何ぞ堪えん、同氏は我家庭雜誌にも同情多く春夏の附錄に『支那の落語』『牢歸り』等を寄せられたるは讀者の記憶せらるゝ所なり、而して同氏が我民友社と親密の關係ありしは德富蘇峯氏が『思

軒君を悼む』の追悼文により明なり、曰く『余が思軒君を哭するは、公にしては日本文壇の一星を隕し去りたるに在り。私にしては莫逆の知己を亡ふたるに在り。　余が思軒君の名を知りたるは、明治十七八年の交、經國美談續編の評語中にてありき。而して其の始めて相見たるは、明治十九年九月大隈伯舊雉子橋邸矢野龍溪君寓居の座上にてありき。　君が經國美談中に揭げたる精警なる評隲、君が報知新聞に揭げたる觀察別眼ありて、奇趣に饒む、北京通信及び歐航雜信は、未だ相見ざるに先んじ、君の一半を余に紹介したりき。余は窃かに君を以て老成の人と信じたりき。而して豈料らんや、君亦余と年齒略ぼ同じき白面の一書生ならんとは。　君が文壇の事功を擧ぐれば、勢ひ民友社との關係を聯想せざるを得ず。　蓋し君は時として報知社にあり、國會社にあり、又萬朝報社にあり。　又時々幾多の雜誌に關係ありしにせよ。　明治二十年より三十年の今日に到る迄、民友社に於ける關係に到りては更に緊密を加ふるの外、十年一日の如くなりしを以て也。而して君がユーゴーを日本に紹介したるも、國民之友に於てし、山陽を紹介したるも國民之友に於てす。　乃ち君が文壇事功の一半は、民友社を以て、其の舞臺となしたる也。　文學者としての思軒君は、世間公評あらむ。　余は寧ろ一個の紳士としての思軒君を亡ひたるを哀悼せざるを得ず。余や君と頗る其の行徑を殊にす、然も和して同せず、其の交情は終に渝らざりき。　君や頭腦明白、其の理會力太だ健全にして、批評眼甚だ精鋭なりき。　而して其の胸裡一點の火あり、皮下一掬の血あり、故に其の同情の迸る所、自から人道の大義に合したるもの多かりき。　君がユーゴーを崇め、山陽を慕ひたる、豈に區々文章のみと謂はんや。　君が民友社に於ける、殆んど員外社員の態ありき。　君が突如として編輯局の闥を排して入る每に、暖爐會議は、幾層

の氣焔を加へ來りぬ。凡そ社中の催しに係る會席には、未だ嘗て君を招かざるなく、未だ嘗て君の來らざるとなかりし也。社中の人物は、時として變動ありしも、君は民友社と始終して、終ひに渝る所あらざりき。今や君を亡ふ、獨り我が文壇の落寞を悲むのみならず、社中の一座を亡ふの嘆あり。明春新年宴會に於て、座に一人を缺く、豈悲しからずや。况んや余が如き、君を以て別乾坤の知己となしたるものに於てをや。君の文章は、簡鍊精警。若し或は平易の字を用ゆれば、清淨にして雅味あり。絢爛の極平淡に入るに庶幾かりき。而も君が談話に到りては、奇語妙言口吻を衝ひて出づ。君や文に於ては一方の將たり、舌に於ては八面敵に當るの槪ありき。余が明治の批評家として、君に推服したるは、君の文章よりも、寧ろ其の談論にてありき。今や君逝く、豈悲しからずや。』◎文學美術雜話會　橋本雅邦、德富蘇峰、岡倉覺三、尾崎紅葉、岡崎雪聲、大橋新太郎、川端玉章、高村光雲、都筑馨六、坪内逍遙、黑田清輝、幸田露伴、饗庭篁村、森鷗外、大橋乙羽の諸氏發起となり雜話會なるものを起し其第一回を十一月廿三日午前十時より上野精養軒に於て開かれぬ會するもの百餘名文學家あり美術家あり俳人あり斯道篤志家あり皆樓下の會場に鳩り爐を圍み卓を繞りてそこゝに談話盛に行はる正午樓上に移りて晝餐す依田學海翁まづ起て開會の主旨を述べ次に德富蘇峰氏本會を隔月に開くべく又委員十名を撰びたき由を述べて衆に問ふ異議なければこれに定めつ次に大橋乙羽氏近衛公爵の來狀を朗讀せりそれより衆おの〳〵隣れる人々と談ず學海翁最もよく談じよく論じ滿堂の耳目一に翁に集まれりき食後又樓下にて相談じ相論じ各々十分の歡を盡して散じたるは午下三時の比にて實に近來稀れなる盛會なりし◎廣島第十回敎育總集會　去月廿一日廣島縣尋常師範學校に開く當日は開會式のみに

て淺田總理以下會長諸役員及び朝野の來賓六百餘名式場に列し勅語捧讀式あり終て稻葉海軍大尉教育家と海軍と云へる演題にて一場の演說を爲し夫より宗村砲兵大尉、尾形職工學校長、川村參事官等の演說ありて午後四時散會し翌日午前九時より本會義を開きたるが午前の休憩中來賓今泉海軍少佐の國民海軍思想の養成に關する演說ありたり◎軍艦八島號　去月三十日を以て横須賀港に着したる富士姉妹艦八島號の構造及武力を擧ぐれば左の如し

構造及び武力

軍艦八島は龍骨下より檣頭の尖端に至る迄先づ大躰に於て軍艦富士と其構造及び其武力を同うす即ち左の如く說明し得べし

構造

艦種	一等戰鬪艦	馬力	一萬三千六百八十七
艦質	鋼鐵	汽罐	十個
噸數	一萬二千五百十七	探海燈	五臺
速力 自然通風	十六節三/四	吃水平均	八米突
速力 强迫通風	十六節一/四	甲裝	四百五十七ミリ
艦長	百三十米突三八五	搭載石炭	一千二百噸
艦幅	二十二米突四〇		

武力

十二吋安砲	四門	四十ミリ速射砲	廿四門
十五珊速射砲	十門	水雷發射管	五門

即ち斯くの如く若し夫れ强て軍艦富士と其差點を對照せば全速力に於て富士は一八節四九四の力を有するも八島は更に一九節二二七の力あり而して其噸數に於て富士は一萬二千百四十九噸なるも八島は一萬二千五百十七噸の差なり而して更に造船及び造兵費の豫定價格を對照すれば富士は九百九十五萬三千四百四十五圓四十四錢三厘なるも八島は一千零九十一萬零九百七十圓五十五錢五厘なりと知る可し

◎御陵墓發見　伊豫國越智郡大井村に後醍醐天皇の皇子尊眞親王の御陵墓を發見せるよしなるが右は後醍醐

天皇の時賊軍追討の爲め皇子尊眞、懷眞、滿眞の三親王大井濱に下向あり獨り尊眞親王のみ同地に滯り病に罹り薨去相成り遺骸を同地八幡社側に納め埋めたる次第ならんといふ◎支那女學校設立の計畫　近頃浙江の富紳道臺嚴信厚知府經蓮珊諸人の首唱にて上海に女學校を設立するの計畫あり去月十五日同志者の協議會を開きしが集會せる者約そ百名に上れり該校は泰西の語言文字を主とし醫、理、化の三學科を設き其敎師は今回米國より歸朝したる康、石二女史其他の大家閨秀を聘する筈なりと云ふ◎飯田子守敎育所　信濃下伊那郡飯田町中村七五郎氏等主唱にて本年六月以來同町小學校內に子守敎育所と稱するものを設けたるが昨今入學の子守二十餘名あり其敎授科目は修身讀書算術唱歌手工の五課にして授業時間は每日午後二時間其經費の如きは有志の義捐金を得て支辨し居れりと◎松島瑞巖寺　松島瑞巖寺の本殿は維新前伊達家に於て大修覆を加たるのみにて爾後三十餘星霜を經たれば從つて腐朽に屬する個所も少なからず此の儘に措かば古刹を朽廢に屬すべきを以て過般大修繕を爲すことゝなり既に內務省古社保存會の檢査も經たるにより相應の補助費も下附ある筈にて目下宮城縣技手山添喜三郎氏擔任者となり設計目論見中なるが何分屋根悉皆を取拂て朽腐の個所には皆接木なすなど中々の大工事にて總工費二萬圓を要すべし◎藤樹書院　滋賀縣高島郡青柳村大字上小川なる藤樹書院愈全國の有志に檄して維持方法に付全國有志者に檄し寄附金募集の計畫あり其維持費總計金三萬五百圓とし內譯金二萬圓を維持資金但公債證書、金一萬圓を書院寶庫門塀修築費金五百圓を雜費の見積◎慈善市開會　過九日十日兩日午前九時より午後五時迄小石川上富坂町卅九番地新數神學校に於て獨乙國有志婦人より傳道會社資金補助の爲め寄贈し來れる物品を以て慈善市を開會せり。

兒童及蠻人の理想

伊國ロムブロソー夫人稿

日本　ＹＫ生譯

農夫は其畑に種子を投し耕耘す然れとも其地は既に彼等祖先の耕作せるものなり吾人心田の拓殖亦然らすや吾人――壯齡なる而して文化せる――吾人は今日能く事物を論すと雖も其基礎は既に世に存する理想に本つくものにして吾人は實に之に依り尙は進て眞理を發見せんことを勉めつゝあるなり

然れとも吾人が未た此等の理想を懷く以前に在ては吾人は如何に事物を推考したるか？何をか判斷の基礎とせしものぞ？吾人か心頭に最も感せしめし現象は何ぞや而して如何に感せしものぞ

此怪妙なる思想界の初端を描出し且其如何に發達せしやを少しく知らんと欲せは宜しく童兒及蠻人に就きて以て彼等之觀察せよ

吾人か毫も怪まさる所のものにして稚兒及蠻人は以て奇異となすものあり彼等は天然物理界の法則を知らす然れとも彼等は絶えす其眼邊の現象の如何に解し難く而して如何に奇異なるやを觀するならむ

童兒（四才）あり山上に遊て數多の巨巖怪石を見て問て曰く『誰ぞや此巖石を此に運ひし者は？』是れ蠻人の均しく疑問とする所なる可く彼等は巨人の力獨り能く之を運搬し得べきものとするなるへし

一童兒（五才）は其家人か潤濕せる麻布を戶外に置き其乾燥せるものを內に入るゝを見て怪み問て曰く『濕氣は何處に去りしや？』是れ實に彼か以て異常とする所にして彼は未た蒸發の法則を知らざるなり又曾て其慈母に伴はれ肉片を納めたる手籠を携え市場より還り來りしか二獵犬は遠方より駈け寄り彼に逼り鮮肉を嗅き居たりしか幼兒は曰く『彼は如何にして肉片なりしを知り得たるが彼は肉片を見ざりしに！』

童見(三才)あり郵便脚夫が日毎に書翰を送達するを見て怪み問て曰く『脚夫は如何にして此書翰の我等に送達す可きを知るや？』此方形の小翰袋か正しく到達せらるゝことは彼が見て以て解し難きことゝする所なる可し

此事柄は亦同じく蠻人にも徹し得べきものにして彼等は讀み書きの道を知らず故に千里隔絶せる人々が此一小紙片に依りて通信報告を爲すを見て以て妖魔の力に歸したり彼の蠻人の奇怪なる習慣の起因實に此に存す即ち其病を治せんが爲めに醫師の處方箋を食して服藥に代えたるが如き是れなり蓋し彼等が初めて文字の功用を知り之を尊崇するに出でたるものなり

此點につき珍話尙ほ一にあり

カルヴヱーは曾てインヂヤンに或書籍を示し其欲する所を披かしめ其幾葉目なるやを言へり（葉面の數字を讀みつゝ）彼等は以爲らく書籍は靈あり故に彼に敎示して答えしむるものなりと

又一蠻人をして或所に麵包を送らしを添ゆるに書翰を以てし其數量を記したりしが彼は其麵包の幾分を竊かに盜み食し書翰は確かに送達したりしかば彼が惡事は忽ち露現せり然るに他日同使命を帶びて出立ちしが還た之を盜み食ひつゝ彼は書翰を一石下に埋藏し惡事發現の豫防を爲したりと云へり

兒童は決して此の如く甚しきに至らず何となれは吾人は彼等が思想發達の放恣なるに一任せず日常之を叱正訓戒し以て正道に導くことを怠らざればなり

然るに兒童及蠻人を通じて徹し得べきことは自他無別の觀念是れなり彼等は天然的に信ずらく凡ての物は彼等の想像する如く活動するものなりと此習慣の痕跡は今日猶は吾人をして何氣なく或物に對して起さしむる觀念に於て見るを得べきものにして吾人は若し一盃を遺失すれば曰はく『可憐の盃よ！』藉を失へる人は曰く

『我轄は號叫す』伊太利に於ては或物にして人之を觸れずして自から動くを見れば曰く『何をか望む』と

一幼兒(四才)は一小箱を弄し居たりしが其蓋を閉つるを得ず遂に怒りて之を罰せんとて一室に幽したり而して彼は其戸を閉ぢつゝ其母に謂て曰く『兒は我箱を一室に投せり彼れ獨居の無聊に堪えず今や善人たるを學びつゝあらむ』と

余が見し一幼女(五才)は手に把る物毎に之れと語れり『咖啡壺よ汝は何をか望む?――水――見よ彼處に、汝は火上の燒死!とは太甚だ熱し――咖啡成熟する遠からず堪忍せよ――汝は悪人なり!』

四才の一幼兒は過ちて卓に其頭を觸れ之を槌ち之を罵れり

ヘテラムの譚に曰く北米インヂヤンは釣するに兩絲を共に垂れず蓋し其互に獲物を羨み嫉まんことを恐れてなり而して彼等は未だ使用せざる滿掌の漁鉤を得しより既に大魚を釣り獲たる一鈎を欲すと

ボシマヌは弓矢にして一たび命中せざりしものは之を嫌忌し其正しく射透したるものは二倍の價あるものとなせり

彼等は信ずらく啻に動物のみならず木石菓實も亦心靈ありとブレジルのインヂヤンは石の爲めに躓き又矢の爲めに毀傷するときは之を嚙み南亞米利加に於ては若し樹木倒れて人之が爲に死すれば其家族は之に斧鉞を加え之を寸斷し以て其讐を報ゆべきものとせり

コシエレシーヌの近代の或王は若し其船舶進航を能くせざれば眞の犯罪人の如く之を刑場に曝したり

最も奇なりとすべき一例は亞丁の訴訟法是れなりプリタチの裁判所は其職務として無性物例へは斧、石、木片の如き人之に干與するなくして或人を死に致したるときは殺人犯として所擯を命せられたり

現今の習慣に依りて見るも惰性物は凡て生命あり心靈

ありとする觀念の痕跡を見るを得へし日耳曼にては若し家の主人若くは主婦の死するあれば使者は悄然として其庭園の蜂巣又は小舍の家畜に凶事を報するのみならず各麥藁は爲に痛悼し而して凡ての家具は集會せざるべからず其主人は旣に溘焉世を去りしを知らしむる爲めなり

兒童は物に心靈あることを明かに信せざるときと雖も尙ほ天然界の現象を臆斷す而して彼は其旣に知得せる事物の歸納に依るにあらずんば其未知の事物を判斷すること能はず

一童兒(四才)は問へり『山岳は家屋の如く錬火石を以て建築せられたるや?』同齡の一童兒は嘗て滊車の烟を見たりしが數日を經て天邊の雲を見て曰く『見よ彼の烟を』

一少女に月の水平線上に昇るを見て曰く『月は歩めり』而して屋後の殘月を見て曰く『尙ほ一の月あり』と彼れの考ふるや論理的なり即ち月の彼此に現はるゝは是れ歩む故なるべし然らずんば數多の月あるべし

童兒(四才)あり月を見て曰く『足なき月は如何にして歩行し得べきや?』

アドルフ(三才)は曰へり『然れとも月か其天上に在らんには羽翼なかるべからず』蓋し月の懸て空中に在らんには羽翼に依らずんば遂に爲し能はざるものと考へたるなり

一少女(四才)は問へり『誰ぞや此美球を天上に居きし者は?』

アダム夫人の二幼女は或夜其祖母と庭園に遊びしに驟て小雨を催せし故入りて室内に談話し居たりしか一人は曰く『如何に不幸なる月は濡れ初めたり』祖母は曰へり『否、憂る勿れ月は雲上に在り』他の一幼女は曰く『月は泳くなり』と

或畵師の幼兒(三才)は問ふて曰く『空中に月を畵きし

者は誰ぞや？』と彼は繪畫を知れり故に月は畫かれたるものと信ぜしなり然れども其誰手に成りしを知らざりしなり

一幼兒（四才）は月を眺め居たりしが『月は火なり彼は燃ゆ觸れ寄るべからず』と曰へり

リユイシゼリの少女は弦月を觀て曰く『月は壞れたり只一片あるのみ』と

或啞人は天躰を以て彼が身邊を圍繞する物と相均しきものなりと觀念せり彼は思へらく月は卓上の玩球の轉ずる如く廻轉するものなり星辰は剪刀を以て月を切り長空に配布せるものなりと

チロールは其著書の一節を擧げて原始人及蠻人に對する觀念を述べたり蓋し世界開闢の始めに於ては日月を以て生物とし人の性靈を備えたるものとしたり彼蠻人をして天躰を以て人類と同一視せしめたる觀念の如何を知らんと欲せば宜しくインヂヤンアルゴンケンと傳道師との間に試みたる日、月蝕の談論を一讀す可し

余は彼等に問へり『月は何處に去りしや』彼等は答へて曰く『月は其一愛兒を抱きしを以て其光は爲めに遮らるゝなり』と

『若し月に子わらば彼は婚せしや』『然り、彼等は曰へり、日は其夫なり日の光なきは彼と月との間に設けし愛兒を抱きしに因るならむ』

『夫れ然り然れども日月は手腕を有せず』と余は彼等に曰へり

彼等は答へて曰く『日は常に手に滿引の弓を持せるを以て其腕は爲めに見えざるなり』と

基督敎徒が彼異敎徒の喇叭を吹奏しつゝ日蝕を止め得べきものとする迷信を排却せしは十七世紀の頃に過ぎざりしなり

カライブは月蝕を以て其病み死し若くは飢ゆるが爲めなりと想像しベリユーヴ人は日蝕を以て其慍りとし

月蝕を以て其疾に罹りたるものとせりダコタの觀念に依れは雷は巨鳥なり故に其趁けるや迅速なり而して其翼々たるや許多小雷鳥之を爲すものにして落れは人の害悪を爲すものなり恰も訓戒に從はさる悪少年の如し而して老雷鳥は賢良にして何等の災害を爲さず何人をも殺傷せさるものとせり

幼兒蠻人は無性物を以て彼等と同しき生命を有するものと想像する如く彼等は神聖の靈能妙力を知らず故に古の人民は神に躰あり情欲あり人と相交り生活するものとせり彼等は時に或は其崇拜する偶像を冒瀆し或は報謝せりスペンセルか蠻人につき述へたるものを見るに彼等は其神の愚昧を利とし神前の供物の美麗を誇張し神を欺罔して自家の幸福を要むと云へり

此點は稍宗教に感染せる兒童に認むる所なり而して彼等は毫も宗教の徴旨を悟らす只其皮相を解するのみ一幼女(四才)は聖母か聖兒を抱くの額を見て曰く『何故に聖母は其兒の縚なきを看過するや其寒を思はさるか？)

幼女(四才)あり其母其不賢を責めつゝ幼兒基理督か能く書狀を作りしを說き示しかば彼は頭を搖り答へて曰く『兒は之を信する能はす生れて未た幾ならさる幼兒か如何そ書狀を作り得へきや

一幼女(七才)は其母を窘めて曰く『兒は人の基理督を以て聖母よりも賢なりとするを解する能はす小兒か大人よりも博識なりと云ふを得べからざれはなり』或日彼は又曰へり『若し聖母か世界を作りしならば最も美しきこととなりしならむ神は一物なくして世界を作れり聖母は斯く數多の物を以て作るを得べければなり』

五才の幼女は問て曰く『基理督は如何にして天に上りしや』彼け天に達するの階梯を見ざりしなり！

五才の小兒は或寺院に至り基理督か十字架上に慘刑せ

らるゝの圖を見て其説明を求めたりしに或人之に『人類の爲めに大變の爲めに殺されたり』と告げしかば彼は曰へり『基理督は如何に痴者なるよ、空しく殺さるゝに任すとは、若し余なりせば余は天上に飛上る可かりしに！』

基理督昇遐の日余が朋の一幼少(七才)は惡戯を爲せしを以て母は之を戒め且曰く『然らずんば神は汝を罰せん』と彼は之に答へて曰く『神若し逝かは如何ぞ兒を見るを得んや』と

他の一幼女は思へらく神は何事も其欲する所を爲し得べくんば一年兩度クリスマスを爲し得べしと

或童兒は其母幼女を喪ふて涕泣するを見て慰め曰く神は『憲兵と共に行て幼女を搜索し拗え來るべし』と

ジャムソン夫人の或著書に曰く「余は既に自から幼童にあらざるを知る然れども余は猶ラザール及ジャンバプチスト、エロード長者の存在を信せりさまりてんは聖徒と同じく實に存在せし人なるか如し敎育不十分なる人の兒童の多くは聖書を讀みつゝ此等の事を以て絶對的の實事なりと信する同傾向あるは余の久しく觀來る所なり」微旨の比喩の中に寓するを知らずして文字の表面に着眼するに今日吾人が猶ほ目撃する所にして回々敎徒はわらを讃頌するを以て比喩的に意味せす直に其文字の如く石として會得せり

人各其額に描かれたる命運を有すと云ふの諺は有形的に解釋せられたり是れ人の命運は其腦蓋組織の像形する字態に依りて徵證し得るものなりとの迷信を生せしめたるものなり

セスタロー夫人の幼兒(四才)毎日神前に祈禱を爲して曰く『神よ余は我心腦を爾に捧け長く爾の有に歸す』と或夜彼は其心を與へ而かも永劫之を與へんと云ひしことに思ひ至り忽ち涕泣して曰く『余は猶ほ之を欲す余か小なる胸を、そは余か胸なり』と譬喩的の意象は

瞬間に實事と混同したるなり

以上述へたる所は幼兒蠻人の觀念の一例に過きす而して彼等の未來、死、及時等に關する觀念を述ふる亦益なしとせす他日此點につき一言を試みるを得ば余か幸とする所なり蠻人原人半開人の兒童は其思想の混雜尙ほ甚たしきものあり是れ生物社會學の研究に於て亦玩味すへき點なり

小兒の思想は吾人か見來りし如く不完全にして誤謬多しと雖とも是れ其推理の方式不完全なるに依るにあらすして寧ろ其些少の經驗に依り知り得たるものに準據して直に判斷するか故なり彼等の未知數を算出するの基準は彼等の既知數に外ならさるなり爐邊の談話庭上の草木其他凡て彼等か日常見聞するものは後來彼等か依て以て事物を測度する所なり童蒙の知識を發達し其德性を涵養せんと欲する者留意せざるへけんや

和洋禮式

西洋禮式（男子の態度）

名刺と訪問（一）

名刺は訪問には最も必要なり、敎育ある人民は能く之を活用す、現今一定せる名刺の大きさは三インチの一半形なり、用紙は純白にして光澤あるものを撰むべし、書躰は意太利文字なるを要す。

自己の名の上に Mr を附するは失禮なりと一部の社會に言ふものあれど、然らず、Mr 又は Sir 其他を冠せしめて毫も差支なし、何となれば自己の位地を明に表白すればなり、名刺の左方の隅に宿所を加え置くべし、又其次へ其人の所屬（たとへば其倶樂部）の名を記すべし、定りたる位地なき人は單に名のみ印刷して差支なし、後にて位地定まらば鉛筆にて書き加えてもよし。

訪問の時間は午後四時より七時迄の間とす、然れども訪問の家と懇親ならざる人は六時後の訪問は遠慮すべし。

戸開かれなば『ブランク夫人は御在宅ですか』と訪ひ、取次人の確答を待ちて僕婢に從ひ内へ入るべし。

外套は着したるまゝにて宜し、併し脱ぎても差支なし、併し帽子を手に持ち、「ステッキ」も携え居るを要す。

右手の手袋は脱ぎ去るべし、決して手袋のまゝにて握手する勿れ。

客間に案内さるゝも、帽子は手に持ちたるまゝにて、左手の手袋も嵌めたるまゝにてよろし、主婦來らば會釋し、握手（此方より手を出すべからず先方を待つべし）終りて後室内を見廻はすべし、家族と知己の間なれば家族と面會して差支なし。

椅子を與えられし時は帽子は倘手に持ち居るべし、先方より帽子を置場を示して『御帽子をお置きないませんか』と言はれなば、其言に從ふべし。

主と接するに帽子を手に持ち居るは甚だ禮なきやうに聞ゆれども、今直ぐに立歸るといふ意を示し、成るべく先方へ迷惑をかけぬといふ精神より出でたる習慣なり。併しこは突然の訪問の場合なれど、先方より招待せられし時は始より帽子も外套も脱せざるべからず。

懇親の目的なく單に訪問する時は、名刺を出すに及ばず、僕婢より名を問はれし時に明白に其名を告ぐべし、譬へば戸が開かるる時明白なる音聲にて高音に姓名を明すべし、若し主婦が其名を理會せざるやうの態度見えなば、再三自分の名を呼びて先方の記臆を呼び起すべし、而して用談をなすべし。

訪問者の立歸る際、室の卓子上に名刺を置くべし、家族中の婦人達に一枚、男子達に一枚、男子達には在宅と不在に係はらず、必らず一枚を置くべし。

訪問したる婦人不在ならば、名刺は僕婢に渡し置くべし。

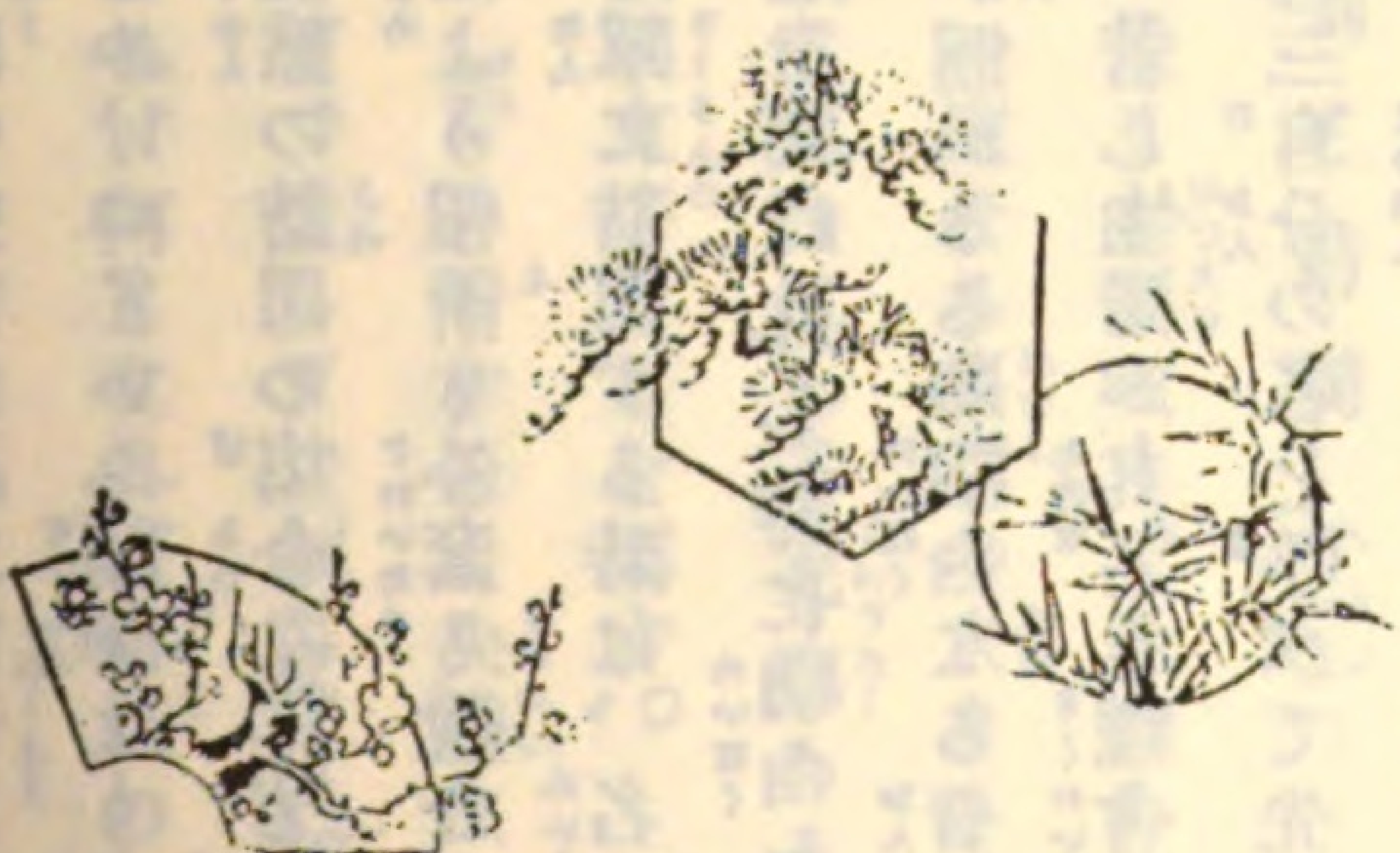






訪問したる婦人不在ならば、名刺は僕婢に渡し置くべし。





○小兒○

はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味渺きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓

が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虚弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身体となること疑なし

○咳嗽及風邪○

は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身体を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコット乳菓

は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を强くして活力を與ふるこそ實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の界て[illegible]するところなり



○スコット乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて[illegible]の旨御申越あれば無代價にて呈す

左の大取次所の外各[illegible]捌き居れば御購求ありたし

横濱境町
仝　境町
仝　太田町
東京本町四丁目
仝　室町
仝　本町三丁目
大阪道修町二丁目
仝　道修町二丁目
仝　道修町三丁目
仝　道修町二丁目
仝　道修町二丁目
仝　道修町二丁目

[illegible]

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）
（明治三十年十二月十五日發行）
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地[illegible]

復刻版 家庭雑誌 第2回配本（第6〜11巻・別冊1）

1987年1月10日 発行

定価 108,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版㈱

東京都文京区本郷5-28-3

〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）（明治三十年十二月十五日發行）東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 [illegible]

復刻版 家庭雑誌 第2回配本（第6〜11巻・別冊1）

1987年1月10日 発行

定価 108,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版㈱
東京都文京区本郷5-28-3
〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房

乱丁・落丁はお取り替えいたします。